

大分県岩戸遺跡における三調査の整理と再評価

— 本石器群の層的事例と九州地方の旧石器時代編年 —

柳田 俊雄

東北大学総合学術博物館

Reevaluation of the Late Paleolithic Industries excavated at the Iwato site

TOSHIO YANAGIDA

The Tohoku University Museum, 6-3 Aoba, Aramaki, Aoba-ku, Sendai 980-8578, Japan

Abstract: The Iwato site is located in Bungo-ohno-City, Oita Prefecture, Kyushu, Japan. This site was excavated three times. The first term excavation was practiced by Prof. Serizawa of The Tohoku University in the summer of 1967. The next excavation by Prof. Sakata of The Beppu University in the winter of 1978 was the 2nd term. The next excavation by Kiyokawa-Village in the autumn of 1978 was the 3rd term. About 2,500 stone implements were found from these excavations. The Iwato site is one of the most important site for our understanding of the chronology of late palaeolithic in Kyushu island. In this study, I aim to rearrange the result of three excavations

I set five stages of cultural horizon from the late paleolithic industries based on Aira-Tanzawa tephra (AT) and Black-Band in this site. Namely the cultural horizons above AT were divided into two industries. Those below AT, were divided into three industries. Based upon this reevaluation, it was possible to establish the Paleolithic chronology in the Kyushu island.

はじめに

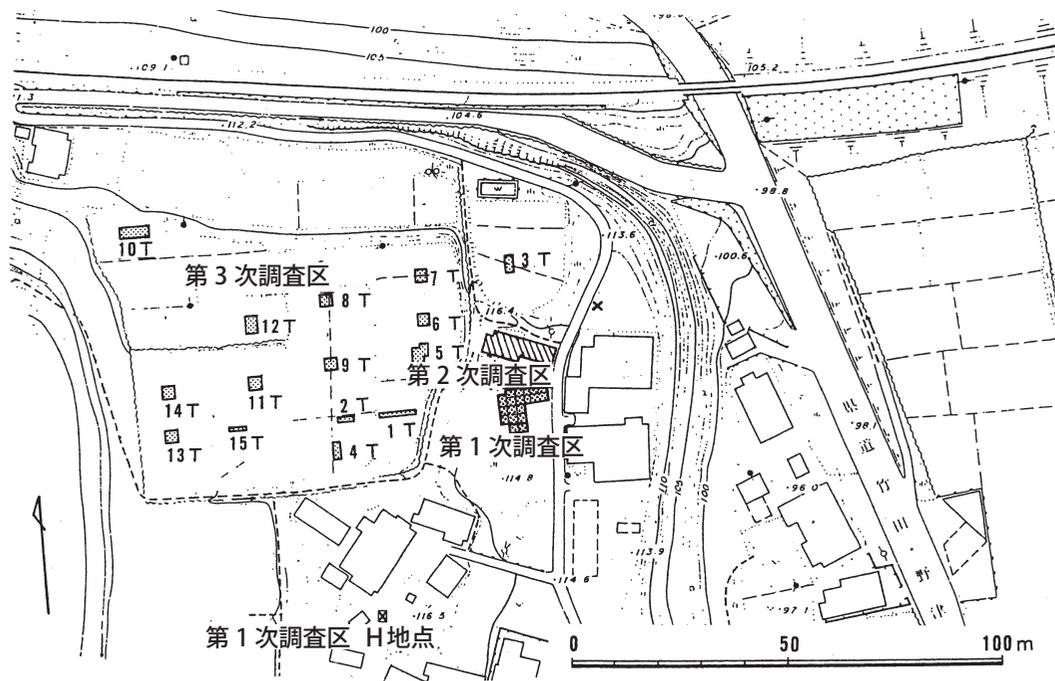
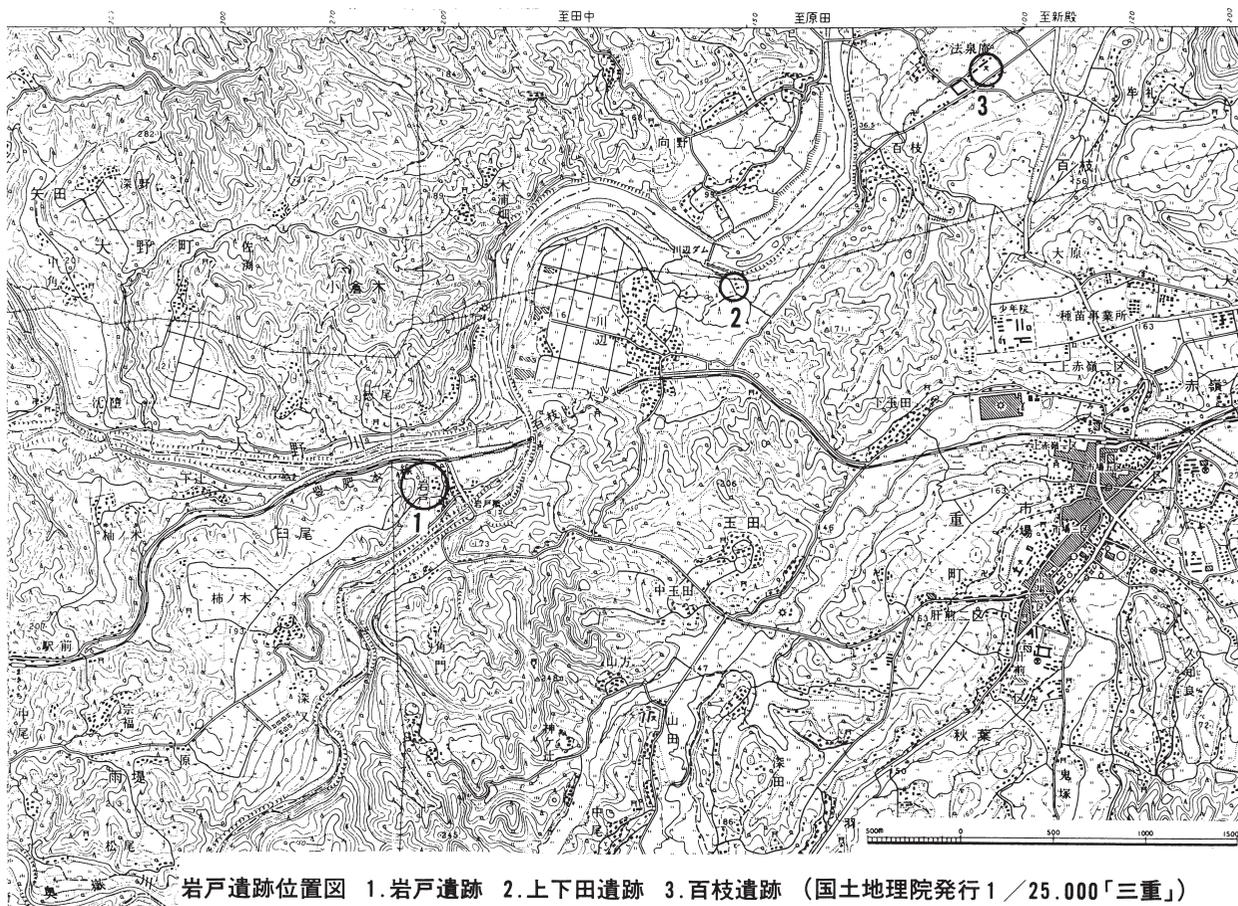
東北大学は、「研究第一主義」の理念のもとに、多くの新発見、発明の歴史をもち、それらの研究の基礎となり成果となった240万点をこえる資料標本、機器類の莫大な蓄積をもっている。これらは常に研究者、一般市民を問わず、それぞれの見方や目的にあわせて新たな価値を見いだせる共有の知的財産といえる。学術資源研究公開センターの総合学術博物館はこれらの貴重な知的財産を集中的に保管・管理し、データベース化をすすめて、研究者・学生に公開し、分野をこえて広く研究・教育の資源として利用できるようにしている。蓄積された考古学資料群の中にも以前調査された中に一括性の高い質の優れた資料があり、それらを随時アーカイブ化し、研究をすすめて、公開していくことが重要な作業の一つと考える。

本学文学研究科には、1967年に東北大学芹沢長介名誉教授によって発掘調査がおこなわれた大分県大野郡清川村(現豊後大野市)に所在する岩戸遺跡出土の石器類がある。当遺跡から3枚の旧石器時代の文化層が確認され、層位的に発見された最上位にある第1文化層では、約1,900点にのぼる石器と礫が出土した(図版1-1)。特に、この文化層中からは日本でも珍しい「コケシ形石偶」が発見された(図

版1-2)。1978年には文学部考古学研究室から『資料編2-岩戸』が刊行され、現在でも岩戸遺跡の石器群は九州地方、あるいは西日本の代表的、かつ重要な資料となっている(芹沢編 1978)。資料編刊行後には、遺跡整備のための発掘調査(第2・3次)が二回に渡っておこなわれ、新たな考古学的な資料の追加とテフロ・クロノロジー側から貴重なデータが提供された(坂田 1980, 清水ほか 1986)。特に、前者からは後期旧石器時代の研究に活用されている始良Tn火山灰(AT)の位置が本遺跡で判明し、岩戸第1文化層の年代観が具体的となった(町田 1980)。

1983年には岩戸遺跡は旧石器時代の国史跡に指定されている。岩戸遺跡第1文化層の石器群に関しては、すでに三つの論文が発表され、「コケシ形石偶」について世界史的な視野からの評価(芹沢 1974)や、日本列島内での系統と年代的な位置づけが検討された(平口 1976)。筆者も1983年に『岩戸遺跡資料編』で提出された資料を基に、岩戸遺跡第1文化層石器群の分析と九州地方での編年的な位置づけをおこなった(柳田 1983)。

今回の本稿の目的は、『資料編2-岩戸』刊行後に発掘された資料群(第2・3次調査)を層位ごとに再度整理し、岩戸遺跡における後期旧石器時代石器群の変遷観を具体的に明らかにすることである。すでに、第2次調査資料は坂



第1図 岩戸遺跡の位置と周辺の遺跡 (上)・第1～3次調査のトレンチの配置図 (下) (清川村 1986 より)

田邦洋氏(坂田 1980)、第3次調査は清水宗昭氏・須田良平氏・柳田(清川村教委 1986)によって報告がおこなわれている。しかし、岩戸遺跡内の資料群全体のまとめと評価はなされていない。ここでは、刊行された岩戸遺跡の三報告書《①『資料編2—岩戸—』(芹沢編 1978)、②『大分県岩戸遺跡—大分県清川村岩戸における後期旧石器文化の研究—』(坂田 1980)、③『岩戸遺跡—大分県大野郡清川村所在旧石器時代遺跡第3次発掘調査報告—』(清川村教育委員会 1986)》の資料や図面類を再整理し、先に示した筆者の拙稿(柳田 1983)に手を加え、本資料群の再評価をおこないたい。さらに、近年、新資料の増加と研究の進展が著しい、九州地方の旧石器時代編年研究にも岩戸遺跡の層位的事例から検討を加えることにする。

1. 岩戸第1文化層出土の石器群の分析

1) 岩戸遺跡の位置と周辺の遺跡(第1図上)

遺跡は大分県大野郡清川村(現豊後大野市)白尾岩戸に所在し、大野川に奥獄川が合流する河岸段丘上に位置する。大分県と宮崎県の地域が一般的に東九州と呼ばれている。岩戸遺跡のある大分県は北東部が瀬戸内海に面し、西側が九重連山や阿蘇山、南側が九州山地の北に位置する祖母、傾山などによって囲まれている。河川は有明海に流れる筑後川を除くと大部分が周防灘、別府湾、豊後水道に流れこみ、それらの流域では河岸段丘を発達させている。なかでも大野川流域では、阿蘇や九重を供給源とする火山灰層の発達著しく、多数の旧石器・縄文時代の遺物が層位的に発見されている。1967年に東北大学の芹沢長介氏は岩戸遺跡を発掘調査し、後期旧石器時代の文化層を3枚発見した(芹沢 1967)。この調査が東九州地域の火山灰層の中から層位的に旧石器を確認した最初の発掘となった。その後、別府大学賀川光夫・橘昌信の両教授の指導の下で大分県や各市町村の教育委員会などによって旧石器時代の遺跡が発掘調査され、大野川流域のフィールドから多く成果が続々と発表された。

2) 岩戸遺跡の発掘調査

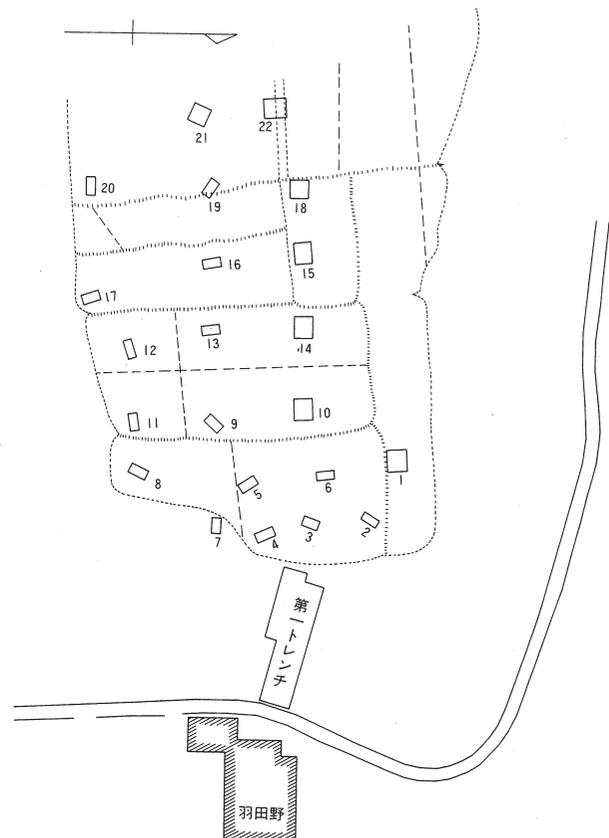
岩戸遺跡の発掘調査は3回おこなわれた。第1次調査は、1967年8月に東北大学の芹沢長介氏によって行われ、この時、3枚の旧石器時代の文化層が確認された(芹沢編 1978)。1979年2月には、別府大学の坂田邦洋氏によって第2次調査が行われ、第1次調査区に隣接する北側地区が発掘された(坂田 1980)。このときには、11枚の旧石器時代の文化層が確認されたと言う。さらに同年10月には、清川村教委と大分県教委によって第3次調査が行われ、旧石器時代の文化層が3枚、縄文時代の包含層が2枚確認された(清川村教委 1980)。第1図下は遺跡の地形図と第1~3次の発掘調査区トレンチの位置である。遺跡はゆるい傾斜地を利用した4枚の段をもつ畑地である。比高は第1・2次の発掘調査区が最も低く、第3次調査の第1・2・4トレンチの設定区がこれよりもさらに高い場所に位置していることになる。第1・2次の発掘調査区がすでに豊肥線の鉄道工事にもなつて削平されていた。

第1次の発掘調査では2ヶ所の地区でグリッドが設定された。北側に設定された第1グリッドは98㎡である。豊肥線の鉄道工事の土取作業で削平が厚さ約2m程度なされ、その直下から岩戸第1文化層が確認された。また、部分的

に深掘した下位の層中からも石器が2点発見された。これを第2文化層と呼ぶ。もう一箇所の発掘区は第1グリッドの南西部へ約50mに位置するH地点で4㎡が発掘された。赤褐色のソフト・ローム下位、段丘礫層直上の明褐色のローム層からは18点の石器類が発見された。

第2次の発掘調査は第1グリッドの北側約4mに位置するところにトレンチが設定された。このトレンチは面積が20㎡で、東西10m、南北2mのものである(第2図)。ここでも上部が削平を受けており、その直下から岩戸D文化層が発見されている。第2次調査を担当した坂田邦洋氏は、第1次にも参加しており、岩戸第1文化層と岩戸D文化層は同一層があることを報告書に記載している。両者の平面の出土状況を見ると、第1次ではグリッド全体に遺物がみられるものの、幾つか集中区がみられる。一方、第2次調査ではグリッド内の出土状況を示す遺物のドットでの表示が見られないものの、327点の石器類が発見されており、第1次調査の遺物の拡がり北側まで伸びる様子が窺える(第3図)。また、このトレンチからは炉跡や集石墓も検出されたという。集石墓の中からは人の歯冠が発見されている。第2次調査ではこの他に、22ヶ所のグリッドが試掘されている。

第3次の発掘調査は、清川村と大分県教委によって行われ、第1・2次調査の西側の水田部分全体を対象とした。水田部分は東西80m、南北50mの範囲である。西端部で畑地部より約1m高く、東に向かって緩やかに高くなって



第2図 岩戸遺跡第2次調査のトレンチの配置(坂田 1980より)



第3図 岩戸遺跡第1・2次調査のトレンチの位置 (芹沢編 1978・坂田 1980 より)

おり、比較的当時の旧地形を残している。ここを中心に約3×3m規模のトレンチを15ヶ所設定した。この調査では旧石器時代の文化層が3枚、縄文時代の包含層が2枚確認された(清水ほか 1986)。第4トレンチ(32㎡)の第6層(褐色のローム層)からは石器・礫片が439点発見され、それをヴィーナス曲線によって上下2枚の旧石器時代の文化層(岩戸6上層石器群—315点、岩戸6下層石器群—118点)の存在を確認した。また、黒色帯に相当する第8層からも3点の石器が検出された(岩戸8層)。また、第1トレンチからも岩戸6上層相当の石器群が98点発見された。

以上、第1～3次調査の発掘面積は以下のようになる。

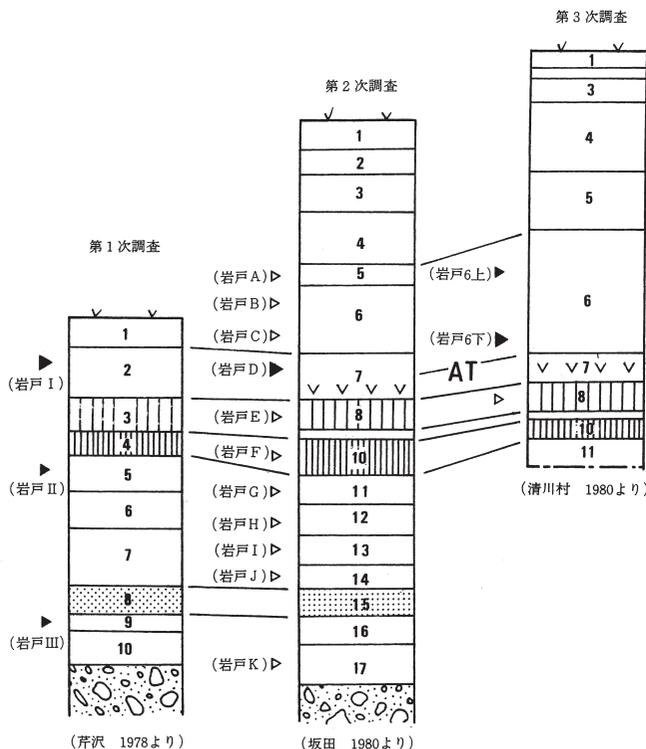
- 第1次調査 1967年 102㎡
- 第2次調査 1979年 130.5㎡
- 第3次調査 1979年 32㎡(第4トレンチのみ)

3) 基本層序の整理 (図版1-3)

第4図は1～3次調査で確認された岩戸遺跡の基本層序と出土遺物の位置をあらわしたものである。層序については、表土から基盤となる段丘礫層まで通して深掘された3次調査の第1トレンチで観察されたものを中心に記載する。

第1層は黒色の表土層。

第2～5層までが黒褐色の縄文時代の包含層。第3次調査の第4トレンチでは第4層中に、アカホヤ(Ah)と呼ばれる火山灰がブロック状にみられた。この上位から後期や晩期の土器片が出土した。第5層の上部からは早期の押型土器片が検出された。



第4図 岩戸遺跡の基本層序 (柳田 1983より)

第6層は褐色のローム層。軟質部をソフト・ローム層、硬質部をハード・ローム層と呼び、細分した。第2次調査ではソフトの部分から細石刃が発見された(岩戸A文化層)。ハードにあたる層に上下3枚の旧石器時代の文化層が存在した(岩戸B文化層、C文化層、D文化層)。また、第3次調査では、ハードにあたる層に上下2枚の旧石器時代の文化層が確認された(岩戸6層上部石器群・岩戸6層下部石器群)。

第7層は明褐色を呈する砂質土層で、全体に白味を帯び、削るとサクサクする。この層が鹿児島県始良カルデラ起源始良Tn火山灰層(以下AT)に相当する。町田氏によれば、「第1・2次調査区ではこの第7層が約50cm程度堆積し、その初生に近いものが下部にあり、上部にはこの風化土壌化したものがみられた」と言う(町田 1980)。第1次調査の岩戸第1文化層、第2次調査の岩戸D文化層の石器群はこの第7層の上部に位置していたことになる。第3次調査ではこれらの発掘区より高い場所が発掘されたのでこの風化土壌化した層が無く、第6層の褐色ローム層が直接的に約20cm前後のAT層の上位に堆積する。層位的に第6層の褐色のハード・ローム層は、第1・2次調査の発掘区で、AT層の上に風化土壌化した層を一枚はさんで堆積するのに対して、それより高い場所の第1・4トレンチでは、この層が直接的にのることになる。しかし、岩戸D文化層・岩戸第1文化層の石器群と岩戸6層下部出土の石器群は、層位的にはAT層の直上に位置したことになり、これらの三石器群が時期的に近いものであることを指摘することができる。

第8～10層は1枚の黒色帯としてとらえることができる。黒味は第8層が弱く、第10層が強い。

第2・3次調査では、黒色帯から石器が発見されている(岩戸E文化層・岩戸F文化層・岩戸—8層の石器群)。

第11～13層は黄褐色のハード・ローム層で、3～4枚に分層が可能である。第1次調査では黒色帯の直下(第11層)から岩戸第II文化層の石器群が発見された。第2次調査でも分層された層から石器が出土している(岩戸G文化層・岩戸H文化層・岩戸I文化層・岩戸J文化層)。

第14層は赤褐色のソフト・ロームである。無遺物層。この層は赤味が強く特徴的であるため本遺跡での黒色帯以下の層序の対比に有効な鍵層となった。

第15層は明褐色のローム層であるが、二層に細分され、下層では砂質が強くなる。第1次調査では岩戸第III文化層(18点)。第2次調査では岩戸K文化層(2点)の石器群がそれぞれ発見されている。岩戸遺跡ではその下位が段丘礫層となる。

以上、ここでは鹿児島県始良カルデラを起源とする、約2.4～2.5万年前に降下した始良Tn火山灰層(AT)を基準に各石器群を整理すると、岩戸遺跡ではATを挟んで大きく上下二つに分けられる。すなわち、時期的に古い方からAT下層石器群とAT上層石器群である。また、下層石器群は「黒色帯」と、その下位にある「黄褐色土層」出土の石器群とに細別できよう。さらには、「赤褐色土層」を挟んで段丘礫層直上の石器群に分けられよう。一方、AT上層石器群は「黄褐色土層」中の石器群を上部と下部に分けられる。

以下の特徴から岩戸遺跡の石器群はa～eの5期に細分できるものと考えられる。

a. 岩戸A T下層最下部の石器群

岩戸Ⅲ・Kの石器群を岩戸A T下層の最下部の石器群と呼称する。大野川上中流域では、基盤に約8～9万年前頃の「阿蘇4」(Aso-4)と呼ばれる溶結凝灰岩があり、その上に、九重第1パミス(Kjp-1)が存在すると言う(町田1980)。岩戸遺跡ではこのパミスがみられないことから、第1次調査-岩戸Ⅲ文化層、第2次調査-岩戸K文化層の石器群はKjp-1の時期(約5万年前)より新しい年代を示すものと考えられる(町田 新井 2003)。

b. 岩戸A T下層下部の石器群

無遺物層である第14層の赤褐色ソフト・ロームを挟み、黄褐色ハード・ローム層の第11～13層がのる。この層は明らかに黒味が抜けており、「黒色帯」の下位となる。色調から数枚に細分することが可能と考えられ、これらの層から第1次調査-岩戸Ⅱ(2点)、第2次調査-岩戸G(8点)、岩戸H(10点)、岩戸I(12点)、岩戸J(2点)等で合計34点発見されている。当時、坂田氏は4枚の文化層の存在を指摘しているが、垂直分布の検討、石器群の分析がおこなわれていないため、その細分には問題が残る。ここでは「黒色帯」の下位から赤褐色のソフト・ロームまでの黄褐色のハード・ローム層(第11～13層)から出土した石器を一括して岩戸A T下層下部の石器群と呼称する。

c. 岩戸A T下層上部の石器群

黄褐色のハード・ローム層の上位には「黒色帯」が発達する。「黒色帯」は間層として黄味のある薄い層が一枚入るためその分離が解りやすい。また、その濃度から2枚に分層できる。黒味は上位が弱く、下位が強い。第2・3次調査では黒色帯から石器が発見されている。上部層では第2次調査-岩戸E(1点)、第3次調査-岩戸8層(3点)、下部層では第2次調査-岩戸F(13点)で出土している。ここでは「黒色帯」の資料を一括し、岩戸A T下層上部の石器群と呼称する。この時期の資料も少ない。

d. 岩戸A T上層下部の石器群

A Tの上位から出土した石器群は第6・7層から出土したものがあげられる。第7層上部から出土した第1次調査-岩戸第Ⅰ文化層(1384点)、第2次調査-岩戸D(327点)の石器群と、第3次調査-第6層下部(118点)の石器群は時期的には同時期と考えられる。岩戸I・岩戸D・岩戸6下の各石器群はA T降下に近い時期が想定される。

e. 岩戸A T上層上部の石器群

さらに、これらの石器群の上位で発見されるものは、第3次調査-第6層上部石器群(372点)と第2次調査-岩戸B(543点)の石器群である。A T上層下部の石器群とは出土レベルや石器製作技術があきらかに異なる。さらに、第6層の最上部はローム層がソフト化されており、第2次調査では細石刃が3点発見されている(第2次調査-岩戸A)。岩戸Aの石器群は不明なのでここでは除外する。

2. 岩戸A T上層下部の石器群

- 岩戸第Ⅰ文化層出土の石器群 -

1) 岩戸遺跡第Ⅰ文化層の石器製作技術

ここでは岩戸A T上層下部の石器群に位置づけられる岩

戸第Ⅰ文化層の石器群について分析し、新たに発見された同時期と考えられる第2次調査-岩戸D、第3次調査-岩戸6下の各石器群について検討する。

a) 石器組成と石器の特徴について

石器類は100点出土した。石器組成は、ナイフ形石器、尖頭器、スクレイパー、錐形石器、彫刻刀形石器、台形状石器、チョッパーで構成されている。

ナイフ形石器：一側辺、あるいは二側縁に急角度の調整剥離をおこない、一部に鋭い刃部を残す石器である。34点出土した。調整剥離の位置によってA～Fに分類した。

A類：一側辺に調整剥離がされるもの(第5図-1～6)。

A1類は先端が尖るもの(同図-1～3・6)。

A2類は先端が尖らないもの(同図-4・5)。

第5図-1は縦長剥片の一側辺に腹面側からほぼ直線的な急角度の調整剥離をおこない、反対縁に鋭い刃部を残すナイフ形石器である。腹面側にはバルバー・スカーが見られる。

同図-2は分厚い縦長剥片の一側辺の中央から先端部にかけて腹面と背面側から外彎する急角度の調整剥離をおこなわれている。先端部が薄く尖り、中央部が分厚いナイフ形石器である。

同図-3は横長剥片の打面側の一側辺に腹面側からほぼ直線的な急角度の調整剥離がおこなわれたナイフ形石器である。先端部が鋭く尖り、薄い。背面側には素材時における多方向からの剥離痕が観察される。

同図-4は寸詰まりの幅広剥片の一側辺に背面側から「く」の字を呈する急角度の調整剥離がおこなわれている。先端部が薄く平坦で、腹面側にはバルバー・スカーが見られる。

同図-5は、寸詰まりの幅広剥片の一側辺に腹面側から外彎する急角度の調整剥離がおこなわれている。先端部には自然面が残存し、薄く平坦である。刃部となる反対側に微細な剥離痕がみられる。同図-4と5のブランディングの背・腹の位置が異なっているが、形態は類似する。

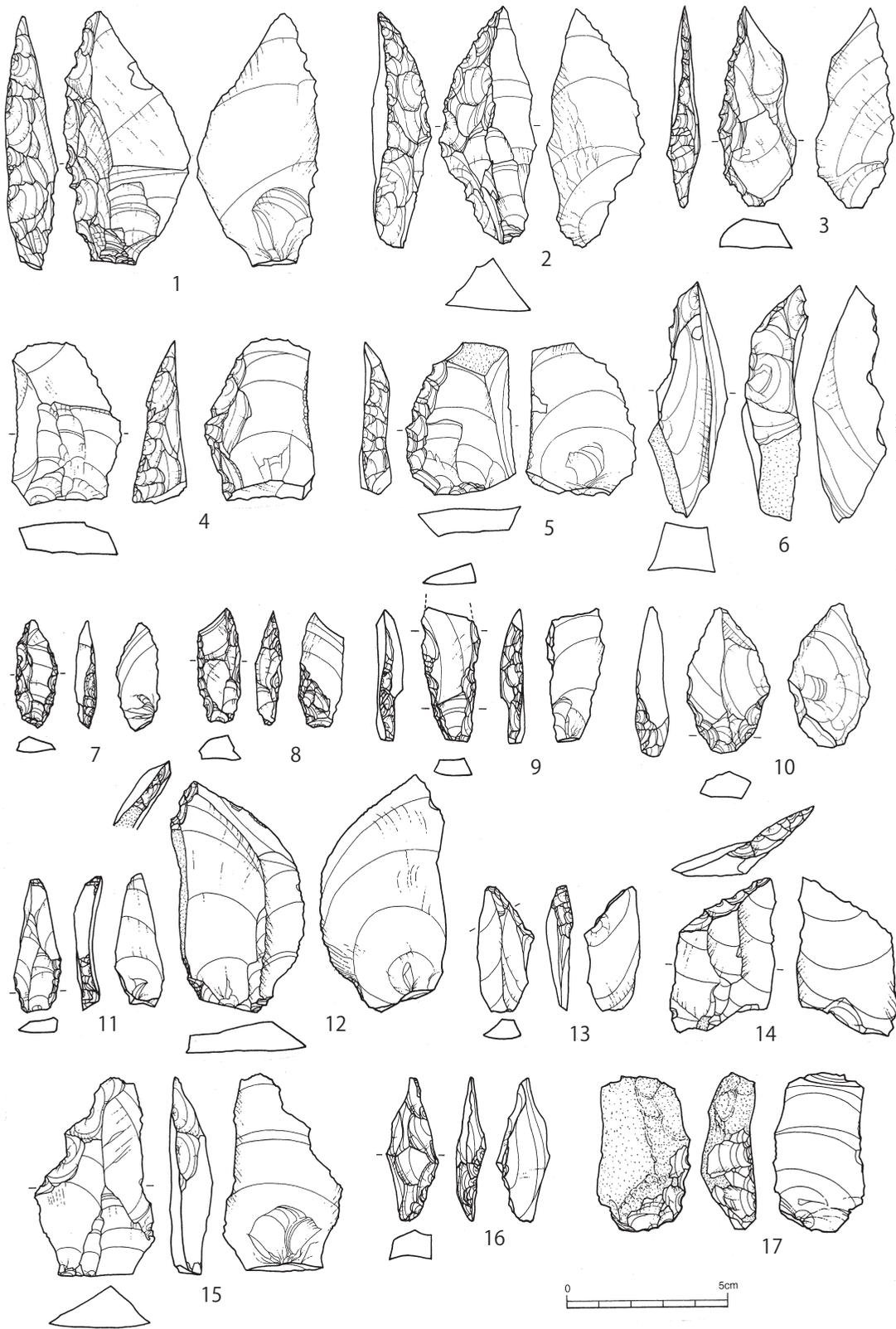
同図-6は横長剥片の打面側の一側辺に腹面側からほぼ直線的な粗い急角度の調整剥離をおこなったナイフ形石器である。先端部が鋭く尖り、厚い。本文化層で瀬戸内技法とした母岩⁴⁹と同一である。6の横長剥片には底面の存在、背・腹両面の打点の位置がほぼ同一線上に有ることが予想されることから、この素材は翼状剥片であった可能性が高い。定義上、国府型ナイフ形石器であるが、典型的なものではない。

B類：二側縁に調整剥離がなされ、刃部が斜めになるもの(同図-7・8・9)。

同図-7は、小形の横長剥片を素材として鋭い末端の一部を刃部としながら他の縁辺部を調整加工した、切出し状のナイフ形石器である。刃部が斜めになる。小形で軽量である。腹面側にはバルバー・スカーが見られる。

同図-8は小形の幅広剥片を素材として、鋭い末端の一部を刃部とし、他の縁辺部を腹面側から調整加工した、切出し状のナイフ形石器である。刃部が斜めになる。小形で軽量。腹面側のバルブの高まりは丁寧に除去されている。

同図-9は先端部が折損している。おそらく縦長剥片を素材としたものであろう。打面部を残し、その周縁と一側辺全縁に、急角度の調整剥離した二側辺加工のナイフ形石



第5図 岩戸第I文化層出土のナイフ形石器（芹沢編 1978 より）

器である。7, 8よりやや大形になるものと思われる。

C類：二側縁でも基部の一部に調整剥離がなされるもの(同図-10)。

同図-10は横長剥片を素材とし、打面と末端部が交わる部分を基部として配置し、そこに調整加工を施したナイフ形石器である。背面側には素材時における多方向からの剥離痕が観察される。腹面側にはバルバー・スカーが見られる。九州地方で呼称されている「今峠型」のナイフ形石器に類似する(鎌田 1999)。

D類：先端と基部に調整剥離がなされるもの(同図-11・12)。大小のものが存在する。

同図-11は縦長剥片の先端と基部に腹面側から急角度の調整剥離したナイフ形石器である。打面が残存する。背面側には素材時における腹面と同一の方向を示す剥離痕が観察される。また、腹面側にはバルバー・スカーが見られる。

同図-12は大形の縦長剥片を素材とした先端と基部に調整剥離をおこなったナイフ形石器である。調整痕は微細で角度が急峻ではない。背面側には素材時における腹面と同一のものと、逆方向を示す剥離痕が観察される。腹面側にはバルバー・スカーが見られる。

E類：先端のみに調整剥離がなされるものである。その形状があたかも「断ち切る」ように調整剥離がなされている(同図-13・14・15)。

同図-13は小形剥片の打面側を「断ち切る」ように急角度で調整剥離したものである。その部分は分厚い。背面側には素材時における多方向からの剥離痕が観察される。腹面側には僅かにバルバー・スカーが残っている。

同図-14は縦長剥片の打面側を斜めに「断ち切る」ように急角度で調整剥離したものである。バルブも除去されている。

背面側には素材時における腹面と同一の方向を示す剥離痕が観察される。

同図-15は縦長剥片の先端部を粗く調整したもので、斜めに「断ち切る」ように調整した3枚の剥離痕が観察される。

F類：基部の一部にだけ調整剥離がなされるもの(同図-16・17)。

同図-16は横長剥片の打面側の一部分に腹面側から急角度の調整剥離したナイフ形石器である。

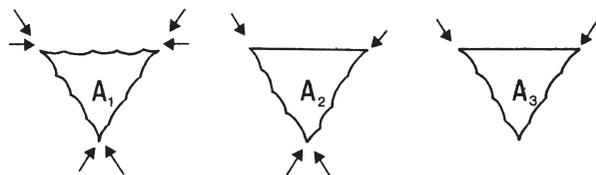
同図-17は縦長剥片を素材とし、打面の一側辺部に急角度で調整剥離したナイフ形石器である。背面側は自然面が残っている。先端部は折損している。

以上、ナイフ形石器は6類に分類されるが、「一側縁のみ調整剥離されるもの」としたA類のナイフ形石器は全体の40%を占め、この類型が最も多い。また「二側縁に調整剥離がなされ、刃部が斜めになるもの」とするB類は4点出土し、全体の11%を占める。この小形で切出し形を呈するB類は九州地方でも例が少なく、岩戸第1文化層の特徴的なナイフ形石器であると言える。また、国府型ナイフ形石器に類似するものは1点だけ認められたが、典型的な例ではない。第1次調査では、北九州で見られるような台形石器や、基部を尖鋭にした切出し状の斜め整形の二側辺加工のナイフ形石器類は出土しなかった。

尖頭器：尖頭部をつくり出した石器である。13点出土した(第6図)。

この石器は、尖頭部をつくり出した石器であるが、断面

形状が三角形を呈する例(A類)と台形を呈する例(B類)がみられる。しかし、凸レンズ状を呈するような槍先形の尖頭器は確認されていない。本稿では、A類を三稜尖頭器と呼称し、B類とは区別しておきたい。したがって、ここでは、A類のみを三稜尖頭器とする。三稜尖頭器は西日本において以前から舟底形石器(松藤 1981)、角錐状石器(西川 杉野 1957)と呼ばれている石器に類似する。A類は9点みとめられ、全体の69%を占める。さらにA類を調整された面によって細分した(第7図)。



第7図 三稜尖頭器の調整(柳田 1983より)

A類はA1類～A3類に細分した。

A1類：三面加工のもの(第6図-1～4)。断面形は三角形を呈する。凸レンズ状にならない。一面は必ず両側縁から剥離された交差する稜上に調整剥離がおこなわれるのが特徴といえる。平口哲夫氏はこの形態を三面加工尖頭器と呼んだ(平口 1976)。

第6図-1と同図-2は同一母岩の石器である。

同図-1は尖頭部、同図-2は身部にあたるが、両者は合しない。同図-1は一面に面的な調整加工が施されるのに対し、他の一面は稜が形成され、その稜から調整されている。

同図-2は身部にあたるが、三面に調整加工がある。同図-3はやや大形で、分厚く、両端が折損している。尖頭器の身部にあたるものと思われる。

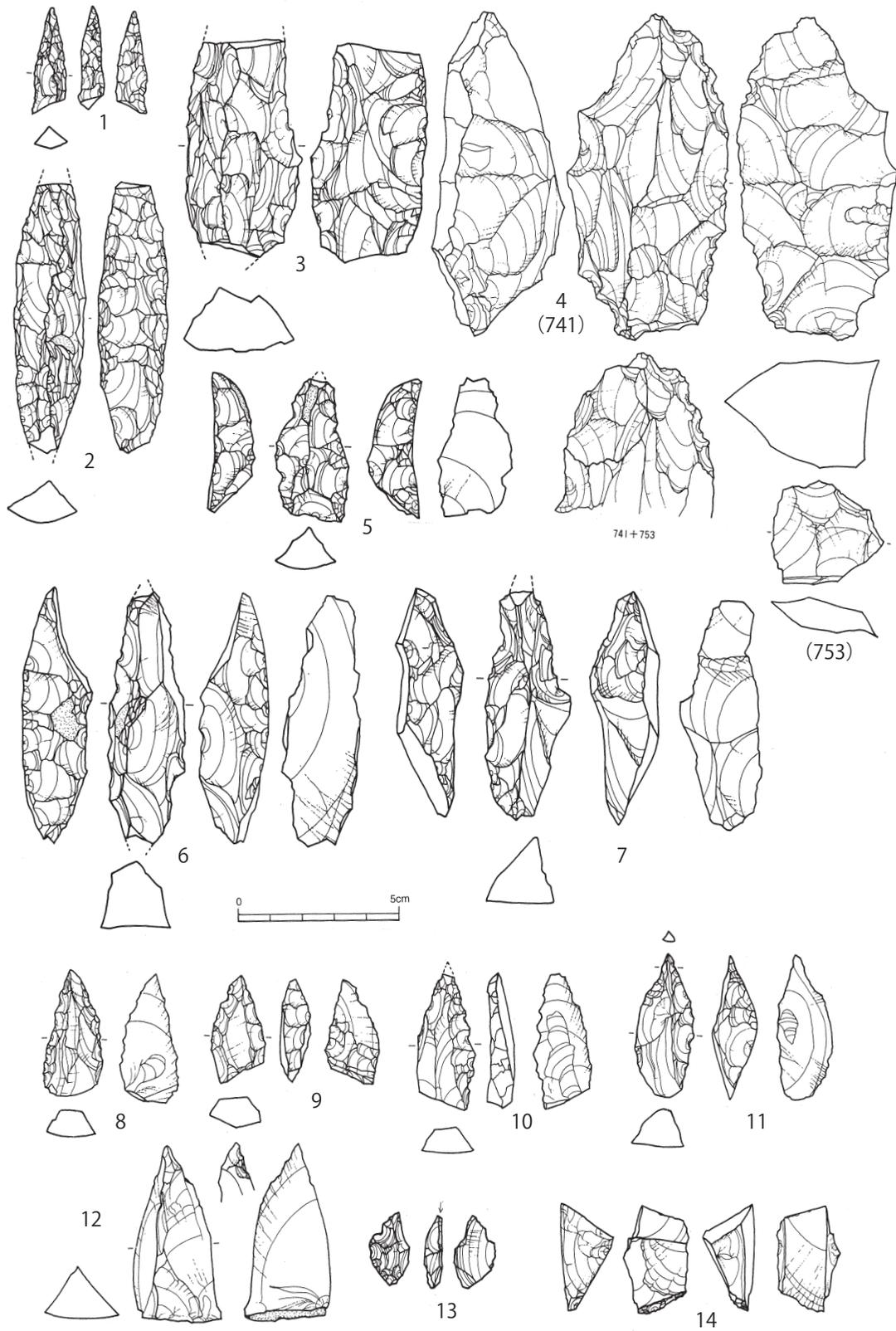
同図-4は大形で、分厚く、重量感のある石器である。尖頭部と円みのある基部を持つ。この石器に調整剥片が接合する(741+753)。同図-4は1～3尖頭器類とは機能的には異なるものと考えられるが、尖頭部を意図的に作り出していること、二次加工技術が類似することからこの類型に含めた。

A2類：一面に素材の大きな剥離痕を残し、この平坦な面から調整剥離がなされ、さらにその作り出された稜からも細かな調整剥離がおこなわれているもの(同図5～7)。

第6図-5は素材となる腹面から周縁に急角度の調整剥離をおこない、剥片の末端部を尖らした尖頭器である。尖頭部の先が僅かに折損している。剥離面が交差する中央部分の稜上にも調整剥離がおこなわれている。小形である。

同図-6は横長の剥片を素材とし、腹面から周縁に急角度の調整剥離をおこなっている。両端を尖らした尖頭器と考えられるが、いずれの先端も折損している。二面が作り出された稜の中央部からも調整剥離がおこなわれている。

7はポジティブな面を残す右位の面から、先端と基部側に調整加工を施した尖頭器と考えられる。この面は数枚の浅い剥離面が見られる。先端が僅かに折損している。稜の中央部からも調整剥離がおこなわれている。



第6図 岩戸第I文化層出土の三稜尖頭器とその他の石器 (芹沢編 1978 より)

A3類：A2類と異なって、作り出された稜から調整剥離がおこなわれていないもの。本稿では図示しない。

B類は断面形状が台形状を呈するもので、腹面側から2次加工を施して尖頭部を作り出したものである。比較的分厚いのが特徴である。4点出土した(同図-8~11)。

同図-8は縦長剥片を素材とし、その先端に尖頭部を作り出した尖頭器と考えられる。尖頭部は薄く、尖っている。打面部を残し、その周縁から加工を施している。腹面側にはバルバー・スカーが見られる。

同図-9は横長剥片を素材とし、その一端を周縁から加工し、尖頭部を作り出している。腹面側はバルブを除去した面的な剥離が見られる。

同図-10は縦長剥片を素材とし、その先端に尖頭部を作り出した尖頭器と考えられる。尖頭部は僅かに折損している。調整加工がブランディングのように急峻であるが、尖頭部は薄くなっている。打面部を残す。腹面側には長いバルバー・スカーが見られる。

同図-11は横長剥片を素材とし、打面と縁辺側を加工し、尖頭部を作り出している。錐のように先端側が尖っている。打面側はナイフ形石器の様な調整剥離が施されている。本文化層には珍しいチャートが用いられている。

錐形石器：先端部を鋭利に錐状に加工した石器。

同図-12は縦長剥片の素材を長軸に折り取り、その先端に先鋭な調整加工を施した錐状の石器である。

彫刻刀形石器：槌状の剥離を施した石器。

同図-13は小形剥片に槌状の剥離を施した彫刻刀形石器である。背面側の周辺に調整剥離がほどこされている。本文化層には珍しい黒曜石が用いられている。

台形状石器：形状が台形を呈した石器。

同図-14はやや分厚い小形剥片を素材とし、背面側から両端を打撃して製作した台形状の石器である。上部は鋭く、刃部に相当し、細かな剥離痕が見られる。下部の基部側は細かな調整剥離痕が見られる。

スクレイパー：剥片の縁辺に浅い角度の剥離をおこない、刃部をつくりだしたもの。38点が出土。石器組成の中ではこの器種が最も多い。刃部の形状からA~D類に細分した。

A類：打面部を基部として残し、剥片の全周の3/4に腹面側から調整剥離を施し、刃部を作り出したものである。刃部の角度はやや急峻である(第8図-1~4)。

第8図-1は小形幅広剥片の末端に外彎する刃部をもつ石器である。刃部は急峻で鋸歯縁を呈する。下位に打面部が残存する。腹面側にはバルバー・スカーが見られる。

同図-2は横長剥片を素材としたスクレイパーである。剥片の末端に外彎する刃部をもつ石器である。刃部は鋸歯縁を呈する。腹面側は面的な粗い剥離痕が観察される。

同図-3は小形幅広剥片の末端に外彎する刃部をもつ石器である。打面と背面は自然面である。腹面側にはバルバー・スカーが見られる。

同図-4は大形幅広剥片を素材とし、剥片の全周の3/4に腹面側から調整剥離を施した外彎状の刃部をもつスクレイパーである。刃部は粗く剥離され、鋸歯縁を呈する。背面側が自然面に覆われている。重量感のある石器である。

B類：尖頭部をつくり出したスクレイパーである。尖頭

部の角度によってB1~B3類に細分した。

B1類：尖頭部の角度が大きなもの。

同図-6は幅広剥片を素材とし、二側縁が作り出す縁辺部に調整加工を施し、角度が大きな尖頭部を作り出したスクレイパーである。

B2類は尖頭部の角度が小さなもの。

同図-7は幅広剥片を素材とし、打面側と一側辺に調整加工を施し、角度が小さな尖頭部を作り出したスクレイパーである。打面付近の腹面側のバルブは薄く除去されている。

B3類は尖頭部が突出したもの。

同図-5は小形の剥片を素材とした打面側と一側辺に調整加工を施し、突出した尖頭部を作り出したスクレイパーである。本文化層には珍しい黒曜石が用いられている。

同図-8は打面側と一側辺に調整加工を施し、突出した尖頭部を作り出したスクレイパーである。打面側は残存しない。調整加工はナイフ形石器のような調整剥離が施されている。

同図-9は比較的分厚い横長剥片を素材とし、打面側と一側辺に粗い調整加工を施し、突出した尖頭部を作り出した石器である。尖頭部は先鋭ではない。基部側は折損している。

C類：剥片全周1/2~3/4に刃部が作り出されて、その調整剥離が粗く、腹面と背面側からおこなわれる。刃部の形状は鋸歯縁を呈し、薄い。

同図-10は幅広剥片を素材とし、打面を残し、その周縁に粗い剥離を施したスクレイパーである。刃部の形状は鋸歯縁を呈し、薄い。腹面側にはバルバー・スカーが見られる。

D類：剥片の一側縁に浅い角度の剥離をおこない、刃部を作出したものである。刃部の形状によってさらに細分できる。

D1類：直線的な刃部をもつもの。

同図-12は背面に自然面を多く残す縦長剥片を素材とし、背面の左側縁と腹面側に直線的な刃部をもつスクレイパーである。腹面側にはバルバー・スカーが一部残存しており、打面部は折損している。

D2類：内彎する刃部をもつもの。

同図-11は比較的薄い縦長剥片を素材とし、背面の左側縁にやや内彎する刃部をもつスクレイパーである。腹面にも調整剥離が施されている。腹面側にはバルバー・スカーが見られる。

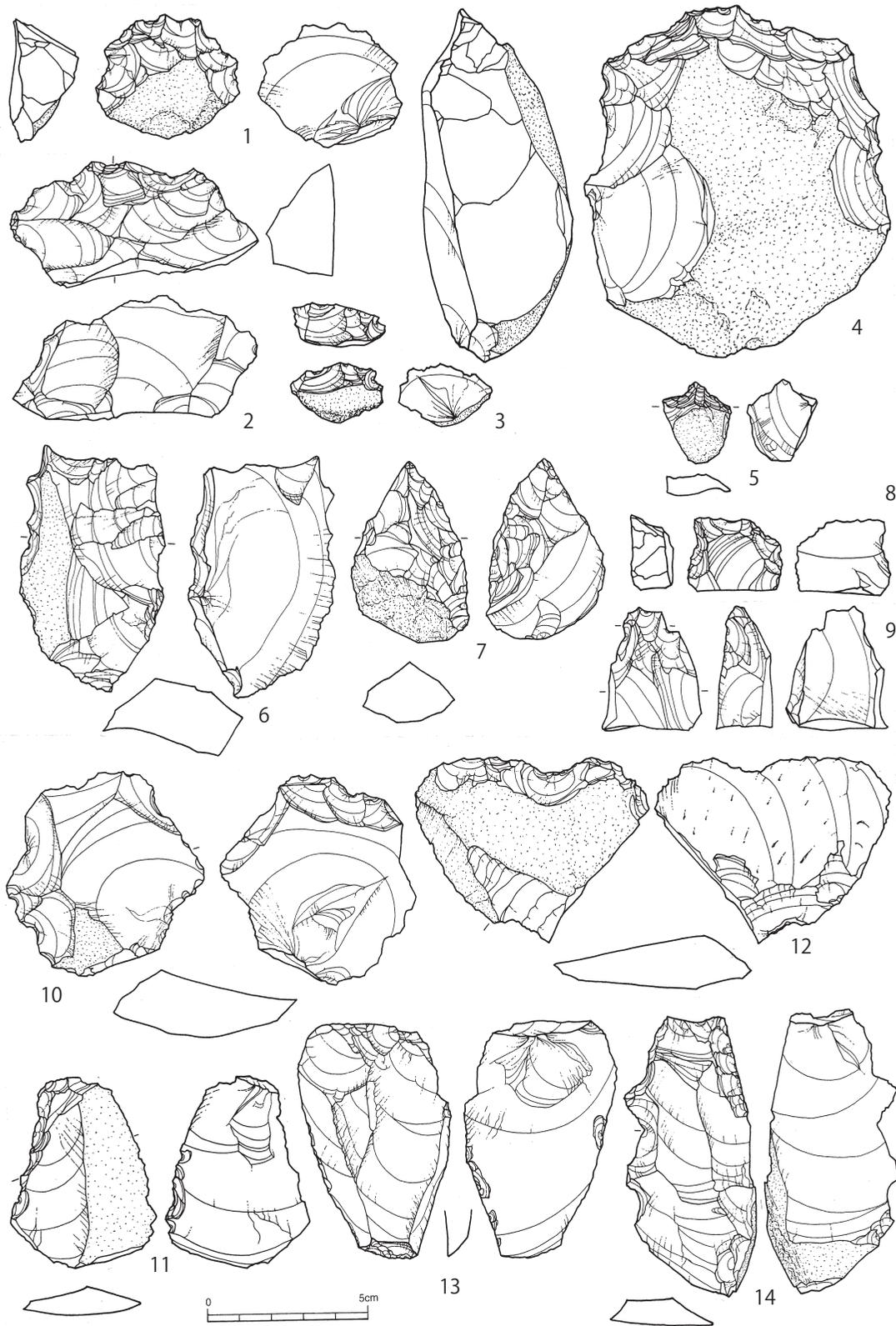
D3類：外彎する刃部をもつもの。

同図-13は縦長剥片を素材とし、その末端に急峻な角度の刃部をもつ石器である。いわゆるエンド・スクレイパーである。素材は平坦打面で、背面側には腹面側と同一方向を示す連続した剥離痕が観察される。しかし、刃部側は幅狭く、東北地方で見られるような典型的なエンド・スクレイパーとは形態が異なる。

D4類：鋸歯縁の刃部をもつもの。

同図-14は縦長剥片を素材とし、背面の左側縁に直線的で、鋸歯状の刃部をもつスクレイパーである。腹面の末端には分厚い自然面が残存する。また、背面の打面側に平坦な調整加工が施されている。

以上、岩戸第1文化層のスクレイパー類はA類-6点、B類-9点、C類-2点、D類-21点である。剥片の一側縁に浅い角度の刃部をもつD類が多い。また、本文化層の



第8図 岩戸第I文化層出土のスクレイパー (芹沢編 1978 より)

特徴でもある剥片全周の3/4を調整する刃部をもつA類、尖頭部をもつB類が合わせて15点で、全体40%を占める。

b) 剥片生産技術

『資料編2—岩戸—』では岩戸第1文化層に4種類の剥片生産技術が存在することを指摘した(芹沢編 1978)。ここでは接合資料を提示し、その剥離工程と類型について具体的に説明する。なお、図版番号は資料編2と一致する。

—接合資料と母岩別資料から—

剥片生産技術第1類:打面1カ所、あるいは対応する2カ所に設定し、縦長剥片を作出していく技術である。初期段階に打面の形成、打面の再生がおこなわれるが、剥片作出の際に調整は随時におこなわれない。石核の側面調整はほとんどなく、なされても初期段階の自然面除去の意味合いが強い。

(接合資料の説明)

母岩①(第9図)

A工程:左側にみられる接合資料は、打面部の作出と作業面の側面部を除去する段階を示したものである。剥離面(斜線)、打点(・)、剥離方向(→)を示した。側面部(A)の方が打撃によって打面部よりも先に自然面が大きく除去される。この時に作出された剥片は剥離後に石核へ転用される。また、下位からの打撃B・Cによって自然面が除去される。打撃Zもこの後に施されたものであろう。

B工程:次に、打面部の作出がおこなわれる。この剥離は2度おこなわれる(剥片724・726)。1枚目は自然面の除去。2枚目は大きな平坦な打面の形成。この作業によって、後方に傾斜する1枚のおおきな打面が形成される。

C工程:目的剥離は、打撃1、1'~9(打面)の順でおこなわれ、縦長剥片が多量に生産される。この作業中に反対側(下段打面)からも少数ではあるが、縦長剥片が作出される。母岩①は目的とする剥片の剥離作業中に打面の再生や作業面の調整がまったくおこなわれない。上・下段には接合した縦長剥片の側面観と作出された縦長剥片、同石核を示す。

打撃1'(653)→打撃1(1019)→打撃2(533)→打撃3(732)→打撃4(722)→打撃5(639+640)→打撃6(733)→打撃7(592)→打撃8(644)→打撃9→731(石核)

第9図—653(長さ6.0cm、幅5.5cm)は初期段階で剥離された斜め長の剥片である。背面には自然面を除去した横位からの剥離痕がみられる。

同図—1019(長さ7.4cm、幅6.4cm)は末端が抉れた斜め長の剥片である。右位の一側縁に自然面を残す。背面側は腹面と同一方向を示す二枚の剥離痕と逆方向のものが観察される。

図—533(長さ6.6cm、幅4.3cm)は初期段階で剥離された打面幅の大きい寸詰まりの剥片である。背面には自然面を除去した横位からの剥離痕がみられる。

同図—732(長さ9.0cm、幅4.2cm)は縦長剥片である。打面は一枚の平坦打面。右位の一側縁に自然面を残す。先端は平坦である。背面側は腹面と同一方向を示す二枚の剥離痕と逆方向のものが観察される。

同図—722(長さ10.5cm、幅4.8cm)は縦長剥片を素材としたスクレイパーである。打面側の背・腹両面に調整加工がなされている。打面は一枚の平坦打面。右位の一側縁に自然面を残す。背面側は両側縁に自然面を残し、上位か

らの大きな剥離痕と下位からの小さなものが観察される。

同図—639+640(長さ10.15cm、幅5.1cm)は末広がり縦長剥片である。中央で折れている。打面は一枚の平坦打面。背面側は腹面と全周からの方向を示す剥離痕が観察される。後者は初期段階のものである。

同図—733(長さ7.95cm、幅4.95cm)は幅広剥片である。打面は一枚の平坦打面。背面側は腹面と全周からの方向を示す剥離痕が観察される。中央に初期段階で剥離された大きな横位からの剥離痕がみられる。

同図—592(長さ10.2cm、幅7.0cm)は縦長剥片。打面は一枚の平坦打面。右位の一側縁に自然面を残す。先細りである。背面側は腹面と同一方向を示す二枚の剥離痕と末端に横位からのものが観察される。後者は初期段階のものである。

同図—644(長さ6.4cm、幅5.7cm)は縦長剥片である。打面を水平に置くと幅の数値が大きくなる。見た目は細長い剥片である。打面は一枚の平坦打面。左位の一側縁に自然面を残す。先細りである。背面側は自然面と逆方向を示す縦長の剥離痕が観察される。

同図—739(長さ7.4cm、幅6.4cm)は末広がり幅広剥片である。打面は一枚の平坦打面。背面側は腹面と同一方向を示す二枚の剥離痕と逆方向のものが観察される。

同図—65は両設打面の石核である(長さ9.2cm、幅7.4cm)。上・下両端にそれぞれ平坦な一枚の打面を持つ。裏面には自然面を除去した横位からの剥離面が観察される。

母岩①の特徴は以下の通りである。

- i) 両設打面の剥片生産技術である。
- ii) 打面の再生や作業面の調整は全くおこなわれない。
- iii) 作出される剥片の形状は縦長である。
- iv) 打面が大きい。

母岩②(第10図—上)

A工程:右上にみられる接合資料はすべての剥片が石核に接合した状態を示した側面部と打面部である。側面部(B)に、打撃A~Dの順に上位から打撃された剥離痕が看取される。打撃E以外は打点がない。これらの打撃痕は打面再生(打撃a)によって除去されている。

B工程:再び目的とする剥片の剥離作業が打撃E、1~5の順でおこなわれる(打面部)。打撃1(110)→打撃2(37)→打撃3(54)→打撃4(71)→打撃5(192)。

C工程:打撃5の後、打面再生が石核の正面からおこなわれる(打撃b—39)。1枚の剥片(この剥片は残存しない。)の剥離後、石核(65)は放棄される。

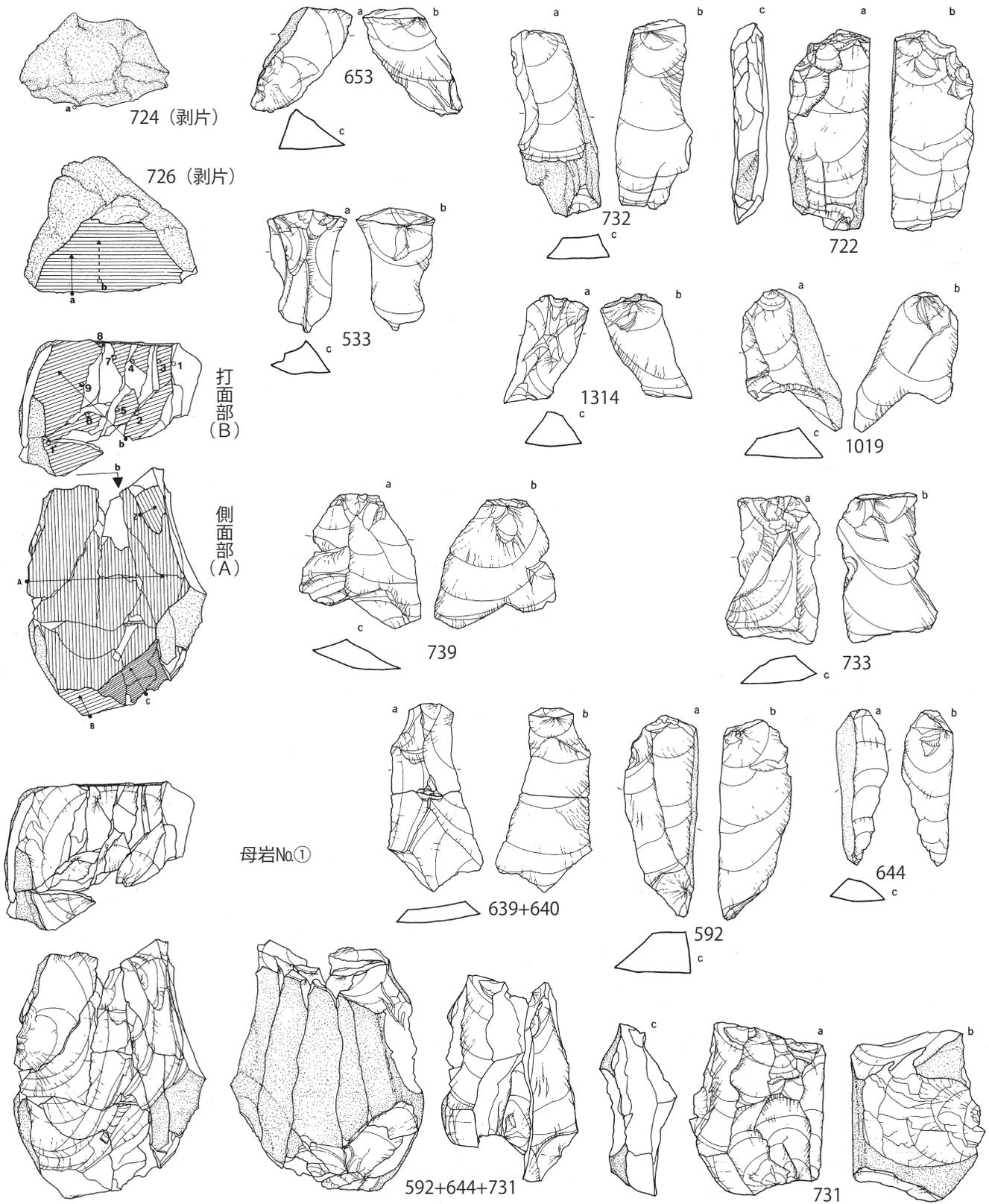
第10図—110(長さ4.7cm、幅3.0cm)は小形で先細りの縦長剥片である。打面は一枚の平坦打面。左位の側縁に自然面を残す。

同図—37(長さ7.3cm、幅4.3cm)は打面幅の大きな先細りの縦長剥片である。打面は一枚の平坦打面。背面側には腹面と同一方向を示す剥離痕が二枚みられる。左位の側縁に自然面を残す。

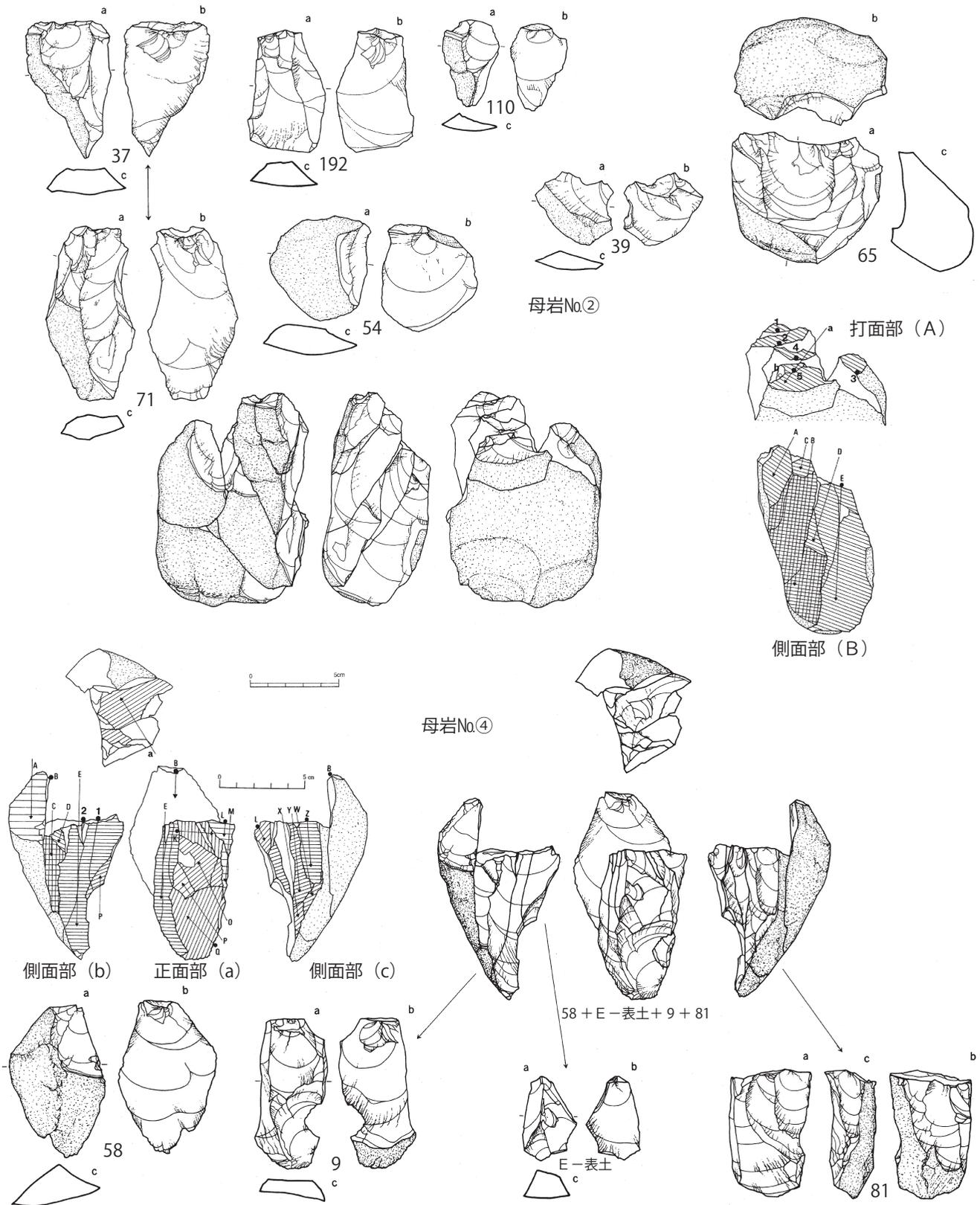
同図—54(長さ5.7cm、幅5.3cm)は幅広剥片である。打面は自然面と一枚の剥離面で構成。左位の側縁に大きく自然面を残す。初期段階の剥片である。

同図—71(長さ9.4cm、幅5.0cm)は縦長剥片である。打面は一枚の平坦打面。左位の下側縁に自然面を残す。比較的形状の整った石刃状の剥片である。

同図—192は(長さ6.7cm、幅4.0cm)は短冊型の縦長剥片である。打面は一枚の平坦打面。背面側には腹面と同一



第9図 岩戸第I文化層出土の剥片生産技術I類(芹沢編 1978より)



第10図 岩戸第I文化層出土の剥片生産技術第I類 (芹沢編 1978 より)

方向を示す剥離痕がすべてにみられ、自然面は残存していない。この剥片を剥離した後、打面の再生がおこなわれる。

同図-39は(長さ3.5cm、幅4.6cm)幅広剥片である。打面には作出以前の作業面となる二枚剥離痕が観察される。背面には作出以前の打面であった剥離面と自然面が見られる。

同図-731は単設打面の石核である(長さ7.8cm、幅8.2cm)。上端に一枚の打面を持つ。正面には数枚の剥離面がみられ、大きな最終の剥離面が蝶番剥離となっている。裏面には自然面が観察される。やや平坦なまるみをもつ円礫が素材に転用されている。

母岩②の特徴は以下の通りである。

- i) 単設打面の剥片生産技術である。
- ii) 打面の再生作業は3回以上おこなわれている。
- iii) 作業面の調整はまったく行われない。
- iv) 作出される剥片の形状は縦長である。
- v) 打面が大きい。

母岩④(第10図下)

第10図下は石核に剥片が接合した図である。

A工程:側面部(b)に看取される打撃A・B・C~Eは初期段階の剥離痕である。いずれも上設の打面から打撃されている。接合する縦長剥片(58)も、この時に剥離されたのであろう。また、側面部(C)に看取される打撃W~Yも上位から剥離されている。打点がないので、これらの剥離痕は打面再生(打撃a)以前になされたものであろう。

B工程:次に打撃は、下位に移動し、O~Qが裏面に残る自然面を打面としておこなわれる。剥離が数回なされたのであろう。

C工程:その後、再びこの上設の打面からM→L→1(E-表土)→2(剥片9)の順で打撃され、縦長の剥片が作出されている。石核(81)が遺棄される。

第10図-58は(長さ8.3cm、幅5.3cm)は中ふくらみの縦長剥片である。打面は小さな平坦打面。背面側は自然面と腹面と同一方向からの剥離痕が観察される。

第10図-9(長さ8.15cm、幅3.15cm)は縦長剥片である。打面は一枚の平坦打面。背面側は腹面と同一方向を示す二枚の剥離痕と逆方向のものが一枚観察される。腹面の末端には自然面が見られ、ウートラパッセになっている。

第10図-E-表土(長さ4.6cm、幅2.9cm)は中ふくらみの小形縦長剥片。打面は小さな平坦打面。背面側は腹面と同一方向を示す剥離痕と逆方向のものが二枚観察される。

同図-81は単設打面の石核である(長さ7.0cm、幅4.45cm)。上端に一枚の平坦な打面を持つ。正面には上位から数枚の縦長の剥離面がみられる。裏面には側面に長い自然面が残存する。下位の打面は自然面で、末端が薄くなっている。

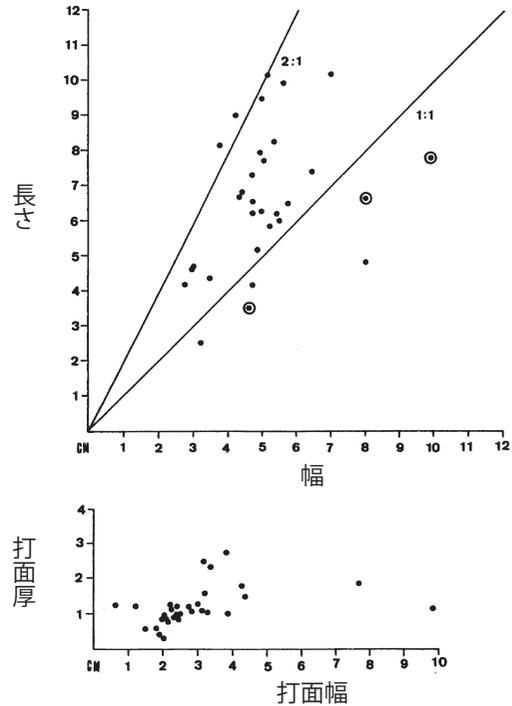
母岩④の特徴は以下の通りである。

- i) 横位からの打撃方向を示すものが若干みられるが、大部分が両端の打面から目的とする剥片を作出している。
- ii) 上設打面のみに打面の再生がおこなわれている。
- iii) 作業面の調整はおこなわれていない。
- iv) 作出される剥片の形状は縦長である。

以上、接合資料について説明をおこなったが、次ぎに、これらの剥片の特徴について示す。

【第I類の特徴】

- a) 剥片の形状
(大きさ—長さ&幅—)



第11図 第I類母岩①・②・④

第11図上は母岩①・②・④から剥離された剥片の長さ&幅の比を示した。長さ6~8cm前後、幅4~6cm前後の大きさのものが多く、長幅比は2:1~1:1内に収まる形状の剥片が多い。2:1を超えるような形状の剥片が少なく、長大な形態にはならない。また、1:1を下回る剥片も少ない。これらの剥片類は母岩①のような分割後に剥離された剥片類や打面再生剥片類である。第I類から剥離された剥片の特徴は縦長であるが、細身ではない。

〈最大幅位置〉(観察可能な剥片25点)

- 形状が逆三角形を呈するもの(A).....16点(53%)
 - 形状が中ふくらみを呈するもの(B).....9点(30%)
 - 形状が末広がり呈するもの(C).....5点(17%)
- A類の形状は逆三角形を呈するものが約半数を占める。

〈打面側の形状〉

—打面幅と厚—

第11図下は母岩①・②・④から剥離された剥片の打面部の幅&厚の比を示した。幅は約2~3cm前後に集中する。厚は約1cm前後に集中する。打面部の幅・厚の大きいものは打面の作出剥片である。打面部の大きさは一定である。

—打角—

母岩①・②・④から剥離された剥片の打角である。

- 100~109度.....9点(31%)
- 110~119度.....13点(45%)
- 120~129度.....6点(21%)
- 130~139度.....1点(3%)

打角は110～119度が最も多い。

－打面の調整－

母岩①・②・④の剥片を次のように観察した。

- ・剥離痕が一枚からなる平坦打面・・・・・・・・22点 (73%)
 - ・剥離痕が複数からなる調整打面・・・・・・・・6点 (20%)
 - ・節理面か自然面からなる自然面打面・・・・2点 (7%)
- 平坦打面が73%を占める。次に、調整打面は20%を占める。剥片生産技術第Ⅰ類には1点ごとの打面の調整は無かったものと考えられる。

－背面側の剥離面構成－

背面側の剥離面構成を以下のa～g類まで分類し、その数量を調べた。

- a類：背面のすべての剥離面が腹面と同一の打撃方向を示す剥片・・・・・・・・11点 (36%)
- b類：背面の剥離面が腹面と同一の打撃方向を示すものと、逆方向を示す剥離面をもつ剥片・・3点 (10%)
- c類：背面の剥離面が腹面と同一の打撃方向を示すものと、横位の打撃方向を示す剥離面をもつ剥片・・・・7点 (23%)
- d類：背面の剥離面が腹面と同一か、逆方向の打撃方向を示すものと、さらに、横位の打撃方向を示す剥離面をもつ剥片・・・・・・・・5点 (16%)
- e類：背面の剥離面が横位の打撃方向を示す剥離面をもつ剥片・・・・・・・・2点 (6%)
- f類：背面のすべてが自然面か節理面である剥片・・・・1点 (3%)
- g類：背面の一部にポジティブな剥離面を有する剥片・・・・1点 (3%)

a・b類の剥片が46%占めるのは、両設打面からの剥離がなされたものが存在するからであろう。また、横位の打撃方向を示す剥片が多くみられるのは、母岩①に初期段階で自然面除去をおこなった際の剥離痕であろう。その剥離痕が縦長剥片の一部に残存したためである。

b) 石核の形状

剥片生産技術第Ⅰ類での残された石核類は「打面が1カ所か、上下の対応する2カ所に設定される石核で剥離作業がその打面上を後退していくもの」(A類石核)に相当しよう。

- ・打面が1カ所に設定された石核(A1類)・・・・12点
- ・打面が上下の対応する2カ所に設定された石核(A2類)・・・・8点

単設打面の石核が両設打面のものよりも多い。

剥片生産技術第Ⅱ類：チョッピング・トゥールのように、打面と作業面を交互に入れ替えながら、剥片を作出していく技術。剥取された剥片の形状は長幅比1:1を前後するものが多く、打面、打面厚が大きい。

(接合資料の説明)

母岩⑨(第12図上)

第12図上は石核に剥片が1枚接合した図である。(A)には剥片が接合し、背面の剥離痕が観察できる。a～cの打撃後、打撃dがおこなわれた剥片(541)が作出される。この後作業面が(B)に移動。打撃e、fの後、石核(526)は放棄され、形態がチョッピング・トゥール状を呈する。

第12図－541(長さ5.6cm、幅6.1cm)は中ふくらみの幅広剥片である。打面は一枚の小さい平坦打面。背面側には腹面と同一の方向を示す剥離痕が三枚と末端と側面に自

然面がみられる。

同図－526は形態がチョッピング・トゥール状を呈する石核である(長さ8.3cm、幅12.6cm)。上端に二枚の剥離面が並び、末端に自然面が残存する。打面縁がジグザクになっている。

母岩⑧(第12図下)

第12図右下には最終的に剥片が7枚接合した図である。

A工程：自然面を打面として、打撃a'→打撃a(761)→打撃bの順におこなわれる。

B工程：次に、打撃bの剥離面を打面として打撃Aがおこなわれる。ここで作業面と打面が入れ替る。

C工程：Aの剥離面を打面として、打撃c(814+779)→打撃d→打撃e(820)→打撃f→打撃g(810)→打撃h(816)の順で剥離がおこなわれる。

D工程：再び打面と作業面が入れかわり、最終的に打撃Bがおこなわれる。この間の剥離作業は不明である。打面AとBには段差がみられるので数回の剥離作業がおこなわれたものと推定される。

E工程：打撃Bの剥離面を打面として打撃k→打撃m(812)がおこなわれる。ここでも打面と作業面が入れ替る。

F工程：剥離が進行した後、打撃Cの剥離面を打面として、打撃f(811)がおこなわれる。

第12図－761(長さ7.1cm、幅5.4cm)は菱形を呈する部厚い剥片である。小さな自然面の打面。背面には左位に上位からの剥離面と自然面を大きく残す。

同図－814+779(長さ7.5cm、幅8.2cm)は打面幅の大きい幅広剥片である。背面には上位に腹面と同一方向を示す横長と中央に大きい剥離痕がある。左位末端部に自然面を残す。

同図－820(長さ7.6cm、幅8.0cm)は台形状の剥片である。打面幅が大きく部厚い。背面には上位に腹面と同一方向を示す三枚の剥離痕と末端部と側面に大きく自然面を残す。

同図－810(長さ7.9cm、幅9.4cm)は打面幅の小さい幅広剥片である。打面付近は薄い。背面には上位に腹面と同一方向を示す三枚の剥離痕と末端部に自然面を残す。

同図－816(長さ7.1cm、幅5.4cm)は末広りの剥片である。背面には上位に腹面と同一方向を示す剥離痕と横位のものが見られる。打面付近の側面に自然面を残す。

同図－812(長さ9.15cm、幅7.55cm)は比較的縦長の剥片である。打面が山形状を呈し、薄い。バルブが二つある。背面には上位に腹面と同一方向を示す縦長の剥離痕と末端部に自然面を残す。

同図－811(長さ6.1cm、幅5.3cm)は縦長の剥片である。背面には上位に腹面と同一方向を示すものや横位の剥離痕がある。末端部に自然面を残す。背面の右側面に小さい調整痕がみられる。なお、この接合資料には石核がない。

母岩⑧の特徴は以下の通りである。

i) 一つの打面で数回の剥離作業を重ねた後、この作業面を打面に転用し、再び剥離作業をおこなっている。

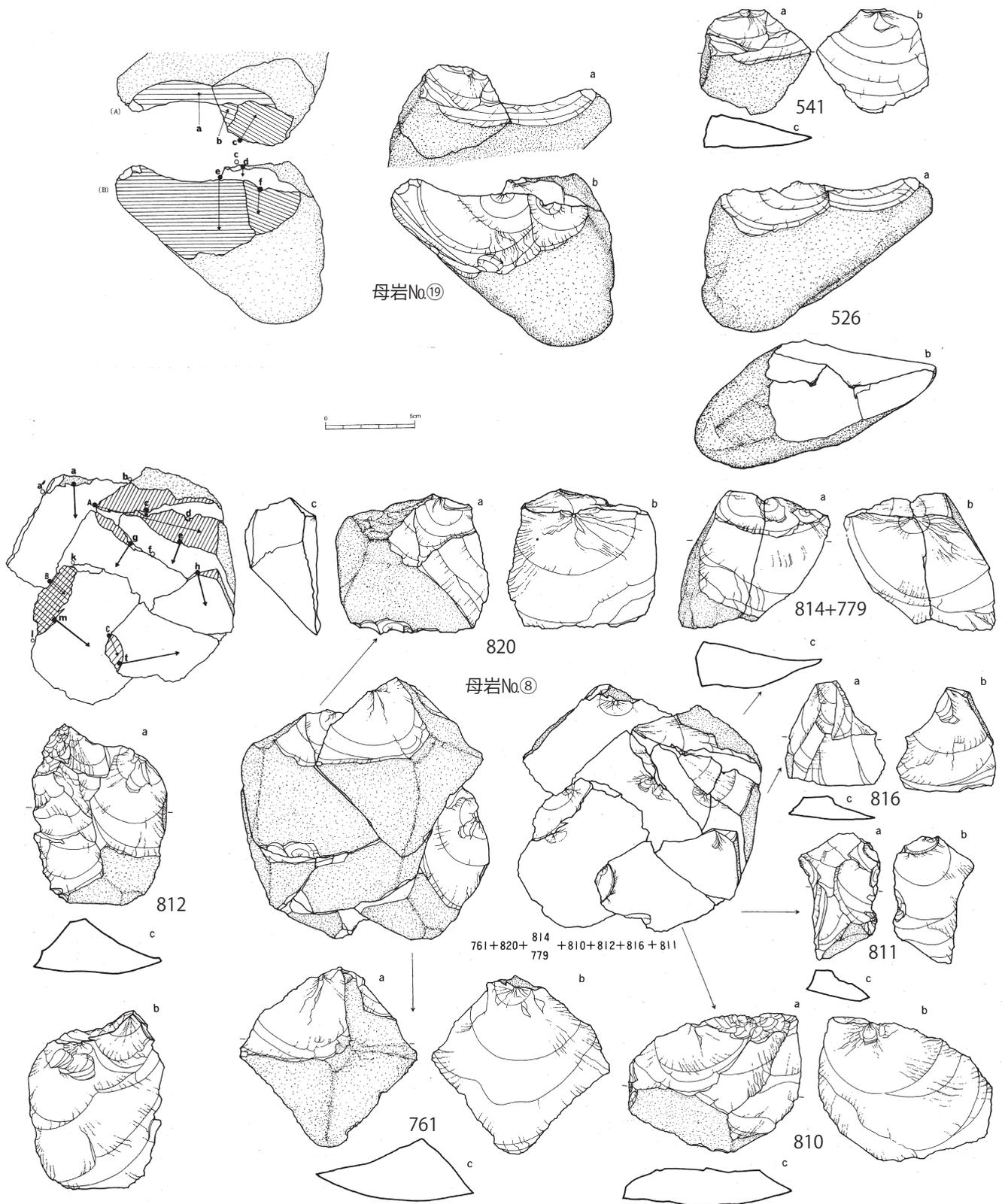
ii) 打面と作業面を交互に入れ替える作業は3回以上おこなわれている。

iii) 打面の調整はまったくおこなわれない。

iv) 作出される剥片の形状は四角形を呈する。

v) 打面に大小の形態がある。

以上、接合資料について説明をおこなったが、次ぎに、これらの剥片の特徴について示す。

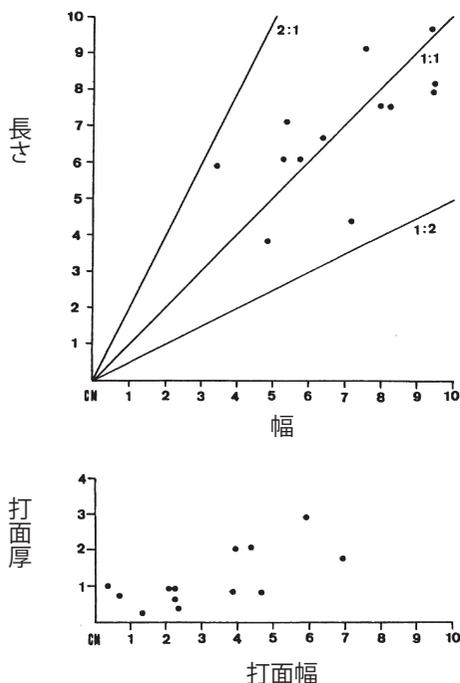


第 12 図 岩戸第 I 文化層出土の剥片生産技術第 II 類 (芹沢編 1978 より)

【第Ⅱ類の特徴】

a) 剥片の形状

〈大きさー長さと幅ー〉



第13図 第Ⅱ類母岩⑧・⑨

第13図上は母岩⑧・⑨から剥離された剥片の長さとの幅の比を示した。剥片の形状は1点を除いて長幅の比が2:1～1:2の範囲内に収まる。1:1に集中する形状の剥片が多い。また、大きさも一定では無く、3～4cm前後のものから10cm前後のものまでみられる。打面と作業面が交互に入れ替わりながら剥離作業が進行するため、剥片の大きさは徐々に小さくなる。形状は縦長・横長の剥片類が同じ量ある。

〈最大幅位置〉(母岩⑧・⑨の剥片13点)

- ・形状が逆三角形を呈するもの(A)・・・5点(38%)
- ・形状が中ふくらみを呈するもの(B)・・・4点(31%)
- ・形状が末広がり呈するもの(C)・・・4点(31%)

A・B・C類の形状が約同数を占める。

〈打面側の形状〉

ー打面幅と厚ー

第13図下は母岩⑧・⑨から剥離された剥片の打面部の幅と厚の比を示した。幅は約1～2cm前後のものと同約3～5cm前後のものとのがある。厚は約1～2cm前後に集中する。打面幅は大小がある。

ー打角ー

母岩⑧・⑨の剥片の打角である。

- ・90～99度・・・1点(8%)
- ・100～109度・・・2点(15%)
- ・110～119度・・・5点(38%)
- ・120～129度・・・4点(31%)
- ・130～139度・・・1点(8%)

打角は110～119度が最も多く、38%を占めるが、120～129度のものも多い。打角がやや大きい。

ー打面の調整ー

母岩⑧・⑨の剥片の打面を次のように観察した。

- ・剥離痕が一枚からなる平坦打面・・・10点(77%)
 - ・剥離痕が複数からなる調整打面・・・2点(15%)
 - ・節理面か自然面からなる自然面打面・・・1点(8%)
- 平坦打面が77%、次に調整打面が15%を占める。

ー背面側の剥離面構成ー

背面側の剥離面構成を以下のa～g類まで分類し、その数量を調べた。

- a類：背面のすべての剥離面が腹面と同一の打撃方向を示す剥片・・・10点(77%)
- b類：背面の剥離面が腹面と同一の打撃方向を示すものと、逆方向を示す剥離面をもつ剥片・・・2点(15%)
- c類：背面の剥離面が腹面と同一の打撃方向を示すものと、横位の打撃方向を示す剥離面をもつ剥片・・・0点(0%)
- d類：背面の剥離面が腹面と同一か、逆方向の打撃方向を示すものと、さらに、横位の打撃方向を示す剥離面をもつ剥片・・・0点(0%)
- e類：背面の剥離面が横位の打撃方向を示す剥離面をもつ剥片・・・1点(8%)
- f類：背面のすべてが自然面か節理面である剥片・・・0点(0%)
- g類：背面の一部にポジティブな剥離面を有する剥片・・・0点(0%)

特に、母岩⑧は背面のすべての剥離面が腹面と同一の打撃方向を示す剥片である。

b) 石核の形状

剥片生産技術第Ⅱ類での残された石核類は、形状がチョッピング・トウル状を呈し、剥離作業において打面と作業面が交互にいれかわるもの。この石核は8点出土している。

剥片生産技術第Ⅲ類：石核の周縁から中心に向けて剥片を作出する技術である。打面と作業面が交互にいれかわるものが多いため石核の表裏に剥離痕がみとめられる。剥取された剥片の特徴は第Ⅱ類のものと同ほとんど変わらない。

(接合資料の説明)

母岩⑦(第14・15図)

第14図上は、剥片8枚がすべて接合した図である。A・B両面は表裏の関係にあり、打点の切り合いから剥離作業はA面の方がB面よりも先であろう。

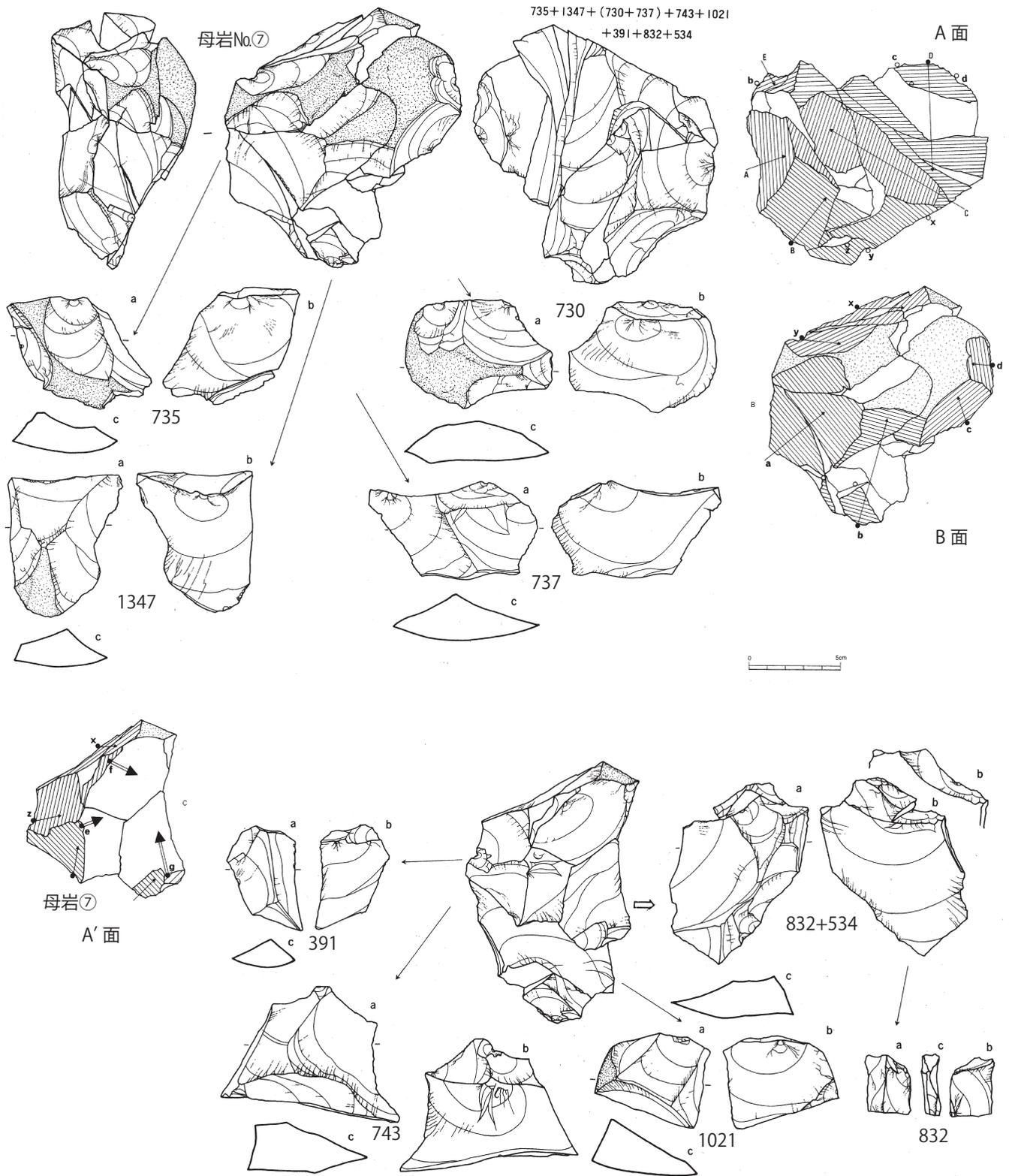
A工程:A面の剥離作業は、打撃A～Eの順におこなわれ、打点が母岩の周縁をまわる。

B工程:B面の剥離作業はA面を打面として同じように打撃がa～d・x・yの順でおこなわれる。

C工程:A面を打面として、剥片735、剥片730、剥片1347、剥片737が剥離される。

D工程:第14図左下は、B面に看取された数枚の剥片を除去した段階を示す接合資料で、剥片3枚が最終的に接合した図である。zが剥片735の打点で、打撃e(734)→打撃f(1021)→打撃g(391)の順におこなわれる(A'面)。

E工程:接合資料(534[翼状剥片石核]+832[翼状剥片])は瀬戸内技法を示す資料である。そこには、瀬戸内技法第2工程の初期段階の様子がみられるが、石核から1点の剥片が作出されているに過ぎない。しかも、それは剥離中に中央部で破損してしまっている。その後、石核に打面調整



第14図 岩戸第I文化層出土の剥片生産技術第三類 (芹沢編 1978 より)

の剥離が1回施されているが、次の目的剥片を作出せずに石核を放棄している。剥片 882 は底面を保有する。

第14図上-735(長さ6.4cm、幅7.4cm)は斜め長の幅広剥片である。打面は一枚の平坦打面。背面左中央と末端に自然面を残す。背面側は腹面と同一方向を示す二枚の剥離痕と横位のものが観察される。腹面の末端は階段状剥離である。

同図-730(長さ5.9cm、幅7.6cm)は打面が大きい幅広剥片である。打面にはネガイティブな打点が残る。背面側は腹面と同一方向を示す剥離痕と横位からのものが二枚それぞれ観察される。背面の左末端に自然面を残す。735と730は初期段階の剥片である。

同図-1347(長さ7.4cm、幅6.0cm)は打面幅が大きい幅広剥片である。打面は一枚の平坦打面。背面側は腹面と同一方向を示す剥離痕が観察される。末端に自然面がある。

同図-737(長さ6.0cm、幅9.0cm)は打面幅が大きく、厚さが薄い。幅広剥片である。点状の打面である。背面側は腹面と同一方向を示す幅広の剥離痕がみられる。

同図-734(長さ7.4cm、幅9.4cm)形状が末広がりの幅広剥片である。打面幅が大きく二枚で構成される剥離面にはいずれもネガイティブな打点が残る。背面側は腹面と同一方向を示す二枚の剥離痕と横位からのものがみられる。

同図下-391(長さ5.5cm、幅4.5cm)は先細りの小形剥片である。打面幅が大きく二枚で構成される。背面側は全て腹面に対して横位と下位からのものである。

同図-1021(長さ5.1cm、幅6.1cm)は幅広剥片である。打面幅が大きく、厚さが薄い。背面側は腹面の剥離方向に対して全周からの方向を示す。左側面に自然面がある。

同図-534〔翼状剥片石核〕+832〔翼状剥片〕(長さ7.5cm、幅9.6cm)縦長の盤状剥片である。この剥片の背面側は腹面の剥離痕に対して全周からの方向を示す。腹面には打面側から一枚の翼状剥片が剥離されている。翼状剥片は折損している。また、この接合資料の背面側をみると、打面調整を再度試みている。

母岩⑦の特徴は以下の通りである。

i) 目的剥片の剥離中には打面と作業面との関係を保ちながら剥離作業が進行する。

ii) 石核周縁から中心部に向けて剥片を作出する。

iii) 剥片の形状は寸詰りの縦長剥片、幅広剥片である。

iv) 剥離された剥片は打面部が大きい。

v) 剥片の一部は瀬戸内技法の第2工程の素材(盤状剥片)に供されている。

母岩④(第15図)

第15図右上(A)は石核にすべての剥片が接合した図である。(B)は右部位の分割後の図である。裏面は自然面なので割愛する。

A工程:初期段階の剥離状況を示すもので、打撃A~C(1503)→打撃D(1415)がおこなわれた後、これらの剥離痕を打面として打撃a~g→打撃h(1168)がなされる。

B工程:打撃I~Kがおこなわれ、打点が石核1598の周縁をまわる。

C工程:B面では、分割後にこの剥離面を打面として、打撃E(674)→打撃F(1746)→打撃Gがおこなわれる。

D工程:最終的に打撃W・Xがおこなわれ、石核1598が放棄される。

第15図-1503(長さ3.2cm、幅3.6cm)は小形の幅広剥片である。打面は平坦打面。背面側は腹面に対して横位と

からのものと右位側面に自然面を残す。

同図-1638(長さ3.8cm、幅3.6cm)は点状打面であるが、小さい打面は平坦の一枚である。小形の幅広剥片。背面側は腹面に対して横位とからのものがみられる。

同図-1415(長さ3.8cm、幅5.5cm)は打面幅が大きい幅広剥片。打面は平坦打面。背面側は腹面と同一方向を示す剥離痕が二枚並ぶ。背面右側から末端にかけて自然面を残す。

同図-1746(長さ4.6cm、幅5.3cm)は打面が薄く、大きい。形状が逆三角形を呈する幅広剥片である。背面側に腹面と同一方向を示す剥離痕が観察される。末端は自然面を残す。

同図-674(長さ3.1cm、幅3.4cm)は打面が厚い、小形の幅広剥片。背面側に腹面と同一方向を示す剥離痕が観察される。末端に自然面を残す。

同図-1168(長さ2.9cm、幅5.3cm)は打面幅が大きい横長剥片である。打面は平坦打面。背面側の中央と左側に自然面、腹面と同一方向と横位を示す剥離痕が観察される。末端は階段状剥離となっている。初期段階の剥片である。

同図-1504(長さ5.2cm、幅6.5cm)は斜め長の剥片である。打面は平坦打面。背面側は腹面と同一方向を示す剥離痕が二枚並ぶ。末端には自然面を残す。

同図-1598(長さ7.7cm、幅6.5cm)は石核の周縁から中心部に向けて剥片を作出するものである。正面は多方向からの剥離痕、裏面に打面となった剥離痕と自然面が残存する。

同図-1270(長さ6.1cm、幅5.4cm)はサイコロ状の多面体の石核である。

母岩④の特徴は以下の通りである。

i) 目的剥片の剥離中には打面と作業面との関係を保ちながら剥離作業が進行する。

ii) 石核の周縁から中心部に向けて剥片剥離する。

iii) 剥片の形状は幅広剥片である。

iv) 剥離された剥片は打面部が大きい。

母岩⑥(第15図下)

第15図下は石核に剥片が3枚接合したものである。母岩⑥には石核が放棄される直前の剥離作業が看取される。A面は打撃a~Cがおこなわれた後、剥離作業がA面の左端に移動し、剥離作業d・eがおこなわれる。打撃k(10)の後、B面で打撃A(63)→打撃B、Cがおこなわれる。次に剥離作業はB面の右端に移動し、打撃D~打撃G(18)がおこなわれる。最終的には打撃Hがおこなわれ、石核(69)が放棄される。母岩⑥は作業面や打角の状態によって剥離作業の位置が移動している。

第15図-10(長さ4.4cm、幅4.2cm)は小形の幅広剥片である。打面は平坦打面。背面側に腹面と逆方向を示す剥離痕と横位のものが観察される。左側面に自然面を残す。

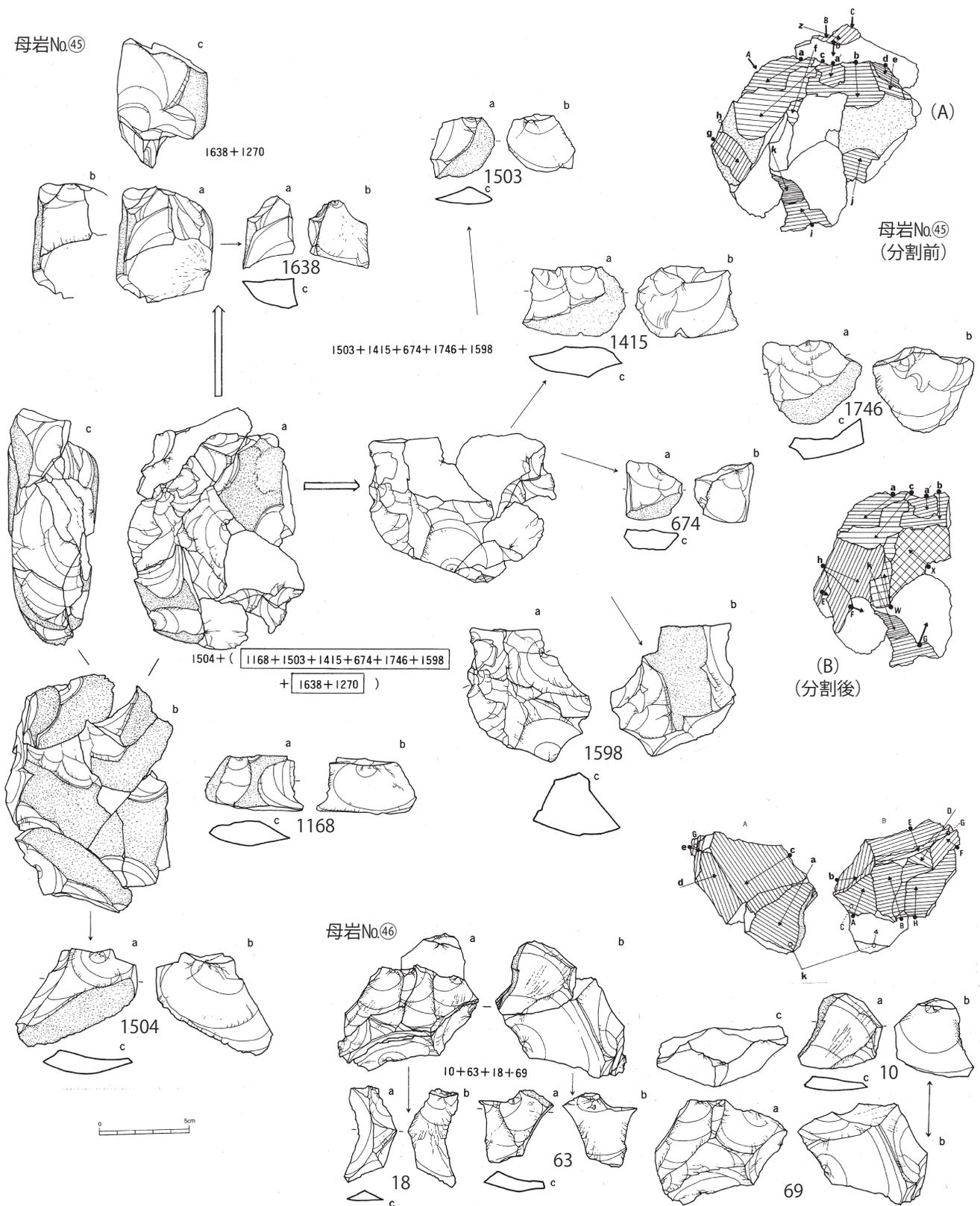
同図-18(長さ5.3cm、幅3.2cm)は小形の縦長剥片である。打面は平坦打面。背面には多方向からの剥離を示す。

同図-63(長さ4.2cm、幅3.9cm)は打面が小さい、小形の幅広剥片である。背面には多方向からの剥離を示す痕跡がみられる。右側面上部に自然面を残す。

同図-69(長さ7.2cm、幅5.45cm)は、正・裏の両面に多方向からの剥離を示す痕跡をもつ石核である。石核の周縁から中心部に向けて剥片を作出されたのであろう。

母岩⑥の特徴は以下の通りである。

i) 目的剥片の剥離中には打面と作業面との関係を保ちながら剥離作業が進行する。



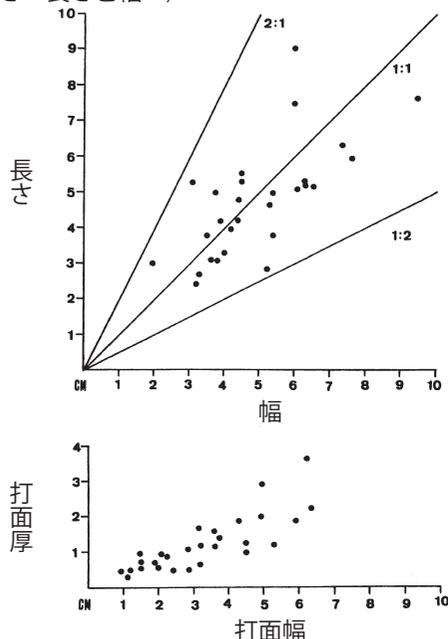
第 15 図 岩戸第 I 文化層出土の剥片生産技術第三類 (芹沢編 1978 より)

- ii) 剥片の形状は寸詰りの縦長剥片、幅広剥片である。
- iii) 石核の周縁から中心部に向けて剥片を作出する。
- iv) 剥片の形状は寸詰りの縦長剥片、幅広剥片である。

【第Ⅲ類の特徴】

a) 剥片の形状

〈大きさー長さと幅ー〉



第16図 第Ⅲ類母岩⑦・④⑤・④⑥

第16図上は母岩⑦・④⑤・④⑥から剥離された剥片の長さ
と幅の比を示した。長さ3～6cm前後、幅3～7cm前後の
大きさのものが多く、剥片の長幅の比が2：1を超えるよ
うな形状の剥片は無い。逆に1：2を超えるような横長を
呈する形状の剥片も無い。大部分は1：1の範囲に収まる
大きさである。形状は寸詰まりの幅広の剥片である。

〈最大幅位置〉(観察可能な剥片28点)

- ・形状が逆三角形を呈するもの(A)・・・10点(36%)
 - ・形状が中ふくらみを呈するもの(B)・・・5点(18%)
 - ・形状が末広がり呈するもの(C)・・・13点(46%)
- 大きな量的な差があまりみられないが、末広がりを呈す
るCが最も多く、46%を占める。

〈打面側の形状〉

ー打面幅と厚ー

第16図下は母岩⑦・④⑤・④⑥から剥離された剥片の打面
部の幅と厚の比を示した。幅は約1～2cm前後のもの約
3～5cm前後のものがある。厚は約1～2cm前後に集中
する。打面幅の大きいものと、小さいものがある。

ー打角ー

母岩⑦・④⑤・④⑥から剥離された剥片の打角である。

- ・80～89度・・・1点(3%)
- ・90～99度・・・2点(6%)
- ・100～109度・・・7点(22%)
- ・110～119度・・・10点(31%)
- ・120～129度・・・11点(34%)
- ・130～139度・・・1点(3%)

打角は120～129度が最も多く、34%を占めるが、次に
110～119度のものも多い。I・II類に比べてIII類は打
角がやや大きい。

ー打面の調整ー

母岩⑦・④⑤・④⑥から剥離された打面が残存する剥片を次
のように観察した。

- ・剥離痕が一枚からなる平坦打面・・・22点(69%)
- ・剥離痕が複数からなる調整打面・・・10点(31%)
- ・節理面か自然面からなる自然面打面・・・0点(0%)

平坦打面が69%を占め、最も多い。次に、調整打面が
31%を占める。調整打面が多いのは、打面と作業面が頻繁
に入れ替わるため、打面側に幾枚かの剥離痕が付着するも
のと考えられる。

〈背面側の剥離面構成〉

背面側の剥離面構成を以下のa～g類まで分類し、その
数量を調べた。

- a類：背面のすべての剥離面が腹面と同一の打撃方向を
示す剥片・・・10点(36%)
- b類：背面の剥離面が腹面と同一の打撃方向を示すもの
と、逆方向を示す剥離面をもつ剥片・・・1点(4%)
- c類：背面の剥離面が腹面と同一の打撃方向を示すもの
と、横位の打撃方向を示す剥離面をもつ剥片
・・・4点(14%)
- d類：背面の剥離面が腹面と同一か、逆方向の打撃方向
を示すものと、さらに、横位の打撃方向を示す剥
離面をもつ剥片・・・9点(32%)
- e類：背面の剥離面が横位の打撃方向を示す剥離面をも
つ剥片・・・2点(7%)
- f類：背面のすべてが自然面か節理面である剥片
・・・2点(7%)
- g類：背面の一部にポジティブな剥離面を有する剥片
・・・0点(0%)

横位の打撃方向を示す剥離面をもつ剥片c・d・e類が
約半数を占めるのは、打面と剥離作業面の位置が頻繁に移
動するためである。

b) 石核の形状

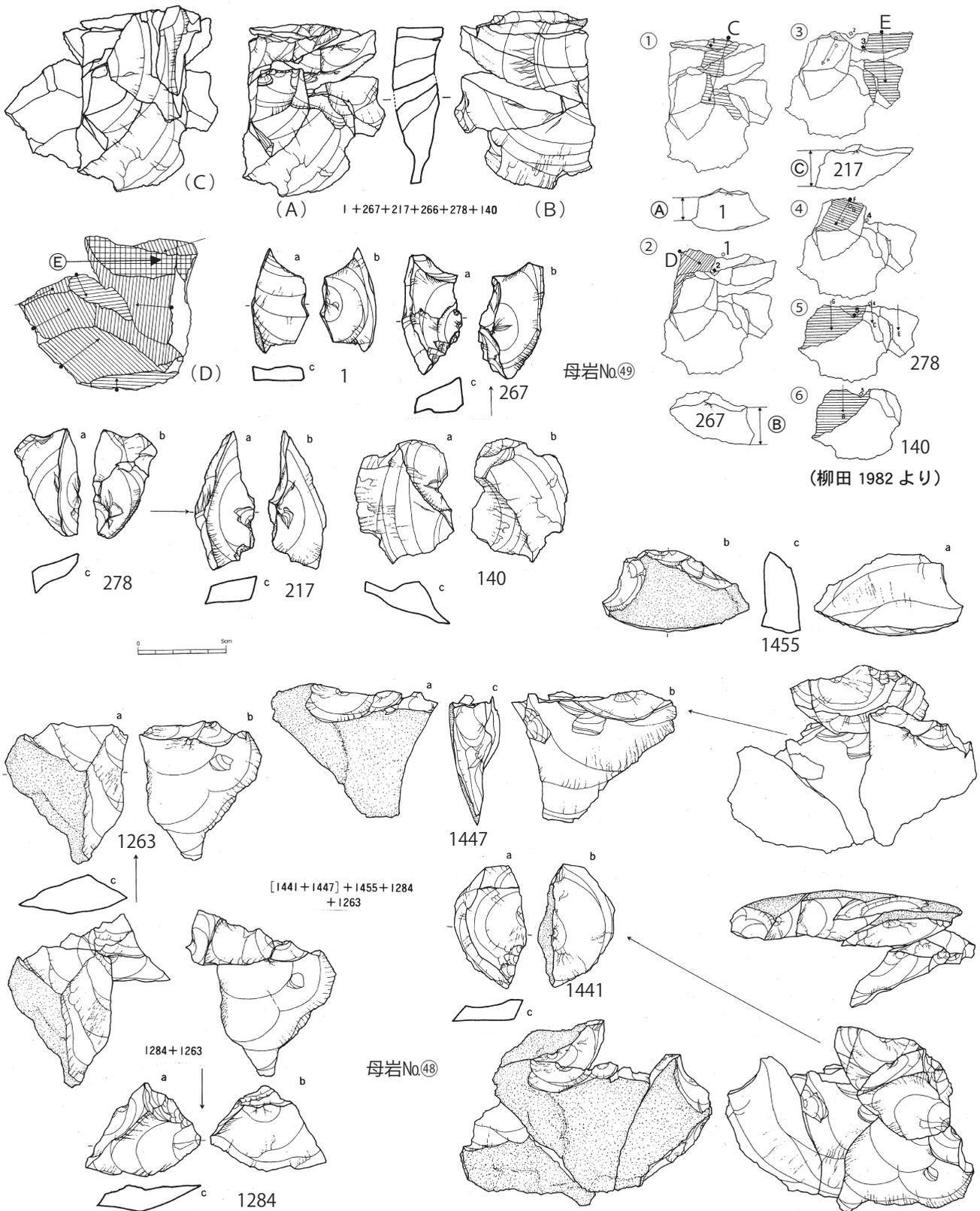
残された石核の形状は、形状が円盤形を呈し、多打面か
ら石核の中心部に向けて、剥離作業が求心的におこなわれ
ているC類石核。いま一つは、多面体石核とするE類石核
の存在が想定される。剥離作業が表面に限定されるC1類石
核は7点、表裏両面にみられるC2類石核は5点、E類石核
は4点出土している。

剥片生産技術第Ⅳ類：比較的大形の剥片を素材として、
その打面部から背面側に打面調整をおこないながら横長の
剥片を作出していく技術である。剥離された剥片は剥片素
材のポジティブな面が残されている。この剥片作出技術は
瀬戸内技法に類似するもので、作出された剥片は翼状剥片
と呼称されている。

(接合資料の説明)

母岩④⑨(第17図)

第17図左位上の(C)は石核に剥片が最終的に接合し
た段階のものである。次に、打面調整剥片2枚(337・339)
を除去した図を(A)・(B)に示す。(A)がネガティブで打
面部、(B)がポジティブで底面部に相当する。この素材は
大形の剥片であることがわかる。(D)は翼状剥片の石核と
なる盤状剥片を作出した石核である。裏面は自然面。



第 17 図 岩戸第 I 文化層出土の剥片生産技術第 IV 類 (芹沢編 1978 より)

(C)は盤状剥片(A)・(B)と石核(D)が接合したものの。石核(D)の矢印はその際の打撃方向である。石核(D)の格子目の剥離痕は、この盤状剥片と同石核(D)が接合した面である。打撃⑥は、その腹面の打撃方向である。また、この石核(D)の表面には周縁から打撃された剥離痕がみられることから、盤状剥片は剥片生産技術第Ⅲ類によって獲得されていることがわかる。

次に、盤状剥片の背面、すなわち、翼状剥片の打面側について同右側の図で説明する。

第17図-① 打撃Cは打面調整の剥離痕である。これが右位に施された最終的な剥離痕である。

次に、打撃1(◆)がおこなわれ、翼状剥片1が作出される。

第17図-② 打撃D(●)が左位に底面より打面調整として施される。次に打撃2(◆)がおこなわれ、翼状剥片267が作出される。

第17図-③ 打撃E(●)が右位に石核の剥離作業面より打面調整として施される。次に打撃3(◆)がおこなわれ、翼状剥片217が作出される。

第17図-④ この後の剥離作業の状況は接合資料が欠落し、接合資料の中に間隙がみられる。欠落した翼状剥片は、打撃F(●)・G(○)によって左側に打面調整が施された後、剥離作業面側から得られている。打撃4(◇)は欠落した翼状剥片を剥ぎ取っている。

第17図-⑤ 打面調整を全く施さず、打撃5(◆)がおこなわれ、翼状剥片278が作出される。打面調整痕C・E・Gは先の剥離痕である。

第17図-⑥ 放棄された翼状剥片の石核140である。

母岩④のような調整作業は石核の正面観を「山形」に整え、剥離作業を容易にするためにおこなわれたものである(柳田・藤原1981・柳田1982)。

第17図-剥片1(長さ3.2cm、幅5.8cm)は一枚目の翼状剥片である。末端部に底面をもつ。背面には横位からの一枚の大きな剥離痕が観察される。この母岩からの翼状剥片の最初の剥離は、盤状剥片の打面部からおこなうのではなく、側部を新たに剥離し、厚みを確保することから始まっている。打面は二枚の剥離痕で構成されている。腹面側にはバルバー・スカーがみられる。

同図-剥片267(長さ3.9cm、幅6.4cm)は二枚目の翼状剥片である。末端部に底面をもつ。打面が「山形」になるものの、左側の打面縁が腹面に接触し、右側はおこなわない。左右対称の均一な形状ではない。次の翼状剥片を剥離する際、石核に対してこの「角」を取り除くため背面からの調整がおこなわれている(⑥)。背面側に腹面と同一方向を示す剥離痕が二枚観察される。腹面側にはバルバー・スカーがみられる。

同図-剥片217(長さ3.5cm、幅7.2cm)は三枚目の翼状剥片である。末端部に底面をもつ。右側の打面縁が腹面に接触し、左側はしない。次の翼状剥片を剥離する際、石核に対してこの「角」を取り除くため背面からの調整がおこなわれている。(③)腹面側にはバルバー・スカーがみられる。

同図-剥片278(長さ5.0cm、幅5.75cm)は五枚目の翼状剥片である。四枚目は存在しない。背面側には末端部に底面がみられ、部厚く不均整である。腹面には大きな打面が付着している。腹面側にはバルバー・スカーがみられる。この翼状剥片を剥離した後、石核140が放棄されている。

同図-石核140(長さ6.8cm、幅6.9cm)は翼状剥片石核である。左位に打点を残すネガティブな剥離面と、底面を剥離したポジティブな大きな剥離痕がみられる。

右位には三枚の打面調整痕とネガティブな大きな剥離面が観察される。

母岩④

第17図下は石核にすべての剥片が接合した母岩④図である。剥片1441と石核1447の接合資料は瀬戸内技法で得られた翼状剥片と同石核に類似する。打点が打面と作業面を交互に入れ替えながら石核の周縁をまわる剥離技術がこの母岩別の接合資料からよみとれる。すなわち、剥片を素材として底面を有する横長剥片を2~3枚剥離する技術の存在が看取できる。剥片1441には打面部の調整痕はない。しかし、その正面観は「山形」を呈している。剥片1441を作出した後、はじめて石核1447の打面部に正面側から剥離が施されるが、これが「山形」の打面を作成するための調整作業であろう。その後、石核1447は側面が除去され、剥片1445がスクレイパーに供されている。

第17図-1263(長さ7.7cm、幅6.5cm)は形状が逆三角形を呈する剥片である。打面が分厚く、大きい。二枚で構成する調整打面。背面側に腹面と同一方向を示す剥離痕と自然面が観察される。腹面側にはバルバー・スカーがみられる。

同図-1284(長さ5.2cm、幅6.4cm)は、打面部で先の剥片1263に接合する。打面部が厚い台形状の剥片である。三枚の剥離面をもつ調整打面。背面には多方向からの剥離を示す痕跡がみられる。

同図-1441(長さ4.2cm、幅6.7cm)は翼状剥片である。底面をもつポジティブな剥離痕がみられる。打面は調整されておらず、自然面である。背面には同一方向を示す大きな剥離痕があり、先に同じ形の剥片が作出されている。

同図-1455は剥片の末端に調整加工がなされた外彎刃をもつスクレイパーである。背面自然面。剥片の縁部から折りとられている。

同図-1447(長さ8.1cm、幅8.9cm)は形状が逆三角形を呈する翼状剥片石核である。左位には打面調整の際のネガティブな剥離痕と自然面がみられる。左側面は縁部から剥離によって折りとられている。右位は翼状剥片を剥離したネガティブな剥離痕と、腹面側のポジティブな剥離痕がみられる。腹面側にはバルバー・スカーがみられる。

【第Ⅳ類の特徴】

ここでは母岩④の資料を取りあげる。

a) 剥片の形状

〈大きさー長さと幅ー〉

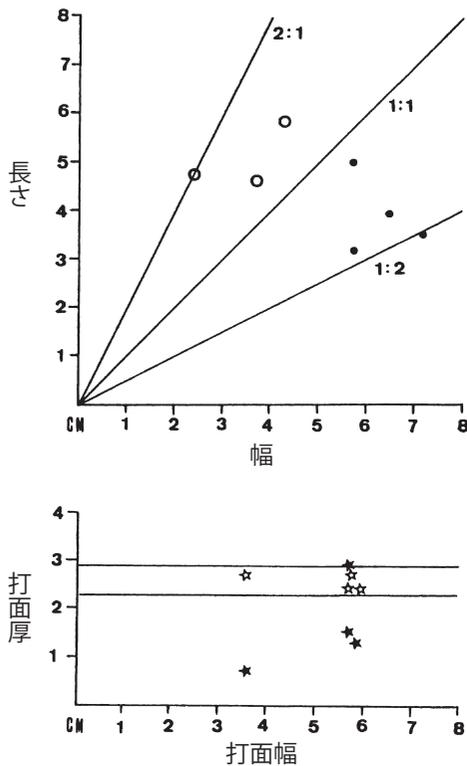
i) 長さと幅と高さ

第18図上は母岩④から剥離された剥片の長さとの比を示した。長幅比が1:1を縦長よりを超えるような3点の剥片は打面調整剥片(251・266・339)である。

打面調整剥片は長さが4.6~5.8cm前後あり、幅が2.3~4.3cm前後ある。縦長の傾向を示す。

一方、1:1を横長よりを超えるような剥片4点は翼状剥片(1・267・217・278)である。翼状剥片は、長さが3~5cm前後あり、幅が5.5~7cm前後ある。いわゆる横長剥片である。翼状剥片については、底面から打点の高さも示してみた。高さは2.3~2.9cmと一定である。

第 18 図



第 18 図 第IV類母岩^④

〈最大幅位置〉(母岩^④の翼状剥片 4 点)

- ・形状が逆三角形を呈するもの (A) ・ 0 点 (0%)
- ・形状が中ふくらみを呈するもの (B) ・ 0 点 (0%)
- ・形状が末広がり呈するもの (C) ・ 4 点 (100%)
- ・翼状剥片は底面の付着を目的とするため、末広がりの C が最も多く占める。

〈打面側の形状〉

—打面幅と厚—

第 18 図下は母岩^④から剥離された剥片の打面部の幅と厚の比を示した。幅は約 3.6 ~ 5.9cm 前後である。厚は約 0.7 ~ 2.9cm 前後である。打面幅と厚も一定である。

—打角—

母岩^④から剥離された翼状剥片の打角は、1 (111 度)、267 (126 度)、217 (120 度)、278 (123 度)。打角は 120 ~ 129 度が多い。

—打面の調整—

翼状剥片の打面は山形を呈するため、打点を頂点として左右に傾斜する。4 点の翼状剥片は打面調整痕が 2 枚の剥離痕を有する。残余 1 点 (278) は 4 枚からなる。この剥片は最終時の翼状剥片である。

〈背面側の剥離面構成〉

翼状剥片は、背面の剥離面が腹面と同一の打撃方向を示す剥離面と、末端にポジティブな剥離面を有する。翼状剥片 1、267、217、278 には末端にポジティブな剥離面を有している。

b) 石核の形状

241 の石核は、ネガティブとポジティブな剥離面を保有

し、山形打面の形状がみられる。

以上、接合資料や母岩別資料から岩戸第 I 文化層の剥片生産技術の量的比率を整理すると以下ようになる。

- 第 I 類 ・ ・ ・ ・ ・ 20 個 (34%)
- 第 II 類 ・ ・ ・ ・ ・ 6 個 (10%)
- 第 III 類 ・ ・ ・ ・ ・ 24 個 (41%)
- 第 IV 類 ・ ・ ・ ・ ・ 8 個 (14%)

—石核の分類から—

岩戸第 I 文化層から出土した石核は 62 個ある。これらを A ~ D 類に分類したが、剥片生産技術第 I ~ IV 類との対応関係で検討してみたい。

A 類石核：打面が 1 カ所か、上下の対応する 2 カ所に設定される石核で剥離作業がその打面上を後退していくもの。

第 19 図-997 (母岩^⑩) は剥片を素材とした石核である。b 面に一枚のポジティブの大きな剥離面が残存し、これが打面となっている。打面に対する調整痕は観察されない。この周縁から小形の縦長剥片が連続剥離されている。高さ 4.4cm、幅 7.3cm、厚さ 5.5cm。

同図-961 (母岩^⑪) は両設打面の石核である。上設の打面 (c 面) には一枚の平坦な剥離面、下設 (b 面) には数枚の剥離痕が観察される。最終作業面となった a 面には上設打面 (c 面) からの小形縦長剥片が連続剥離されている。また、b 面は自然面と下に数枚の剥離痕が見られ、下設の打面からも以前に剥離されたものと推定される。高さ 5.1cm、幅 5.1cm、厚さ 2.7cm。

同図-870 (母岩^⑫) は単設打面の石核である。上設の打面 (c 面) には三枚の剥離痕が観察される。打面に対する調整痕と考えられる。a 面上に上設打面 (c 面) からの連続した縦長の剥離痕がみられる。b 面に自然面が見られることから、打点は作業面を後退したものと考えられる。高さ 7.8cm、幅 4.7cm、厚さ 3.5cm。

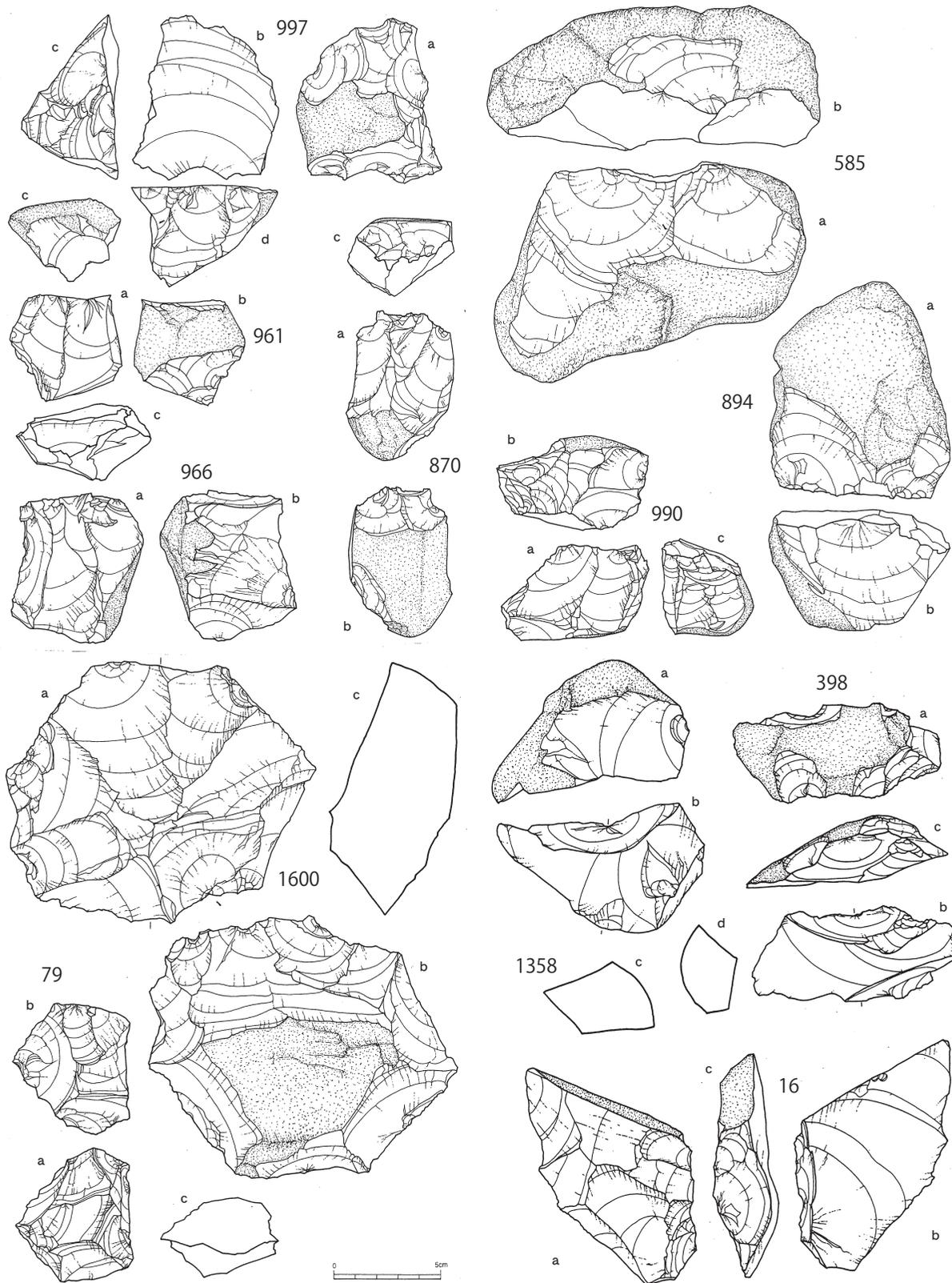
同図-966 (母岩^⑬) は上設に一枚の平坦打面 (c 面)、下設にも一枚の傾斜した剥離面が見られる。a 面で剥離作業がおこなわれたのであろう。連続した縦長の剥離痕がみられる石核である。裏面 (b 面) も横位からの一枚の大きな剥離面が観察されるが、これは自然面除去のための初期段階の剥離であろう。高さ 6.7cm、幅 5.7cm、厚さ 3.1cm。

B 類石核：形状がチョッピング・トゥール状を呈し、剥離作業において打面と作業面が交互に入れかわるもの。

同図-885 は大形の礫を素材とした石核である。形状がチョッピング・トゥール状を呈する。a 面には三枚、b 面に一枚の剥離痕が観察される。剥離作業面が交互に入れ替わったのではなく、先に a 面が打面となり、b 面で横位に剥離が進行したものと推定される。いずれも剥離された剥片の背面末端には自然面が付着したものと推定される。高さ 9.2cm、幅 15.1cm、厚さ 6.5cm。

同図-894 は大形の礫を素材とした石核である。最終作業面は a 面である。幅広の剥離面が数枚観察される。b 面にも中央の大きな剥離痕と、左側に横位の先行する剥離痕が観察される。打面と作業面を頻繁に入れ替えながら、剥離が進行したものと推定される。剥片の大きさは原礫のあたりに規制されている。高さ 9.9cm、幅 8.1cm、厚さ 6.9cm。

同図-990 (母岩^⑭) は剥離が進行した石核である。下に自然面が残存する。最終作業面は a 面である。打点が c 面に無く、b 面に残存することから、この石核も打面と作業面を頻繁に入れ替えながら目的とする剥片剥離がおこ



第19図 岩戸第I文化層出土の石核類 (芹沢編 1978 より)

なわれていたものと推定される。高さ 5.1cm、幅 7.1cm、厚さ 4.3cm。

C 類石核：形状が円盤形を呈し、多打面から石核の中心部に向けて、剥離作業が求心的におこなわれているもの。

同図—1600 (母岩^⑧) は円盤形の石核である。a 面には石核の周縁を右から左へ打点が移動していることが観察される。剥離された剥片は、打面幅が大きい、縦長の形状を呈していたものと推定される。b 面は、中央に自然面が残存しており、石核の周縁をまわる剥離痕が観察される。剥離された剥片は横長の形状を呈していたものと予想される。高さ 14.1cm、幅 12.1cm、厚さ 5.4cm。

同図—79 は、剥離が進行した石核である。両面に多方向からの剥離痕が観察される。最終作業面は b 面である。b 面には打点が石核の周縁を右から左へ移動していることが観察される。a 面にも打点が残存し、a・b 両面を入れ替えながら剥離が進行したものと推定される。高さ 6.2cm、幅 5.5cm、厚さ 2.8cm。

D 類石核：大形剥片を素材としたもの。

同図—1358 (母岩^④) は素材となった剥片の側面部から末端部にかけて一枚の作業面を残す。底面を有する横長剥片が 2～3 枚作出されたものと推定される。素材となった剥片の背面側には打面に対する調整痕がみられない。高さ 3.0cm、長さ 6.2cm、幅 9.9cm。打角は 115 度。

同図—398 (母岩^③) は、打面側に自然面を多く残し、打面縁には打点のない小さな剥離痕がみられる。これが石核の正面観を「山形」に整形した調整痕である。打点付近は自然面を残す。b 面中央部の剥離痕が翼状剥片を作出したものの。高さ 2.7cm、長さ 4.5cm、幅 9.4cm。打角は 102 度。

同図—16 (母岩^⑩) は大形の縦長剥片を素材とした翼状剥片の石核である。この石核 (盤状剥片) の作出方法は岩戸第 I 文化層の第 III 類の剥離技術が用いられている。C 面には翼状剥片を剥離した痕跡が観察できる。石核の正面 (作業面) に 3 枚の剥離痕があるが、左位の剥離痕は素材となった盤状剥片の打面部が一部残存したものである。また右位の小さなものは、ツイン・バルブ的なもので、中央のものと同時に剥離されたものであろう。b 面のバルブの位置から推定して、この翼状剥片石核からは 1～2 枚の翼状剥片しか剥離されなかったものと考えられる。a 面には調整痕が打面縁に沿ってみとめられる。この石核の正面観は「山形」を呈している。高さ 2.6cm、長さ 7.8cm、幅 11.1cm。打角は 112 度。

E 類石核：多面体の石核。省略。

以下、石核の量的な比率を示した。

A 類	21 個 (34%)
B 類	8 個 (13%)
C 類	12 個 (19%)
D 類	17 個 (27%)
E 類	4 個 (6%)

石核 D 類は 17 個 (27%) みとめられるが、翼状剥片石核として定義づけられる資料は 8 点で、全体としては 13% 弱である。また、D・E 類を第 III 類の剥片生産技術の石核類に含めれば、第 III 類の数量が第 I 類より増加するが、母岩別資料と剥片生産技術の比率は大差がない。

以上のことから勘案すると、岩戸第 I 文化層出土の剥片生産技術では第 I 類と第 III 類が全体の 75% 以上を占めていたことになり、石器類はこれらの技術から作出された素材

を用いて製作されたことになる。この他、岩戸第 I 文化層出土の剥片には石刃が剥離されている。これらは第 I 類から剥離されたもので、いずれも縦長で、長さは幅より 2 倍以上あり、両側辺が平行している。しかし、打面部や作業面を観察すると丁寧な調整技術痕がみられない。また東北地方でみられるような長大な石刃も存在しない。調整技術が発達しない石刃技法といえる。一方、瀬戸内技法は 14% 前後にとどまり、剥片生産技術全体としては主体的な位置を占めていたとは言えない。瀬戸内技法以外によって作出される横長剥片は第 II・III 類の剥片生産技術から剥離されたものである。

次に、各石器類がどの剥片生産技術から作出された剥片を素材とするかを検討してみた。

母岩別にみたナイフ形石器 (34 点) と剥片生産技術の関係は以下のようなことが指摘できる。

剥片生産技術 I 類	14 点 (41%)
剥片生産技術 II 類	2 点 (5%)
剥片生産技術 III 類	15 点 (44%)
剥片生産技術 IV 類	3 点 (8%)

ナイフ形石器の素材獲得に用いられる剥片生産技術は、I 類と III 類が 85% を占めることになる。特に I・II 類の場合、一つの母岩から 2 点以上のナイフ形石器が作出されることが多く、母岩^⑦ は 6 点のナイフ形石器を製作している。また、IV 類は 3 点存在するが、瀬戸内技法から作られた翼状剥片を素材とした国府型ナイフ形石器は 1 点である。なお、母岩^⑨ には典型的な国府型ナイフ形石器が発見されていない。

尖頭器は 13 点中、8 点を母岩別にみた三稜尖頭器と剥片生産技術の関係は以下のようなことが指摘できる。

剥片生産技術 I 類	1 点 (12.5%)
剥片生産技術 II 類	1 点 (12.5%)
剥片生産技術 III 類	5 点 (62.5%)
剥片生産技術 IV 類	1 点 (12.5%)

三稜尖頭器は 13 点出土したが、剥片生産技術が判明したのはそのうち 8 点であった。この種の石器は第 III 類の剥片生産技術で作出された剥片が広く素材として用いられている。

スクレイパーは 27 点出土した。母岩別にみた場合、剥片生産技術の関係は以下のようなことが指摘できる。

剥片生産技術 I 類	9 点 (31%)
剥片生産技術 II 類	6 点 (21%)
剥片生産技術 III 類	12 点 (41%)
剥片生産技術 IV 類	2 点 (7%)

スクレイパーの素材獲得に用いられる剥片生産技術は I～IV 類まで存在する。なお、IV 類の 2 点中、1 点は翼状剥片で、それはスクレイパーの素材となっている。この他にも、錐、彫刻刀形石器、チョッパーが発見されているが、いずれも量的には僅少で不明である。

以上、岩戸第 I 文化層の代表的な器種であるナイフ形石器、尖頭器、スクレイパー類に供給する剥片生産技術の関係を検討してみた。尖頭器には第 III 類の剥片生産技術から剥離された横長、幅広の剥片類が多く供給していることが指摘できる。一方、ナイフ形石器、スクレイパー類は、素材への供給に剥片生産技術の偏りが無く、I～III 類からほぼ等しく供給されている。ナイフ形石器はその素材に残された剥離面の観察から推定できるように、縦長、横長、幅広の各種剥片類が用いられている。スクレイパー類も I～III 類から供給されている。剥片の末端に角度の急峻な刃

部をもつスクレイパー類が僅かに存在するものの、東北地方で見られるような典型的な縦長剥片を素材としたエンド・スクレイパーはみられない。剥片生産技術Ⅳ類から作出された剥片類は、特殊なナイフ形石器への素材になっているとは限らず、尖頭器、スクレイパー類へも供給されている。

2. 岩戸遺跡内の第Ⅰ文化層と同一時期の石器群

第1次調査の岩戸遺跡第Ⅰ文化層の石器組成について述べたが、後の第2次調査では第Ⅰ文化層と全く同じ層から岩戸D文化が発見された。また、第3次調査でも同時期と考えられる第6層下部の石器が出土した。この第2・3次調査の二回の発掘で剥片尖頭器、斜め整形するナイフ形石器、国府型ナイフなどが出土し、第Ⅰ文化層で発見されなかった器種が確認された。第Ⅰ文化層の石器組成にこれらの石器が重要な位置を占めるので岩戸D文化と第6層下部の石器類をここで紹介し、記載する。

1) 岩戸D文化層出土の石器群

1979年2月に別府大学の坂田邦洋氏によって岩戸遺跡の第2次調査がおこわれ、第1次調査区の東に隣接する地区で発掘がおこなわれた。この時は、遺跡全体に試掘がかけられ、調査面積は130.5㎡におよんだ。旧石器時代の文化層が11枚確認されたと言う。第2次調査では最上位のソフトの部分から細石刃(岩戸A文化層)が発見された。また、下位のハードにあたる層から、ナイフ形石器文化(岩戸B・C・D文化層)が発見された。特に、調査を担当した坂田氏は、黒色帯の上位の層から発見され岩戸D文化層石器群(327点)を、第1次調査の第Ⅰ文化層と同一層から出土したものであるとした。また、町田氏はこの下位に始良Tn火山灰(以下、AT)層と黒色帯が存在することを明らかにした。AT下位の黒色帯からは、岩戸E文化層-1点、岩戸F文化層-13点の石器が出土している。黒色帯が抜けた下位の黄褐色のハード・ローム層(第11~13層)からは岩戸G文化層-8点、岩戸H文化層-10点、岩戸I文化層12点、岩戸J文化層-2点が発見されている。しかし、いずれもその出土点数は僅少である。第2次調査では、第1次調査の岩戸第Ⅲ文化層に相当する段丘礫層直上からも2点の石器群(岩戸K文化層)が発見されている。

以下、岩戸D文化層の石器群について検討する。岩戸D文化層石器群からは327点の石器類が出土している。坂田氏によると石器類は次のように分類できると言う。

ナイフ形石器	13点
彫刻刀形石器	5点
剥片尖頭器	1点
チョッパー	5点
チヨピング・ツール	2点
スクレイパー	58点
使用痕ある剥片	77点
剥片	114点
石核	29点
敲き石	22点
台石	1点
合計	327点

大枠で坂田氏が示された石器類の分類と名称をおおむね踏襲するが、ここでは上述した岩戸第Ⅰ文化層でおこなった分類基準にしたがって記述をすすめたい。

a) 石器組成とその特徴について

ナイフ形石器(第20図-1~8)

ナイフ形石器は13点存在する。上述した岩戸第Ⅰ文化層のナイフ形石器の分類基準で整理すると、A類3点、B類4点、C類2点、F類1点に分類される(不明3点)。B類の4点中の2点は、縦長剥片を素材とし、斜めに整形したナイフ形石器である。岩戸第Ⅰ文化層には斜めに整形するようなナイフ形石器が存在しないことを指摘したが、このナイフ形石器が岩戸D文化層の石器群に新たに存在することが確認された。

第20図-1は横長剥片を素材とした一側辺加工のナイフ形石器である(A類)。背面側は自然面である。中央部で折れてしまったのか、その面からも二次加工が施されている。

同図-2は縦長剥片を素材とした一側辺加工のナイフ形石器である(A類)。背・腹両面から急角度の二次加工がなされている。打面を残す。先端部が折損している。

同図-3は形態が切出し状を呈するナイフ形石器である。腹面側の打撃方向の位置から推定すると、縦長剥片を斜めに整形して、二側辺加工のナイフ形石器に仕上げた石器である。刃縁部がやや長く、素材の縦長剥片をたち切るように整形している(B類)。

同図-4は基部が折損しているが、縦長剥片を素材とした切出し状のナイフ形石器である。左側縁の末端部の調整痕の一部は形状を切出し状に作るための剥離痕であろう。片側辺が長く、その反対の辺が短く加工されている。縦長剥片を斜めにたち切るように整形したナイフ形石器である(B類)。二点の3、4の斜めに整形するような切出し形のナイフ形石器は、いわゆる九州型ナイフ形石器と呼称されてきたものである(鎌木 間壁 1965)。第2次調査の結果、この種のナイフ形石器も本文化層に存在することがあきらかになった。

同図-5は縦長剥片を素材とし、基部側を尖らすように加工する(B類)。刃部は切出し状を呈する。打面部やバルブが取り除かれている。先端部は折損している。

同図-6は横長剥片を素材とする。一側辺を加工し、反対縁を切断したしている(C類)。刃部が尖っている。

同図-7は斜め長の剥片を素材としたナイフ形石器である(C類)。打面側を基部とし、そこに細かな二次加工が施されている。現在、今峠型と呼称されているナイフ形石器である(鎌田 1999)。

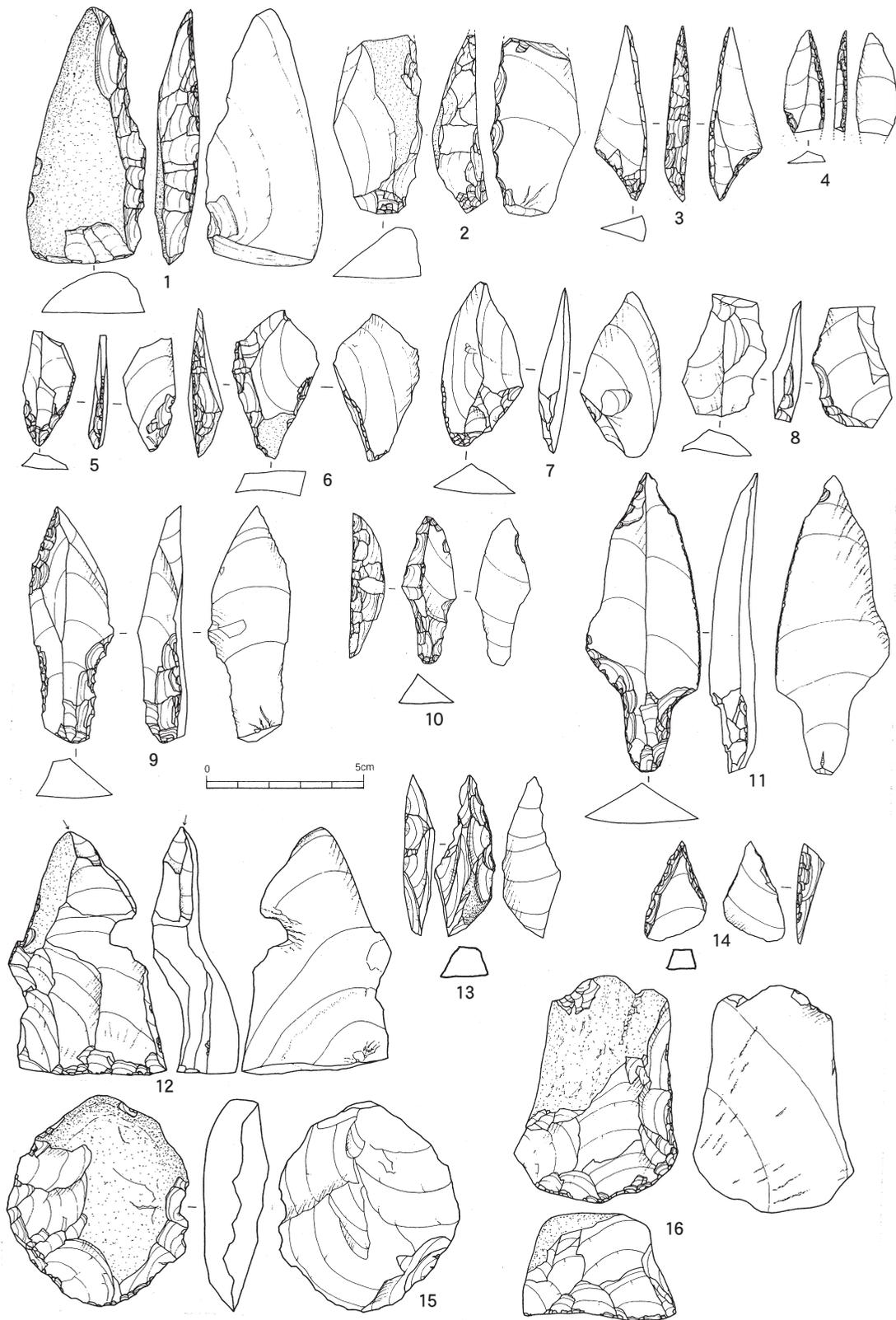
同図-8は基部側を背面側から加工したナイフ形石器(F類)。

剥片尖頭器(同図-9~11)

剥片尖頭器は3点発見されている(清水 1973)。

同図-9は縦長剥片を素材とし、打面部を基部にして茎を作り出している。右側基部が急峻に加工され、左側が浅い。打面部が残存する。剥片の末端にも急峻な調整剥離が施されている。形態的には剥片尖頭器の範疇で考えられる。

同図-10は縦長剥片を素材とし、打面側を基部とせず、先端部を基部とする剥片尖頭器である。左位一側縁全体にブランディングを施し、反対縁は基部側のみ二次加工が



第20図 岩戸D文化層出土の石器 (坂田 1980 より)

施されている。基部は明確に製作されている。小形である。

同図-11は典型的な剥片尖頭器である。縦長の剥片を素材とし、打面側に基部を作りだし、末端にも細かな調整剥離が施されている。大形の剥片尖頭器と言えよう。本文化層にも剥片尖頭器の存在が確実となった資料である。

三稜尖頭器 (同図-13)

13は縦長剥片を素材とした三稜尖頭器である。A3類に相当する形態である。尖頭部は腹面側から調整剥離を施し、打面側を除去する。基部は折れ面と自然面が残されている。断面が台形を呈しており、稜の部分からの加工はみられない。

スクレイパー (同図-15・16)

岩戸D文化層には58点のスクレイパーが検出されている。出土量では、この器種が最も多い。しかし、スクレイパーとして分類されている中には、調整を微細剥離痕とする方が妥当な石器が含まれている。それらを除けば、量的に減少するものと考えられる。ここにも、A類のスクレイパーとした特徴的な形態が発見されている。

同図-15は刃部が3/4を持つサム・スクレイパーのような形態を呈する。背面側に自然面を大きく残し、剥片の末端とその周縁に二次加工が施されている。

同図-16は分厚い剥片の打面側に急峻な角度の調整剥離を施したエンド・スクレイパーである。打面側が除去され、刃部が外彎する。このような急峻な角度を保持するエンド・スクレイパーは岩戸第1文化層には量的に少なかった。

その他の石器 (同図-12・14)

同図-12は縦長剥片の先端部に槌状剥離をほどこした彫刻刀形石器。自然面を残す剥片末端部に2条の槌状剥離がみられる。

同図-14は報告書では台形石器に分類されているが、錐形石器と推定される。打面側を除去して錐部を腹面側から調整剥離している。

以上、第2次調査の発掘では剥片尖頭器、斜め整形するナイフ形石器が発見され、第1次調査では得られなかった器種が本文化層で確認されたことになる。

b) 剥片生産技術の特徴について

次に、岩戸D文化層では、資料の接合作業や母岩別ごとの剥片生産技術の復元などがおこなわれていないが、岩戸第1文化層と同様な基準で石核の分類がおこなわれている。石核は29点出土している。石核の形態から推定すると、当文化層には、第1～III類の剥片生産技術が存在しているものと考えられる。ただし、瀬戸内技法に類する剥離技術は存在しない。

c) まとめ

第2次調査のトレンチは第1次調査に隣接した位置に設定された。第2次調査を担当し、先の第1次調査にも参加した坂田氏は、岩戸Dの出土層が第1次調査で確認された岩戸第1文化層の同一層であることを報告書の中で指摘している(坂田1980)。また、第3図で示したように第1次調査第1文化層の出土状況での広がりから岩戸D文化層のトレンチを包括するように出土していることから、両石器群は同時期の同一文化層といえる。ここで、岩戸D文化層出土の石器群は次ぎのように整理できよう。

i) 岩戸D文化層出土の石器群は岩戸第1文化層と同一層から出土している。

ii) 出土状況から両者は同一ブロック内のものとして把握することができる。

iii) ナイフ形石器は一側辺加工のものと二側辺加工のものが主体である。二側辺加工に仕上げたものの中に斜めに整形したナイフ形石器がある。国府型ナイフ形石器は存在しない。

iv) 縦長剥片を素材とし、打面部を基部にして茎を作り出した剥片尖頭器が存在する。

v) 断面三角形を呈した三稜尖頭器(A類)が存在する。

vi) スクレイパー類は、量的に多く、剥片の周縁に調整剥離を施したものや、急峻な角度の調整剥離を施したエンド・スクレイパーが存在する。

vii) 岩戸第1文化層に相当するような第1～III類の剥片生産技術が存在する。

viii) 瀬戸内技法に類する剥離技術はない。

2) 岩戸第6層下部出土の石器群

1979年10月には、清川村と大分県教委によって第3次調査がおこなわれ、旧石器時代の文化層が3枚、縄文時代の包含層が2枚確認された。ここでは、岩戸第6層下部出土の石器群について説明する。

第6層下部から出土した遺物は以下のようになった。

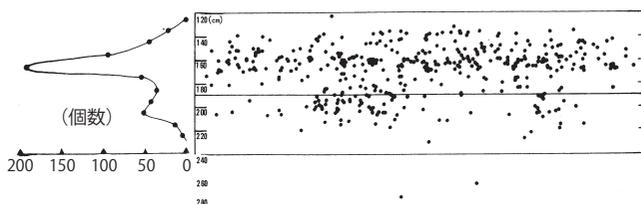
ナイフ形石器	4点
スクレイパー	2点
三稜尖頭器	2点
不明石器	1点
石核	14点
剥片	54点
碎片	40点
台石	1点
礫類	21点

合計

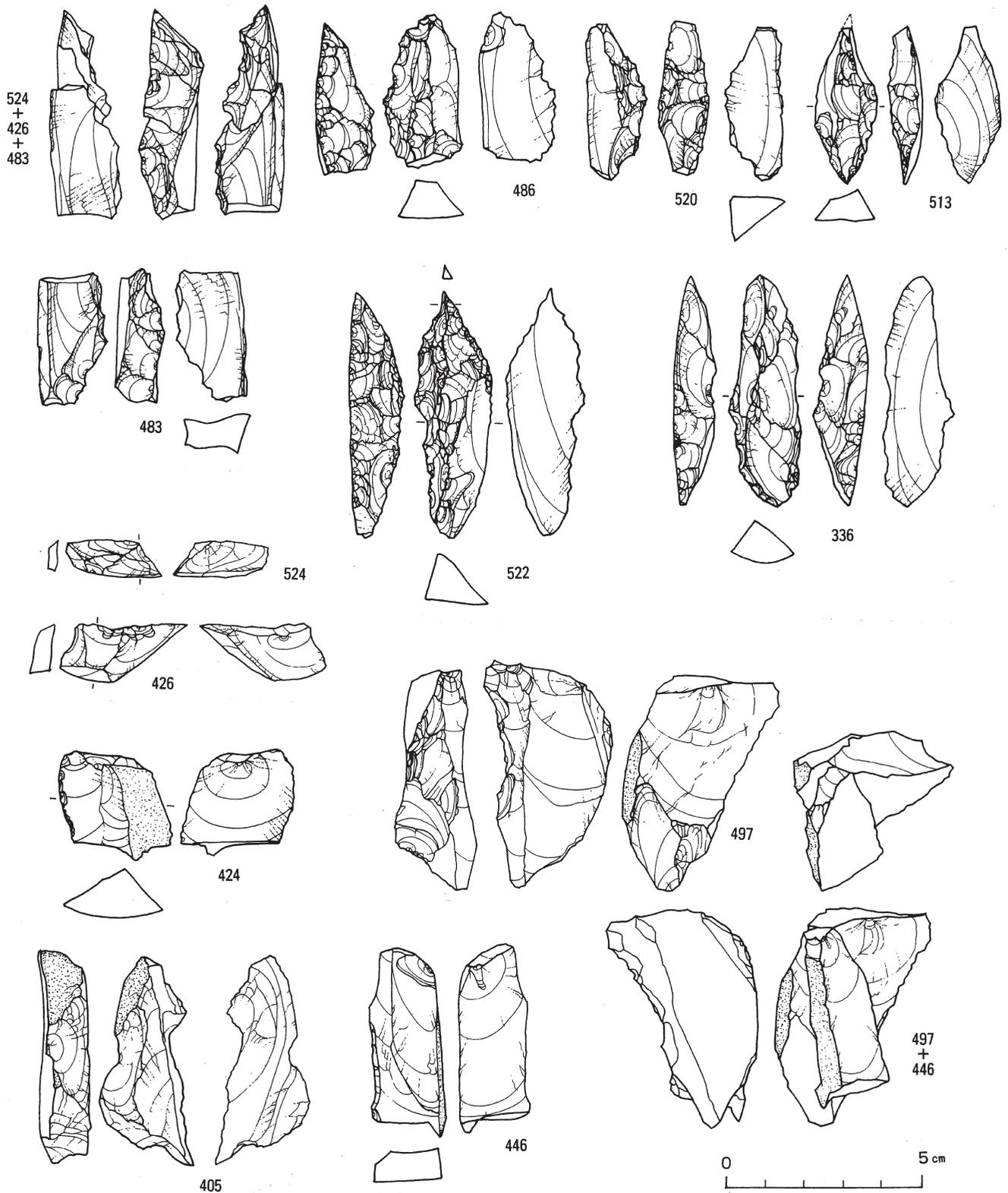
139点

第6層下部出土の石器群の遺物は、139点であるが、その内、石器類は118点となった。また、母岩別資料は7母岩で母岩No.⑦・⑨・⑱・㉑・㉒・㉓・㉔である。

第3次調査では32㎡(旧石器のみ)が発掘され、第4トレンチの第6層(褐色のローム層)から石器・礫岩が439点発見され、それをヴィーナス曲線によって上下2枚の旧石器時代の文化層(岩戸6上層石器群-315点、岩戸6下層石器群-118点)の存在を確認した。また、黒色帯に相当する第8層からも3点の石器が検出された(岩戸8層)。



第21図 第4トレンチ遺物垂直分布曲線と断面投影図(西壁)
(清川村教委1983より)



第 22 図 第 4 トレンチ第 6 層下部出土の石器類 (清川村教委 1986 より)

a) 石器組成と剥片生産技術の特徴について

ナイフ形石器 (第 22 図- 524 + 426 + 483・486・513・520)
本文化層からは 4 点発見された。

ナイフ形石器 524 + 426 + 483 は本体 (520) にブランディング・チップ (426・524) が接合したものである。ブランディングされた背縁は鋸歯状に整形され、近畿、瀬戸内海地域で発見される国府型ナイフ形石器の背部加工に類似する。また、背面側には腹面と同一方向の一枚の大きなネガティブな剥離痕、刃部側にはポジティブな剥離面がみられる。素材剥片を獲得するためには底面を付着させる横長剥片を連続剥離した瀬戸内技法の存在が予想される。

ナイフ形石器 486 は中央部で欠損している。横長剥片を素材とし、右側の刃部に相当する剥離痕はポジティブな剥離面を残す。背部の形態は鋸歯状を呈している。背面に相当するネガティブ剥離面は除去され、ブランディングが剥片の底面にまで及んだものと思われる。打面部には急峻な調整剥離が施され、断面が台形を呈する。また、刃縁にも浅い剥離痕が看取され、二側縁に加工されたナイフ形石器の可能性がある。国府型ナイフ形石器であろう。

ナイフ形石器 520 は左右の両先端が共に僅かに欠損している。a・b 両面には一枚のポジティブな剥離痕がみとめられ、底面部までブランディングがおよんだ国府型ナイフ形石器である。また、ブランディングは、打面側からだけでなく、底面側からも施されている。

ナイフ形石器 513 は素材に横長剥片を用いたナイフ形石器である。先端部が僅かに折損している。a 面の左側辺の剥離痕にはポジティブな面、c 面上部には打面が残されており、その打点の位置・方向から推定すると、この素材は瀬戸内技法で製作された翼状剥片ではない。剥片素材の石核から作出された横長剥片がナイフ形石器の素材に供されたのであろう。形状が不整形な切出し形を呈する。ナイフ形石器のブランディングは打面部と反対縁の一部にもみられる。後者の調整剥離痕は浅い。

三稜尖頭器 (第 22 図- 522・336)

三稜尖頭器は 2 点発見されている。

522 は横長剥片を素材とした三稜尖頭器である。完形品である。尖頭部は入念に加工され、錐のような突出した尖頭部をもつ。稜上からも調整され、断面形が三角形をなす。反対側は素材時のネガティブな剥離面を大きく残す。腹面側は調整がほどこされていない。縁辺部が鋸歯縁を呈する。

336 は横長剥片を素材とした三稜尖頭器である。完形品である。尖頭部がやや円みをもつ。意識して尖頭部を細かく調整していない。調整加工は、剥片の腹面側から打面と縁辺部の両辺におこなわれており、稜上の調整が中央部のみである。

スクレイパー (第 22 図- 405・424) (第 22 図- 497・441)

スクレイパーは 4 点発見されている。

405 は横長剥片の打面側に一回の打撃によってノッチ状の加工が施された形態である。424 は剥片の縁辺に直線的に調整したものである。微細な剥離痕が背面にみられる。497 は縦長剥片の背面側にやや内彎ぎみの刃部が形成されている。また、刃部は急峻である。497 は剥片 446 と接合する。いずれも平坦な打面から連続してやや縦長の寸詰まり剥片が剥離されている。スクレイパー 441 についての記載は省略する。

b) 剥片生産技術

— 接合資料の説明 —

母岩⑩の接合資料 (第 23・24 図)

第 23 図は母岩⑩のすべての剥片と石核が接合したものである。この図から判断すると、母岩⑩はやや扁平な形状を呈する半円礫が素材に利用されている ((a)・(b))。原礫はいくつかに分割されてから目的剥片が作出されている。右位に接合資料の模式図を示した。接合資料 A → 接合資料 B・C の順で分割されている (c)。

分割資料 A (第 24 図左位)

中央部は分割後のすべての剥片と石核が接合したものである (410 + 454 + 448 + 439 + 458)。

打面は一ヶ所に設定され、その調整が石核 458 の正面から 2 度おこなわれている。410 はその一枚の剥片で、自然面を大きく残す小形の幅広剥片である。

次に大形で厚手の縦長剥片が剥離されるが、腹面側に彎曲してしまっている。この剥離は失敗したものと思われる。この剥離以前に、448・439 の剥片が作出されている。これらの剥離は石核の稜形成のための作業面調整ではない。448 (長さ 3.3cm、幅 3.8cm) は小形の幅広剥片で、打面と側面に自然面を残す。背面には下位からの一枚の大きな剥離痕がみられる。439 (長さ 2.8cm、幅 2.9cm) は斜め長の小形剥片。

次に、石核 458 (長さ 7.6cm、幅 4.6cm) は縦長剥片を上位から連続剥離した石核である。一枚剥離面をもつ平坦打面。裏面は自然面である。

分割資料 B (第 24 図右位)

第 24 図の右上は分割資料 B のすべての剥片と石核が接合したものである。

462 (長さ 7.6cm、幅 3.5cm) は分割後に最初に剥離された縦長剥片である。背面に自然面をほぼ全部に残す。

次に分割されたポジティブな面 (スクリーンの部分) を打面として、500 (長さ 4.6cm、幅 3.6cm)、422 (長さ cm、幅 3.6cm) の順で剥片が作出される。剥片 500 (長さ 4.6cm、幅 3.6cm) と剥片 422 (長さ 4.5cm、幅 5.0cm) は形状が縦長でも寸詰まりで、末端には石核の一部が付着している。いずれも自然面をもつ。剥片 422 の剥離後、打面部に数回の細かな調整作業を試みているが、継続することなく石核 523 の側面に剥離が移動している。石核 523 は側面の縦長剥片を剥離後に放棄されている。523 (長さ 6.8cm、幅 3.9cm) は厚手の縦長剥片のようにみえるが、この末端部に腹面を打面とした幅広剥片を剥離した石核である。

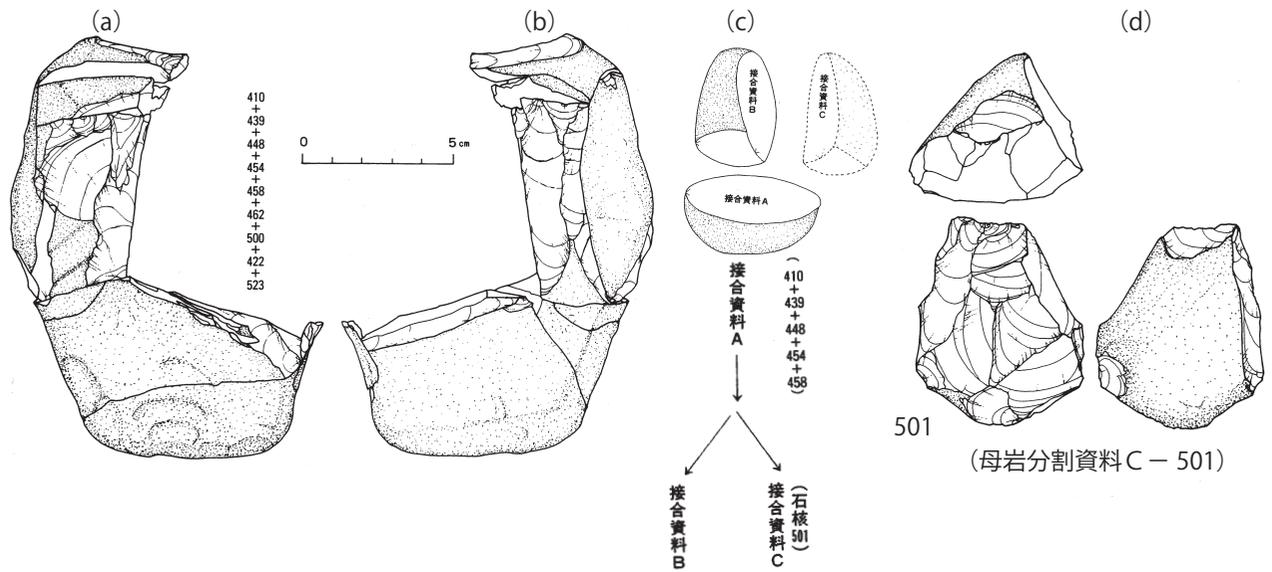
母岩分割資料 C (第 23 図 (d))

石核 501 は分割資料 A・B と同一母岩である。剥離が進行して二つの接合資料と接合しないが、同様に分割されたものであろう。501 (長さ 6.7cm、幅 5.55cm) は上位に平坦打面をもつ。そこから縦長剥片が連続して剥離されている。縦長の剥離面は側面にもみられる。裏面には自然面が残存する。

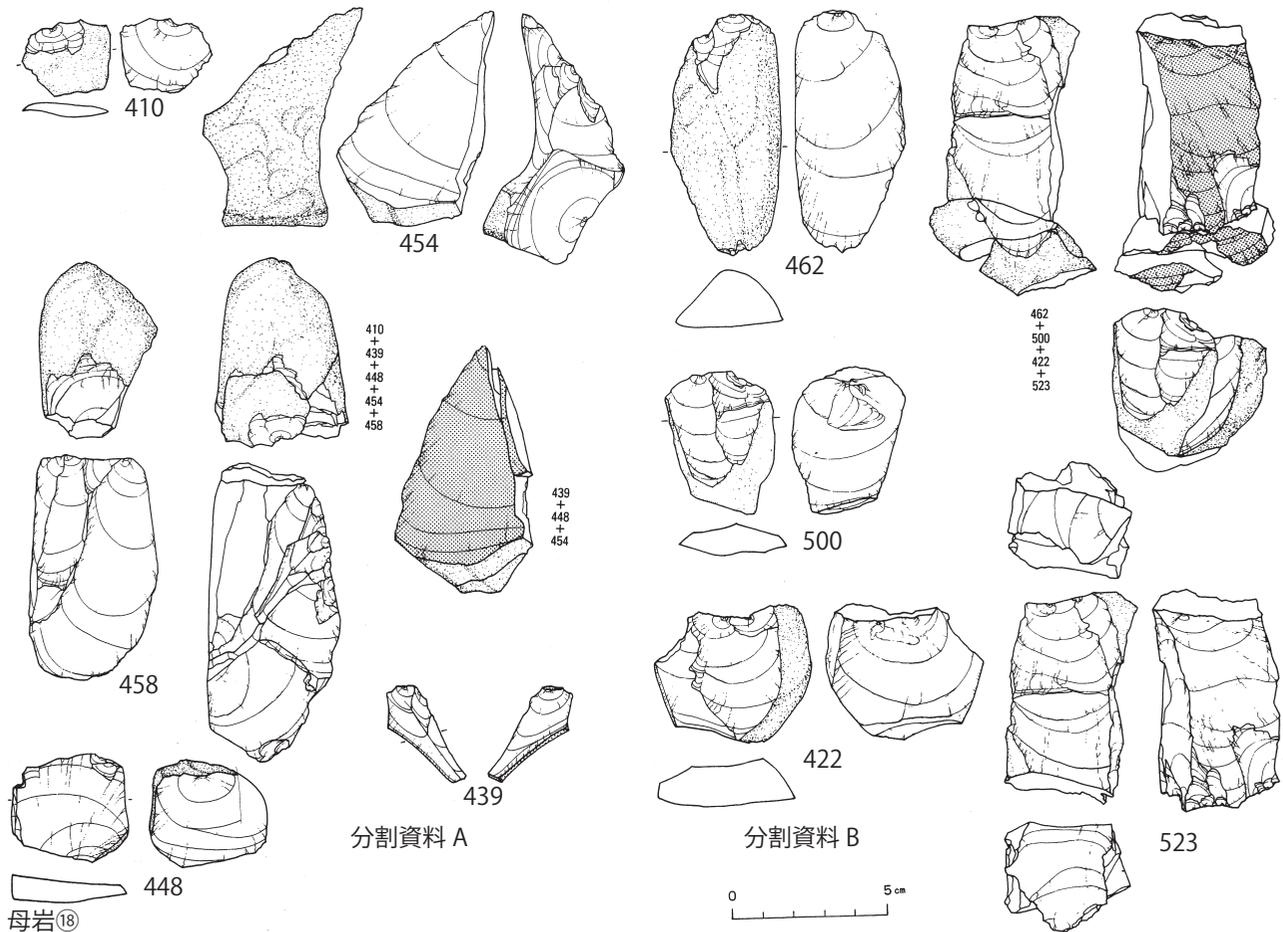
以上、母岩⑩は剥片生産技術第 I 類によって作出されたものと考えられる。

母岩⑨の接合資料 (第 25 図)

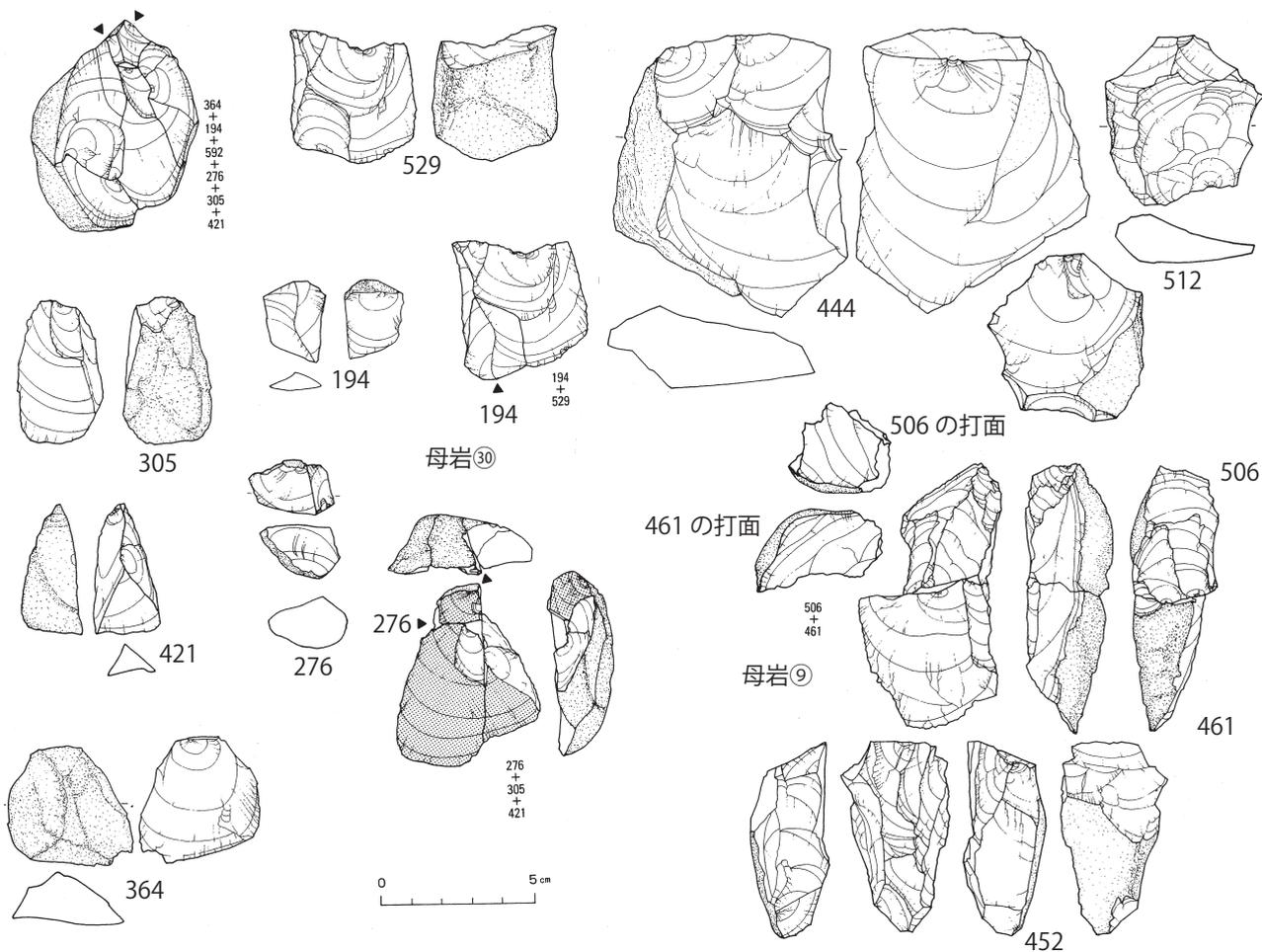
石核 506 と 461 はそれぞれの打面部が接合する。両石核の裏面は打面以外が全部自然面である。側面には分割時の初期段階の大きな剥離痕を残す。石核 506 (長さ 5.0cm、幅 3.6cm) は中央にネガティブな大きな剥離痕と右位側面に縦長ものがみられる。石核 452 (長さ 5.0cm、幅 4.9cm) は両



第 23 図 第 4 トレンチ第 6 層下部出土の石器類 (清川村教委 1986 より)



第 24 図 第 4 トレンチ第 6 層下部出土の石器類 (清川村教委 1986 より)



第25図 第4トレンチ第6層下部出土の石器類 (清川村教委 1986)

設打面の石核である。二つの打面は急峻である。裏面に自然面を残し、正面には縦長の連続剥離痕、側面に下位からの剥離痕が観察される。この他に石材の色調が黒漆色を呈する母岩⑨のスクレイパー 497 が発見されている。この母岩⑨と同一ものと考えられる。縦長剥片を素材としたスクレイパーである。

母岩⑨は剥片生産技術第Ⅰ類から作出されたものである。

母岩⑩の接合資料 (第25図左位)

拳大の小円礫を分割し、剥片を石核に転用して、さらに小さい剥片を作出するものである。作出される小形剥片はポジティブな剥離痕が付着している。

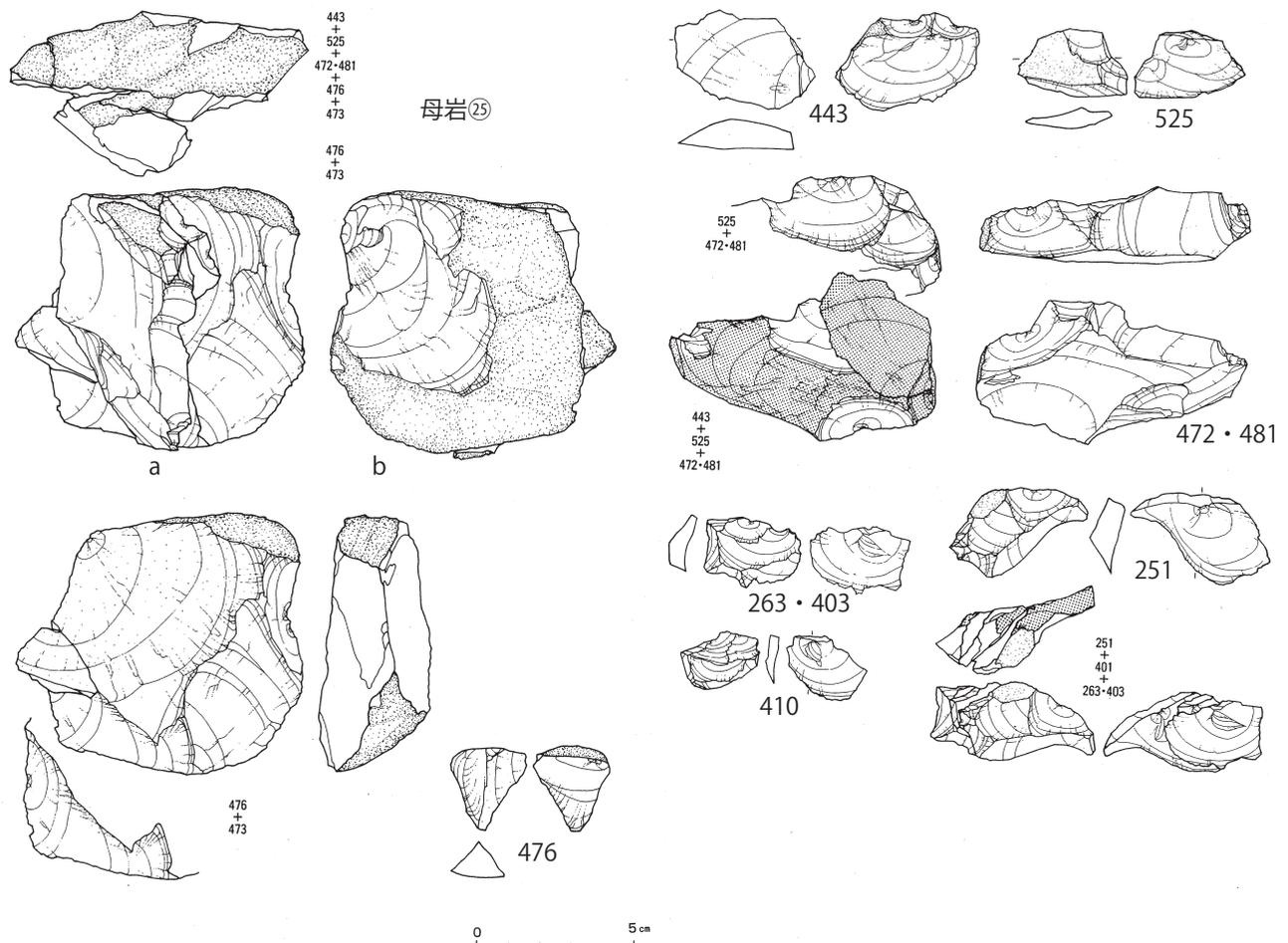
第25図-364 (長さ3.9cm、幅3.9cm) は厚みのある幅広剥片である。薄い平坦打面。背面は全部が自然面である。同図-194 (長さ2.5cm、幅1.9cm) は小形剥片。自然面打面。背面に分割の状況を示すポジとネガティブな面をもつ。同図-305 (長さ4.6cm、幅3.3cm) は小形縦長剥片を素材とした石核。上部に小さな縦長の剥離痕をもつ。同図-529 (長さ3.6cm、幅4.0cm) は石核で、この母岩の中でやや大きいものである。正面には分割したポジティブな面に上・下からのネガティブな剥離痕がみられる。それらは一枚の平坦

打面、自然面打面から剥離されている。裏面は自然面。同図-421 は剥片の末端に鋭利な縁辺を残し、ポジティブな稜上から二度の剥離がなされた石器である。加工途上の石器であろう。裏面に自然面を残す。この母岩では剥片の縁辺が鋭利となる、ポジティブな面を得るための剥離がなされたのであろう。母岩⑩は剥片生産技術第Ⅲ類に相当しよう。

母岩⑨の接合資料 (第26図左位)

第26図左位上部には母岩⑨の接合資料を示した。この接合資料には二つの剥離技術がみられる。第1段階は大形の剥片を作出していくもの。第2段階は第1段階で得られた大形剥片を石核に転用し、小形の剥片を作出していくものである。第26図-473 (長さ8.1cm、幅8.5cm) は大形の円盤形の石核である。正面は石核の周縁から中央に幅広剥片を剥離した痕跡がみられる。裏面は横位から剥離方向を示す大きな一枚のネガティブな面と自然面がみられる。折損した小形剥片 (476) も接合する。第1段階の大形剥片を作出していく石核 473 は剥片生産技術第Ⅲ類に相当しよう。

次に、第2段階の大形剥片を素材とする打面と作業面を交互に入れかえながら剥片 443、剥片 525 を剥離するもの



第26図 第4トレンチ第6層下部出土の石器類 (清川村教委 1986 より)

である(第26図右位)。剥片443(長さ3.2cm、幅4.2cm)の背面にはポジティブな剥離痕が全面に残されている。作出された剥片の形状は寸詰まりの横長の剥片である。剥片525(長さ2.3cm、幅3.4cm)は反対側の面に接合する小形横長剥片である。背面には自然面と周縁からの剥離痕がみられる。すべてネガティブな面である。

石核(472+481)は形状が横長を呈する(長さ4.4cm、幅7.9cm)。左位に素材時のポジティブな剥離面が残されている。この石核からは小形横長剥片が4枚程度剥離されている。

この他に、母岩②の剥片、石核類とは接合がしないが、同一の母岩と想定される剥片類が発見されている(第26図右下-251+401+(263+403))。

これらの横長剥片は、ポジティブな打面部をもつことから剥片素材の石核から剥離されたものであろう。第2段階の剥片剥離技術やポジティブな面をもつ剥片類は、剥片生産技術第II類によって作出されたものであろう。同図左位は剥片と石核が接合したものである。両面に自然面が認められるので、原礫はやや板状を呈する石核が用いられたのであろう。b面(裏)の一枚の剥離痕を除けば、剥離作業はa面(表)に限定されている。したがって、第1段階は、a面の平坦な部分を利用して石核の周縁から剥離作業がおこ

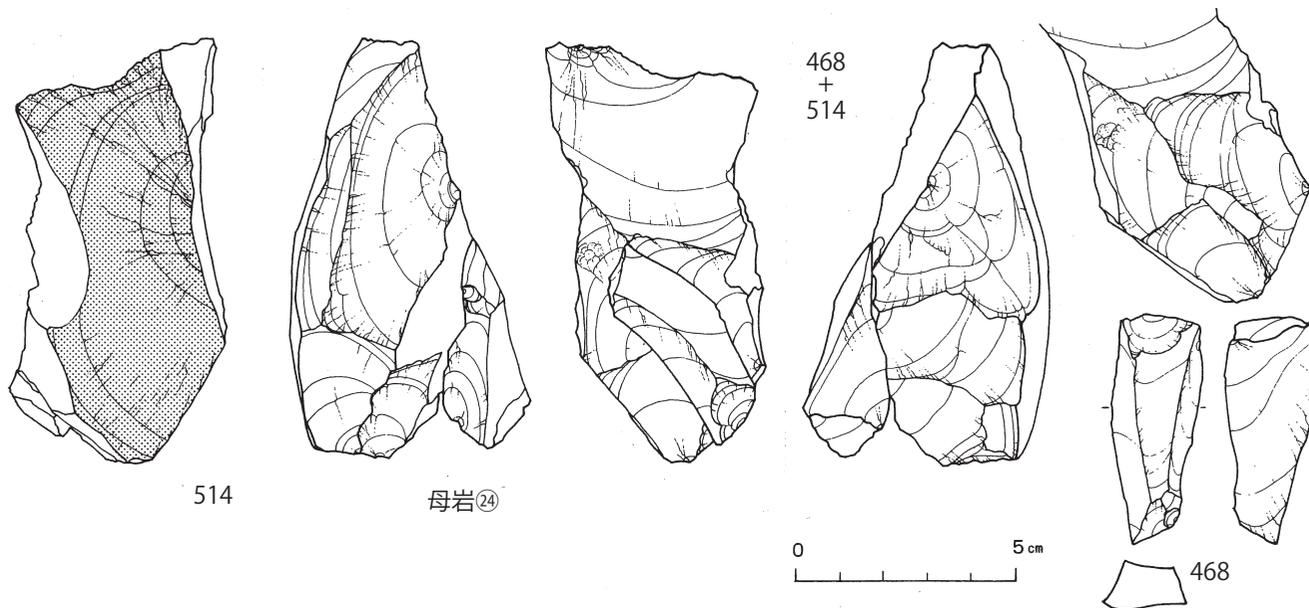
なわれたことになる。残された石核473の形状は円盤状を呈し、作出された剥片も部厚く幅広なものであったであろう。

母岩②の接合資料(第27図)

第3次調査では、母岩②に分類した翼状剥片石核に類似する石核が発見されている。母岩②はナイフ形石器486・520と同一母岩である。

第27図上位には石核514(長さ5.5cm、幅8.9cm)と縦長剥片468が接合した状況を示す。石核514は部厚い幅広い剥片を素材としたものである。大形剥片の打面部と末端部には横長の剥離痕が観察され、この剥離痕がポジティブな面を付着した横長剥片を作出したものと想定される。大形剥片の打面部側(a面)の剥離痕には、打点が連続して後退したような2枚の剥離痕が観察され、その作業面の正面観は「山形」を呈する。この「山形」を呈する形状の打面を打撃し、底面を有する翼状剥片が作出されたのであろう。

一方、大形剥片の末端側(b面)にみられる作業面の正面観は「山形」を呈しないが、打点が横方向に移動したような三枚の横長の剥離痕が観察できる。ここからも底面を有する横長剥片が作出されたのであろう。なお、接合した



第27図 第6層下部出土の石器類 (清川村教委 1986)

剥片468は、石核514が石核に転用される以前のものである。母岩②は剥片生産技術第Ⅳ類に相当しよう。

以上、第6層下部から出土した資料を母岩別分類、接合資料などから勘案すると、岩戸第Ⅰ文化層の分類基準にもとづいて整理すると以下になるよう。

第Ⅰ類・・・⑦ ⑨ ⑱

第Ⅱ類・・・⑳

第Ⅲ類・・・⑦ ⑳ ㉓

第Ⅳ類・・・㉑ ㉔

第6層下部から出土した剥片生産技術は、母岩別に見た場合、第Ⅰ類と第Ⅲ類が多く、次ぎに第Ⅳ類で、僅少なのは第Ⅱ類である。この比率は岩戸第Ⅰ文化層と同じである。

c) まとめ

第6層下部から出土した資料は総計139点であり、礫類を除くと石器類が118点出土したことになる。石器組成はナイフ形石器、三稜尖頭器、スクレイパーで構成されている。ナイフ形石器は、国府型ナイフ形石器が3点と切出し形を呈するナイフ形石器が1点発見されている。国府型ナイフ形石器は、いずれも一側縁をプランティングしており、その内2点が底面部まで及んでいる。他1点は背が鋸歯状を呈しており、その形状が近畿地方、瀬戸内海周辺の東部地域で発見されている国府型に酷似する。切出し形を呈するナイフ形石器は、素材には翼状剥片ではない横長の剥片が用いられている。打面部の他に、刃縁部にも浅い調整剥離が施されている。

第1次調査の第Ⅰ文化層では、瀬戸内技法が確認されたが、典型的な国府型ナイフ形石器は発見されなかった。岩戸遺跡では、今回の調査によって、はじめて国府型ナイフ形石器の存在が確認されたことになる。

三稜尖頭器は2点出土し、尖頭部を尖鋭に作り出すものと、そうでないものが発見された。スクレイパーは5点出

し、調整剥離が粗いものと、浅く細かいものがある。その大部分は縦長剥片の一側辺に刃部を作り出したものである。剥片生産技術は、第1次調査の第Ⅰ文化層と同様に、Ⅰ～Ⅳ類に分類できる。第Ⅰ類は、礫から直接に剥離されるか、あるいは礫を分割し、その分割面を打面として縦長の剥片を剥離する技術である。第6層の上部と下部では、同じ縦長剥片の作出でも、目的剥片を生産する前の素材の獲得方法が異なる。第6層上部ではあらかじめ剥片を準備するのに対して、下部では分割程度の技術しかもたない。第Ⅱ・Ⅳ類は大形剥片をブランクとして横長の剥片を生産する技術である。第Ⅱ類は作業面が打面と交互に入れ替り、目的剥片を剥離する技術である。この剥離技術は、かつて"不定形の横剥ぎ"と呼ばれた、香川県櫃石島の遺跡で発見された石核類などに類似するものである(間壁 1968)。第Ⅳ類は、国府型ナイフ形石器、翼状剥片石核の存在から、この剥離技術の存在が考えられる。しかし、この石核は作業面の反対側にも一枚の剥離痕がみられ、松藤氏が示すような近畿地方の典型的形態をしていない(松藤 1974)。第Ⅲ類はⅡ・Ⅳ類のブランクの作出に使用されている。残された石核の背面や接合資料から推定できる。

以上、第6層下部から出土した石器群は、第1次調査の岩戸第Ⅰ文化層の石器群とはナイフ形石器の形態上の相違がみられるが、剥片生産技術の共通性、三稜尖頭器の共件などから勘案すると時期的に近いものと考えられる。

3) 岩戸A T上層下部出土の石器群のまとめ

ここでは、岩戸遺跡で発掘されたA T上層下部出土の石器群を、第1～3次調査で発見された同一層準の岩戸第Ⅰ文化層、岩戸D文化層、岩戸第6層下部の石器群の調査成果を整理し、当該期石器群のまとめとする。

① 岩戸第Ⅰ文化層は始良Tn火山灰層直上に位置する石器群である。

② 石材はほとんどがスレートである。一部に黒曜石とチャートが使用されている。

③ 岩戸第Ⅰ文化層出土の石器群はナイフ形石器、三稜尖頭器、スクレイパーを主体とするが、僅少なながら彫刻刀形石器、錐形石器が含まれる。特に、縦長剥片を斜めに整形するようなナイフ形石器は九州各地のほとんどの遺跡で発見されており、この地域の共通した石器となっている。素材の大部分は縦長剥片であり、後出す石器群とはその獲得方法が異なる。次に、剥片尖頭器、三稜尖頭器は一部の遺跡で石器組成中に見られないところがあるが、この器種も九州地方の中での地域差を示すような出土状況を示すわけではない。剥片尖頭器は九州地方の全域にわたって発見されており、この時期の代表的な石器組成の一員である。

④ ナイフ形石器は種類が豊富である。岩戸第Ⅰ文化層には斜め整形の二側辺加工のナイフ形石器は出土しなかったが、岩戸Ⅱ文化層からはこの形態のナイフ形石器が検出された。斜め整形の二側辺加工のナイフ形石器は九州地方にはほぼ全域に分布する。特に、西北九州に検出例が多い。縦長剥片を素材とし、加工された二側辺の角度が狭く、形態的には縦長で細身のものと、角度がそれよりもやや広く、寸詰まりのものとの二種類が存在する。岩戸Ⅱ文化層での斜め整形の二側辺加工のナイフ形石器は後者の形態である。この形態は、ATの上位で出土し、九州地方では当該期の指標ともなっている。しかし、大野川流域の豊後大野市百枝遺跡では「黒色帯」中から発見されており（大分県 1986）、AT下位からもこの形態のナイフ形石器が出土することになる。東九州地方ではATを挟んで継続して石刃技法を基盤としたこの形態のナイフ形石器が組成する。他にナイフ形石器は、一側辺に調整したものや、切出し形を呈するようなものがみられる。

⑤ 岩戸第Ⅰ文化層では瀬戸内技法の存在を確認することができたが、そこには典型的な国府型ナイフ形石器が発見されなかった。しかし、第3次調査では国府型ナイフ形石器が同一層準の第6層下部で検出された。近年では国府型ナイフ形石器が九州全域に分布し、増加している。国府型は、瀬戸内技法によって作出された翼状剥片を素材とするため、形状が横長で、刃部に相当する部分にはポジティブな面がみとめられる。打面部を除去した一側辺加工の形態が多いが、刃部側に二次加工される形態もある。出土層準、石器組成から判断すると、その時期はATの上位、しかも直上に限定される。国府型ナイフ形石器、瀬戸内技法が発見される遺跡では、剥片尖頭器、斜め整形の二側辺加工のナイフ形石器、さらには三稜尖頭器や台形石器がそれぞれ相伴して検出されている。九州地方の場合、鎌木（鎌木 1960）、松藤が示した典型的な瀬戸内技法の模式図に示されたような石器類が瀬戸内海に面する地域で確認できる（松藤 1975）。

⑥ 尖頭器は三稜尖頭器（A）と周縁調整尖頭器がある（B）。前者は断面が三角形を呈し、調整された二面の稜からも二次加工が施される尖頭器である。三面加工、二面加工された尖頭器があり、筆者はそれらを三稜尖頭器と呼んだ。後者は断面形が台形状を呈し、周縁部を腹面側からのみ調整剥離している。調整剥離の角度が急峻であることから、ナイフ形石器の背部に類似する。両尖頭器は、角錐状石器（西川・杉野 1957）、舟底形石器（松藤 1980）等と呼ばれた石器類であり、調整技術に若干の相違がみられるものの、同じ機能を目的とした石器と考えられる。九州地

方ではATの上位の時期に盛行する。しかし、周縁調整尖頭器が百枝第Ⅲ文化層の石器群からも発見され、この形態だけはAT下位の時期に出現していたことになる。三稜尖頭器は東・中・南九州の全域で発掘され、資料が増加している。

⑦ 剥片尖頭器は岩戸第Ⅰ文化層では出土せず、岩戸第Ⅱ文化層から発見された。縦長剥片を素材とし、打面部に両側辺からノッチ状の調整剥離を施した基部をもつ石器である。素材となった剥片の形状をあまり変化させないことから、この名称が用いられた（清水 1973）。剥片の末端部、一側辺、二側辺などに急峻な調整剥離がおこなわれ、形態的なバリエーションがあるものの、基部（柄）を造り出すような共通した特徴がある。九州地方全域に多く分布し、関東地方や東北地方の一部の地域で僅かにみられる。近年、この石器は韓半島に広く分布することが明らかになってきており、当地域の関連が指摘されている。九州地方ではATの上位の時期に限られた時期に盛行する。

⑧ 台形石器は今回の調査で確認されなかった。このような相違をもたらす要因の一つには、岩戸遺跡が東九州に位置しているという、地理的な特色をあげることができる。すなわち、岩戸遺跡は九州地方に位置しながらも、瀬戸内海周辺地域からの文化的な影響を常に受けていたものと考えられる。岩戸遺跡の石器製作技術には、九州的な伝統と瀬戸内の伝統がみとめられるのであろう。台形石器が東九州地域で希薄であることからすれば、岩戸遺跡の石器組成に台形石器がみとめられないことも首肯できよう。

⑨ これらの石器類はⅠ～Ⅳ類までの剥片生産技術から製作された剥片が素材となっている。また僅少ではあるが、瀬戸内技法の存在も認められる。第Ⅰ類は、縦長剥片の作出を目的とした剥片生産技術で、いわゆる石刃技法に相当する。九州地方の石刃技法は、北信越・東北にみられる杉久保・東山系のものとは石刃の形状や調整技術に違いがみとめられる。この大きな違いは、打面部に対する調整や、石刃を剥離する作業面に稜を形成のための丁寧な調整等が頻りに看取できないことである（柳田・藤原 1981）。この結果、当地域の石刃技法は北信越・東北地方のそれと比べると石刃の長さが短いことが指摘できる。次に、第Ⅲ類は幅の広い横長の剥片が作出される剥片生産技術である。剥離作業が打角の大きさととの関係が進むので、作出される剥片は規格性に乏しく、形状が一定しない。九州で以前に“横剥ぎ”と呼ばれたものは、この第Ⅲ類から作出された剥片である。なお、第Ⅱ類は第Ⅲ類のバリエーションとも考えられる。当該期の剥片生産技術の主体はⅠ・Ⅱ・Ⅲ類であったと考えられる点、九州地方の剥片生産技術の地域的特色のなかにこれらが包括されると思われる。

3. 岩戸遺跡内における同第Ⅰ文化層に前後する時期の石器群

1) 先行する時期の石器群

岩戸遺跡では岩戸第Ⅰ文化層に先行する石器群として、第1次調査の岩戸第Ⅱ・Ⅲ文化層、第2次調査の岩戸E・F・G・H・I・J・Kの石器群、第3次調査の第8層の石器群である。これらの石器群は出土レベルからそこに何らかの時間的な幅の存在が予想される。岩戸第Ⅲ・岩戸Kの二石器群は低位段丘の形成直後に相当する時期、岩戸第Ⅱ・E・FはATの降下期の近い時期と考えられる。ここでは、岩戸

第Ⅰ文化層に先行する石器群として、岩戸A T下層最下部の石器群、岩戸A T下層下部の石器群、岩戸A T下層上部の石器群とに分類し、説明する。

a. 岩戸A T下層最下部の石器群

岩戸第Ⅲ文化層の石器群は、第1次調査の第9層中から出土した「黒色帯」以前の時期であり、低位段丘の形成直後の資料と考えられる。大野川上中流域では基盤に阿蘇4 (Aso-4) と呼ばれる溶結凝灰岩があり、その上位に九重第1軽石 (Kjp-1) が存在する。岩戸遺跡ではこの軽石がみられないことから、遺跡をのせる段丘は低位段丘に相当するという (町田 1980)。岩戸第Ⅲ文化層の石器群はこの時期より新しい年代を示すものと考えられる。石器群は、18点と量的に僅少であるが、当該期の剥片生産技術を検討するうえで貴重な資料である (第28図)。

ナイフ形石器 (H-14)

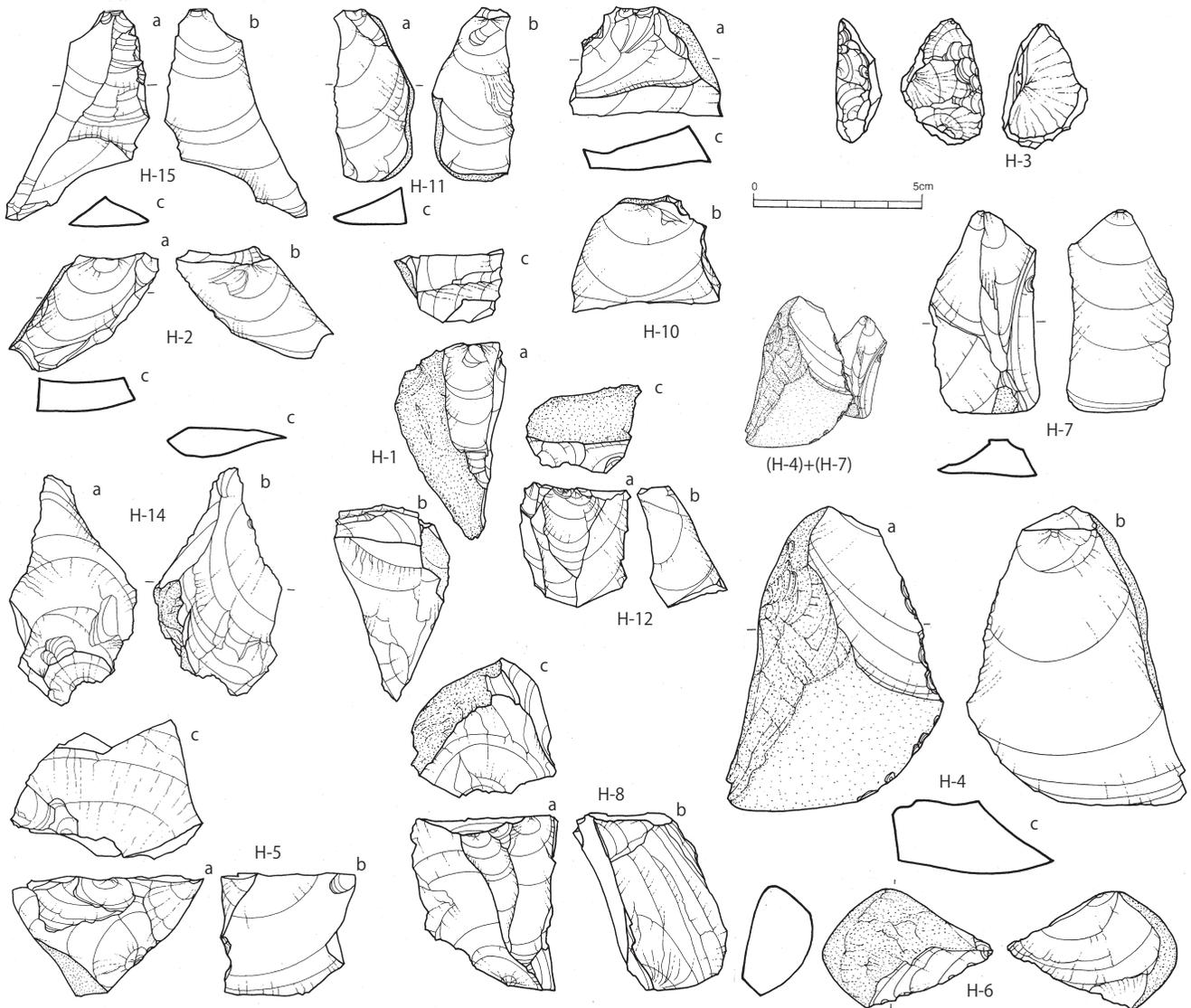
第28図-H-14は先細りの縦長剥片を素材としたナイフ形石器である。a面の打面側に、打面の一部を除去したような1枚の剥離痕が観察される。この剥離面が打面と腹面 (a面) のバルブ、バルバー・スカーの一部を除去した二次加工の剥離痕である。

同図-H-3は摩滅したチャートの剥片を素材としたスクレイパーである。打面と末端部に二次加工が見られる。

石核類 (H-1・5・8・12)

同図-H-1は剥片を素材とした石核である。a面には縦長剥片を剥離し、左側面に自然面を残す。末端は階段状剥離となっている。b面の腹面には打点を残さない。c面の三枚の縦長の剥離痕によって除去されたものと思われる。

同図-H-5は剥片、または分割礫を素材とした石核で



第28図 岩戸第Ⅲ文化層出土の石器 (芹沢編 1978 より)

ある。a面には小形幅広剥片をを剥離した痕跡がみられる。b・c面には大きなポジティブな剥離面が残る。

同図—H—12はその厚みから剥片を素材とした石核と予想される。a・b面には上位から剥離された縦長の剥離痕が4枚観察される。c面には打面となった2枚の剥離痕も残存する。裏面は自然面である。

同図—H—8は剥片、または分割礫を素材とした石核である。a面の右位には上位から剥離された先細りの縦長の剥離痕が2枚観察される。左位には下位から剥離されたポジティブな剥離面が残る。この面は素材時の分割面と考えられる。b面も分割面。c面には打面となった大きな1枚の剥離痕が観察される。裏面は自然面である。

剥片類 (H-2・4・6・7・10・11・15)

同図—(H-4)と(H-7)は初期段階の剥離の状況を示す剥片類の接合資料である。縦長剥片H-7の末端に、左位に大きな自然面をもつ縦長剥片H-4が接合する。

同図—H-7は点状打面をもつもので、背面には縦・横位からの打撃を示す剥離面と末端に自然面を残す。

同図H-4は末広がりの形状をもつ平坦打面の縦長剥片である。初期段階の剥片である。

同図H-15は小さい打面をもつ薄い断面の斜め長の剥片である。背面は上位からの打撃を示す剥離面で構成される。

同図—H-2は平坦な大きい打面をもつ斜め長の剥片である。背面は上位からの打撃を示す大きな剥離面、側面に自然面をもつ。

同図—H-11は平坦打面をもつもので、背面には1枚の上位からの打撃を示す大きな剥離面がみられる。側面に自然面を残す。

同図—H-10は自然面打面の幅広を呈する台形状剥片である。末端の剥離面にはポジティブな剥離面が残存することから、この剥片は剥片素材の石核から剥離されたのであろう。

同図—H-6は円礫を素材とした剥片である。

以上、岩戸第III文化層の石器群は次のようにまとめられる。

i) 石核にはポジティブな剥離面や節理面が看取されるので、目的とする剥片を作出する前に分割作業が行われている。または、剥片を素材とした石核が利用されている。

ii) 作出された剥片の形状は一定でなく、幅広や斜め長のものがある。

iii) 剥片生産技術の中には石刃技法が看取される。石刃技法は原礫を分割するか、あるいは剥片の一部を石核に転用している。打面調整や打面転位技術は無い。石刃の形状は斜め長でやや寸詰まりとなり、小形である。小形の石刃が多いのは分割段階で大きさを規制するという作業があったものと考えられる。これらを祖型石刃技法と呼称する。

iv) 斜め長の剥片を素材とし、打面の一部を除去するような基部加工のナイフ形石器が1点発見されている。

v) 石材はスレートである。

この他、第2次調査の同一層である岩戸Kから3点の石器が発見されている(第29図—17・18)。

b. 岩戸AT下層下部の石器群

岩戸遺跡では「黒色帯」下位から段丘礫層までの層序が、第1次調査では6枚(第5～10層)、第2次調査では7枚(第11～17層)に分層された。「黒色帯」下位層の色調は黄・

褐色を呈する。黒味を持たず、褐色が主体となる。さらに、段丘礫層に到達するまで、この間に色調が赤褐色を呈する極めて特徴的な一枚の無遺物層が存在する。この層は第1～3次調査で確認されており、鍵層として認識できる。第1次調査の第8層、第2次調査の第15層である。ここでは「黒色帯」下位から赤褐色土層の上位で発見された資料を「黒色帯」下位の石器群とし、一括して扱う。第1次調査では岩戸II(2点)、第2次調査では岩戸G(8点)、岩戸H(10点)岩戸I(12点)、岩戸J(2点)がそれぞれ発見されている。

第29図—1～6は岩戸Gの石器である。いずれも幅広の形状を呈する剥片である。打面幅が大きいものと(1・4・6)、小さい点状(2・5)のものがある。背面は多方向からの剥離痕が観察される。打面が固定されない剥離作業によって得られた剥片類と推定される。

同図—7～9は岩戸Hの石器である。形状が横長(8)・斜め長(9)を呈する剥片である。

7については二次加工した剥離痕の打点が存在しないので不明である。

同図—10～14は岩戸Iの石器である。10は横長剥片である。打面全体が厚く、一枚の自然面となっている。背面は一枚の腹面と同一方向を示す剥離痕が見られる。11は横長剥片を素材とした基部加工のナイフ形石器である。横長剥片を縦に置き、素材の末端部に背腹両面から調整剥離を施している。12は縦長剥片を素材とした基部加工のナイフ形石器である。背面は全て腹面と同一の剥離痕が並ぶ。13は幅広剥片の背面側に自然面打面から細かな調整加工が施された石器と推定される。ただし、この加工が素材剥離以前の可能性が強く、スクレイパーとして認識できるかどうかは不明である。14は幅広剥片である。打面全体が一枚の自然面となっている。背面は一枚の腹面とは異なる方向を示す剥離痕が見られる。末端辺に細かな剥離痕が観察される。

同図—15・16は岩戸Jの石器である。15は分厚い幅広剥片の末端に凹んだ形状の刃部を持つ石器である。ノッチといえる。16は縦長剥片を素材としたスクレイパーである。一側辺に細かな剥離痕が見られる。一部は鋸歯縁を呈する。

以上、「黒色帯」下位の石器群については、第2次調査の資料(岩戸—G・H・I・J)を中心に紹介したが、そこに「縦長剥片」を連続剥離した技術が見えず、横長・幅広を呈する剥片が多く剥離されている様相が窺える。剥片の一部分に基部加工したナイフ形石器、ノッチ、不定形のスクレイパーが僅かに存在する。素材剥片の形状も一定していない。

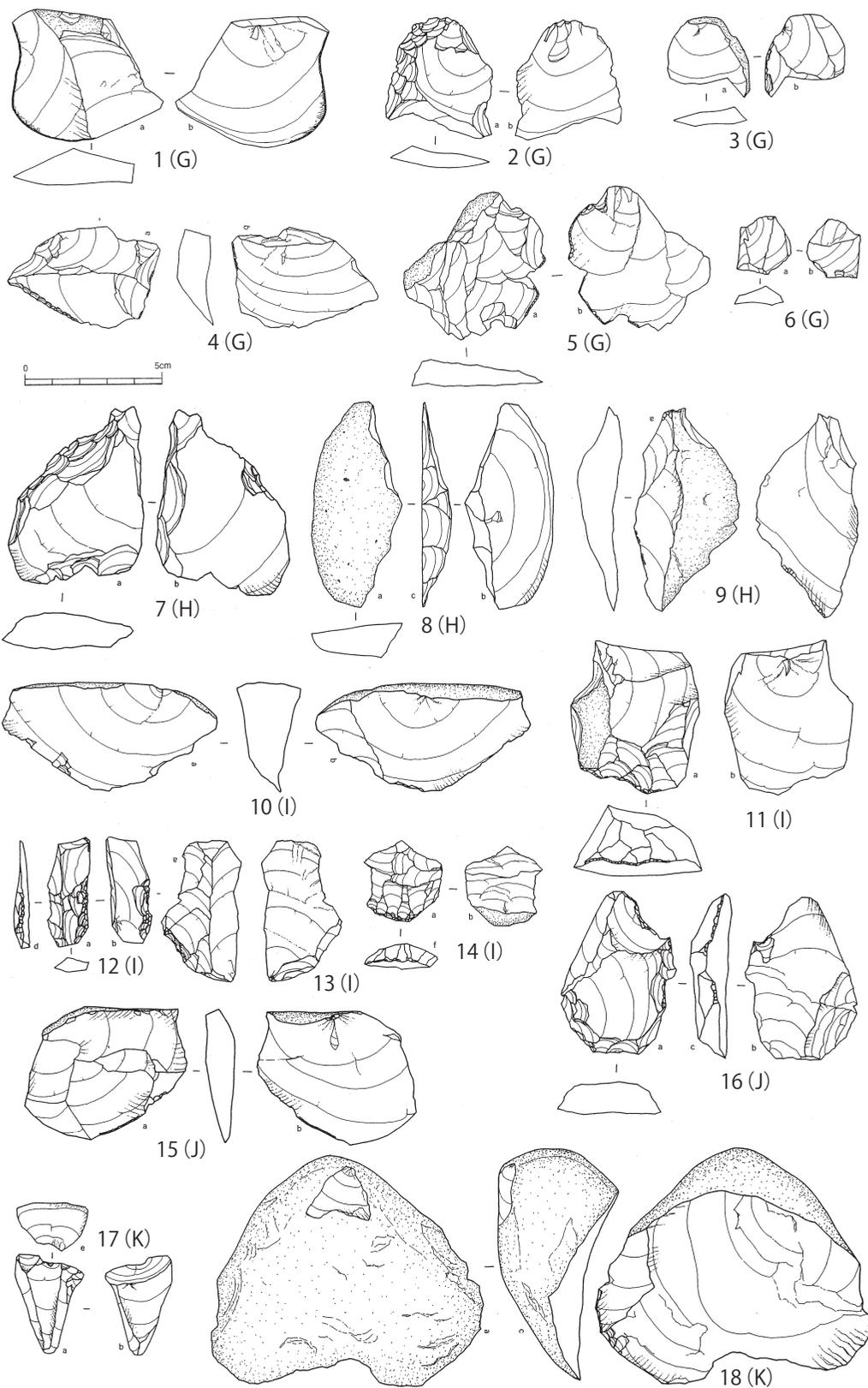
c. 岩戸AT下層上部の石器群

第3次調査の際、第4トレンチで「黒色帯」を確認した。「黒色帯」は黄味をおびた層(第9層)を挟み、上下二枚に細分できた。上位の第8層は色調が褐色を呈する粘土層で、下位の第10層よりも厚く、黒味が薄い。第2次調査では1点(岩戸E)、第3次調査では2点(岩戸8層)が出土した。下位の第10層は色調が暗褐色を呈する粘土層で、上位の第8層よりも薄く、黒味が強い。第2次調査では13点(岩戸F)が出土した。

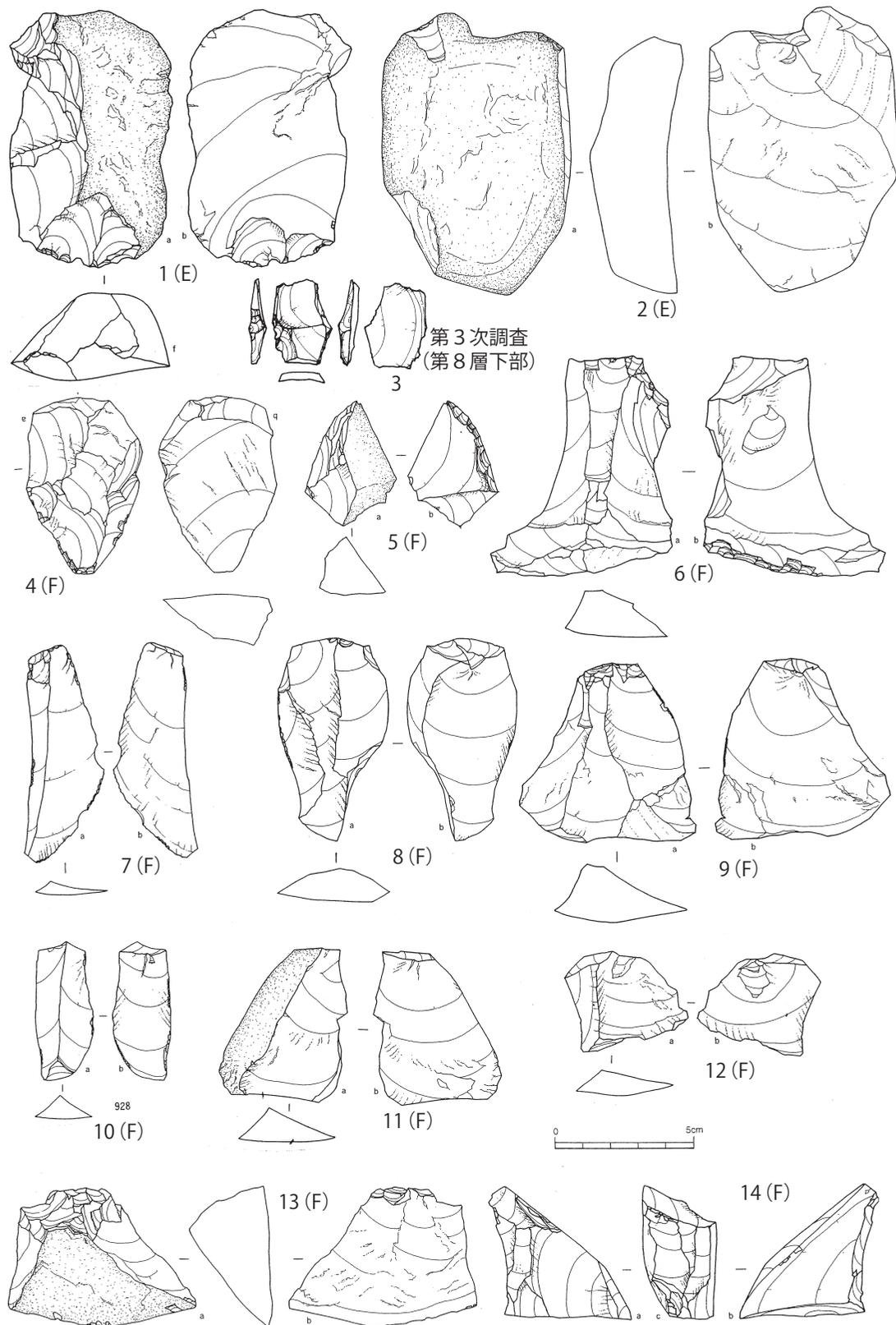
—「黒色帯」上部の石器群—

第30図—1は分厚い縦長剥片で打面とバルヴ付近に剥離痕が見られる。初期段階に放棄された剥片素材の石核。

同図—2は分厚い縦長剥片である。背面側全体に自然面



第29図 岩戸AT下層下部出土の石器 (第2次調査) (坂田1980より)



第30図 岩戸AT下層上部「黒色帯」出土の石器(第2次調査)(坂田1980より)

を残す。初期段階に剥離された剥片である。1・2は第2次調査で出土した石器。

同図-3は第3次調査で出土したナイフ形石器である。横長剥片を素材とし、打面部とその反対縁に調整剥離を施した石器で、下端部は折れ面となっている。調整剥離が浅い。ナイフ形石器よりも台形様石器としての把握が可能かもしれない(佐藤 1988)。チャートを使用している。

－「黒色帯」下部の石器群－

同図-4は幅広い縦長剥片を素材とし、打面側を除去したナイフ形石器である。

同図-5は打点の位置が不明であるが、剥片の腹面側末端に浅い調整剥離が施されたスクレイパーである。

図-6は末端が大きい縦長剥片である。末端はウートラパッセになっている。打面は一枚の大きな剥離痕がみられるが、背面側の打面付近には頭部調整のような細かな剥離痕が観察される。背面は全て腹面と同一の剥離痕が並ぶ。

同図-7は両側辺が平行する縦長剥片である。ただし、打面縁を水平にした場合「ノ」字形を呈し、末端が大きくなる。背面の二枚の剥離痕は腹面と同一である。打面は一枚の剥離痕が観察される。打面付近に細かな剥離痕が見られ、打面側を基部としたナイフ形石器の可能性もある。

同図-8は打面部からバルブ付近にかけて分厚い縦長剥片である。側面に厚みが残る。打面は一枚の剥離痕であろう。背面は全て腹面と同一の剥離痕が並ぶ。

同図-9は末端が大きい縦長剥片である。打面は横位からの二枚の剥離痕がみられ、背面側の打面付近にも頭部調整のような細かな剥離痕が観察される。背面は全て腹面と同一の剥離痕が並ぶ。

同図-10は両側辺が平行する縦長剥片である。打面は一枚の剥離痕がみられる。背面は二枚とも腹面と同一の剥離痕が並ぶ。末端の剥離痕は潜在的な剥離痕である。

同図-11は末広がりの縦長剥片である。背面は左側辺に自然面、一枚の剥離面は腹面と同一の剥離痕である。打面は一枚の剥離痕がみられる。

同図-12は幅広の剥片である。打面には小さな一枚の剥離痕が観察される。背面は縦、横位からの剥離痕がみられる。

同図-13は末広がりの幅広剥片である。背面は下辺から中央部にかけて自然面が残存し、両側辺に腹面と同一方向の剥離痕が並ぶ。打面は小さな一枚の剥離痕が観察される。

同図-14は剥片を素材とし、その末端部に剥離した石核である。C面に上位から施された三枚の縦長の剥離痕が並ぶ。

以上、ここでは、資料が僅少なため、「黒色帯」中の石器群を岩戸A T下層上部の石器群として一括し、まとめておきたい。

i) 第2次調査の資料(岩戸F)の13点中、11点を紹介したが、そこには「縦長剥片」を連続剥離した剥片生産技術の存在が指摘できる。

ii) 作出された剥片の形状は断面が厚く、打面幅、末端の幅が大きくなる傾向がみられる。中には両側辺が整った縦長剥片類が一部に看取できる。しかし、薄く、長い「石刃」のような形状を呈するものはない。

iii) 打面調整や打面転位技術は無く、調整技術を持たない。

iv) 分厚い縦長剥片を素材として、打面部を除去するような基部加工のナイフ形石器が存在する。また、横長剥片を素材とし、打面部とその反対縁に調整剥離を施した台形様石器も発見されている。この他に、剥片の一側辺に二次加工したスクレイパーも発見されている。

v) これらの石器に対する調整剥離は浅い。

vi) 石材はスレート、ホルンフェルスと称されるものである。

2) 後出する時期の石器群

－岩戸A T上層上部の石器群－

岩戸遺跡で第1文化層の石器群の上位で層的に発見された石器群は、第2次調査の岩戸A・B・C文化層、第3次調査の岩戸第6層上部の石器群である。第2次調査では岩戸A文化層が細石刃文化とされ、出土量が僅少である。また、岩戸C文化層もその様相が不明であり、一つの文化層として確認できるかどうか判然としない。その資料は岩戸B文化層や岩戸D文化層のどちらかに帰属する可能性もある。ここでは岩戸遺跡第1文化層の石器群に後出する時期として、岩戸第6層上部、岩戸B文化層の各石器群をその分析対象としてあげる。第3次調査の第4トレンチで確認された315点、同第1トレンチの57点の石器類、第2次調査の岩戸B文化層の543点の資料について検討し、これらを岩戸A T上層上部の石器群と称する。

a - 1. 岩戸第6層上部 第4トレンチの石器群

第3次調査の岩戸第6層上部の石器群については須田良平氏が詳細にまとめているので(須田 1986)、それを参考に筆者の考えを述べたい。岩戸第6層上部の石器群は第1・2・4トレンチの3か所で確認されている。

第4トレンチ-第6層上部の石器群

ナイフ形石器	12点
スクレイパー	8点
チョッピング・ツール	1点
石核	24点
剥片	215点
碎片	54点
台石	1点
礫類	84点

合計 399点

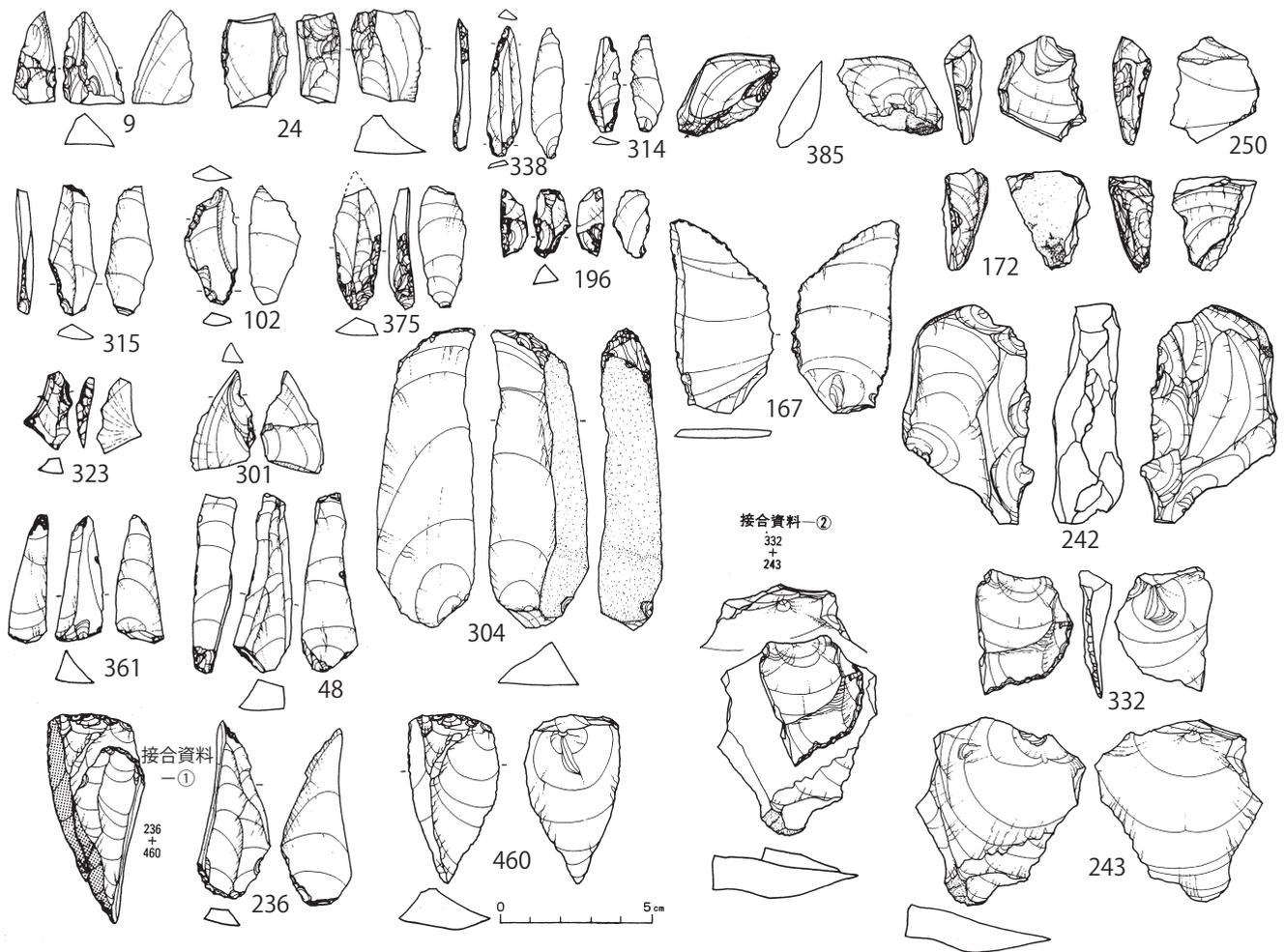
石材は大野川の川床にあるスレートが主として用いられ、他に安山岩、黒曜石が僅かに用いられている。

〈石器組成〉

第4トレンチの第6層上部で発見されたものは、礫類を含め399点であるが、石器類は315点である。この石器群の石器組成はナイフ形石器とスクレイパーである。剥片類の中には、縁辺部に微細な剥離痕が観察されるものも多くみられる。

ナイフ形石器：12点が発見されている。

B類：二側縁に調整剥離がなされ、刃部が斜めになるものが2点(第31図-196,323)。



第31図 第4トレンチ第6層上部出土の石器類

D類：先端と基部に調整剥離がなされるものが8点（第31図—338,314,315,375,48,236,102,301）。須田氏は、D類について、先端の調整剥離が急峻なものをD1類、浅いものをD2類とに細分した。その内訳はD1類が6点、D2類が2点である。D1類が第6層上部から発見されたナイフ形石器の中で最も多い。

E1類：先端のみに調整剥離がなされるものであるが、その形状が「断ち切る」ような調整剥離をおこなうものが2点（第31図—361,304）。

ナイフ形石器9と24は原位置を遊離した国府型ナイフ形石器である。おそらく、第6層下部から浮き上がった資料と考えられる。この2点はナイフ形石器の総数から除外する。

ナイフ形石器328は小形で細身の縦長剥片を素材とする。打面側を基部とした二側辺と、先端部の一側辺に二次加工する形態である。先端部が僅かに尖る。素材の打面が僅かに残存する。

ナイフ形石器314は極小形縦長剥片を素材とし、打面側を基部とした二側辺と、先端部の一側辺に二次加工する形態である。素材の打面が僅かに残存する。小形で極めて薄い。

ナイフ形石器315は小形縦長剥片を素材とする。打面側を基部とし、その一側辺がやや内湾するように二次加工する。打面側が折損している。先端部も僅かに二次加工する。

ナイフ形石器338とナイフ形石器314は小形縦長剥片を素材とする。打面側を基部とした二側辺と、先端部の一側辺に二次加工をする形態である。先端部は傾斜するように長い二次加工がみられる。素材の打面が残存しない。先端部が僅かに尖る。打面側の二側辺の基部と末端に二次加工する形態である。

ナイフ形石器375は小形縦長の剥片を素材とし、打面側の二側辺の基部に二次加工する形態であるが、末端部は破損している。素材の打面が僅かに残存する。

ナイフ形石器196は極小形の剥片を素材とし、基部を二側辺加工してその先端に二次加工する形態である。極めて小形である。

ナイフ形石器323は小形横長剥片を素材とし、末端側に急角度の二次加工がある。全体の形状が不明である。

ナイフ形石器301は横長の剥片を素材とし、打面側に二次加工する形態である。

ナイフ形石器361は小形縦長剥片を素材とする。ポジ面

を有する背面の先端部に二次加工する。素材の打面が残存し、微細な剥離痕がみられる。

ナイフ形石器 48 は細身の縦長剥片を素材とする。ポジ面を有する背面の打面側に急角度の二次加工がみられる。素材の打面が僅かに残存する。縁辺部に微細剥離痕が観察される。

ナイフ形石器 304 は大形縦長の剥片を素材とする。末端部に両側から急角度の二次加工がみられる。側面には自然面を残す。素材の打面が残存する。

ナイフ形石器 236 は縦長剥片を素材とし、打面側の二側辺基部と末端に二次加工する形態。基部を円く整形し、打面を取り除いている。接合資料① (236 + 460) から打面側の除去の様子が窺える。

剥片 460 は打面側に最大幅のある縦長剥片である。ナイフ形石器 236 と接合する。

以上、小形で、縦長剥片の基部と先端部に調整加工するナイフ形石器が最も多く、この形態が第 6 層上部の特徴である。

スクレイパー：剥片の縁辺部に浅く、薄く調整加工した石器をスクレイパーとする。8 点発見された。

スクレイパー 385 は幅広剥片の側辺の一部に腹面から二次加工した石器。

スクレイパー 250 は幅広剥片の両側辺に腹面から二次加工した石器。末端部は折損している。

スクレイパー 172 は幅広剥片の側辺の一部に腹面から二次加工した石器。刃部はノッチように内彎する。

スクレイパー 167 は縦長剥片の全縁辺に微細な剥離痕が観察される。これらは、使用によるものか、二次加工したものかを確認できないが、刃部角度や剥離痕の深さから勘案してスクレイパーとした。

スクレイパー 382 は幅広剥片の側辺部に腹面から二次加工した石器。急角度の細い剥離痕が観察される。片側は折損している。

スクレイパー 243 は打面側に最大幅がある幅広剥片である。スクレイパー 332 と接合する。接合資料②からは 332 の二次加工と折損状況が窺える。332 の折損は切断による加工とも推定できる。

チョッパー：本来は礫を素材とするものをチョッパーと定義するが、ここでは比較的厚手の剥片を素材としたものもチョッパーとした。チョッパー 242 は厚手の剥片を素材とした石器である。側辺に自然面を残す厚みのある剥片の末端にジグザグな刃部が作られている。粗い二次加工である。

〈剥片生産技術〉

二種類の剥片生産技術が存在する。一つはナイフ形石器の素材となった縦長剥片類を剥離する技術である (a 類)。いま一つは a 類の剥片生産技術に供給するための素材剥片を作出した技術である (b 類)。

剥片生産技術 a 類：第 32 図は第 6 層上部で発見された (第 1・4 トレンチ出土) ナイフ形石器の長幅相関分布図である。ナイフ形石器 D 1, D 2 類は 8 点みられ、長幅比が 2 : 1 ~ 3 : 1 範囲に収まる縦長剥片類を素材とする。また、長さが 3 ~ 10cm、幅が 1 ~ 4 cm の大きさを呈する。この他に、ナイフ形石器の素材となった縦長剥片類は以下のような特徴が

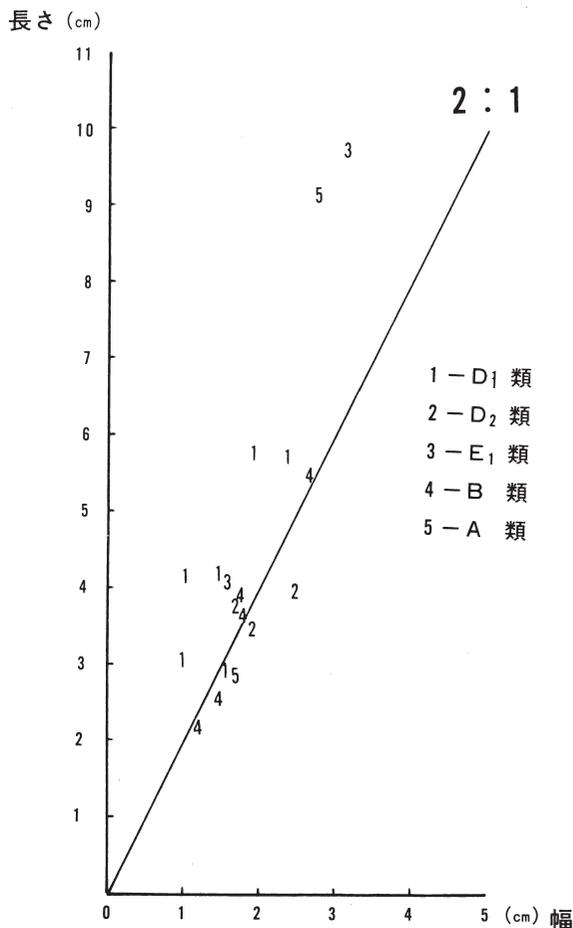
指摘できる。

i) 剥片の背面にはポジティブな (スクリーンの部分) 剥離痕が残されている例が多い。

ii) 剥片形状は縦長で先細りのものが多い。

iii) 背面の剥離方向は腹面と同一か、相対するものが多い。

iv) 平坦打面が多い。



第 32 図 ナイフ形石器長幅相関分布図 (清川村教委 1986 より)

次に、i ~ iv の特徴をもつ縦長剥片と石核について検討する。

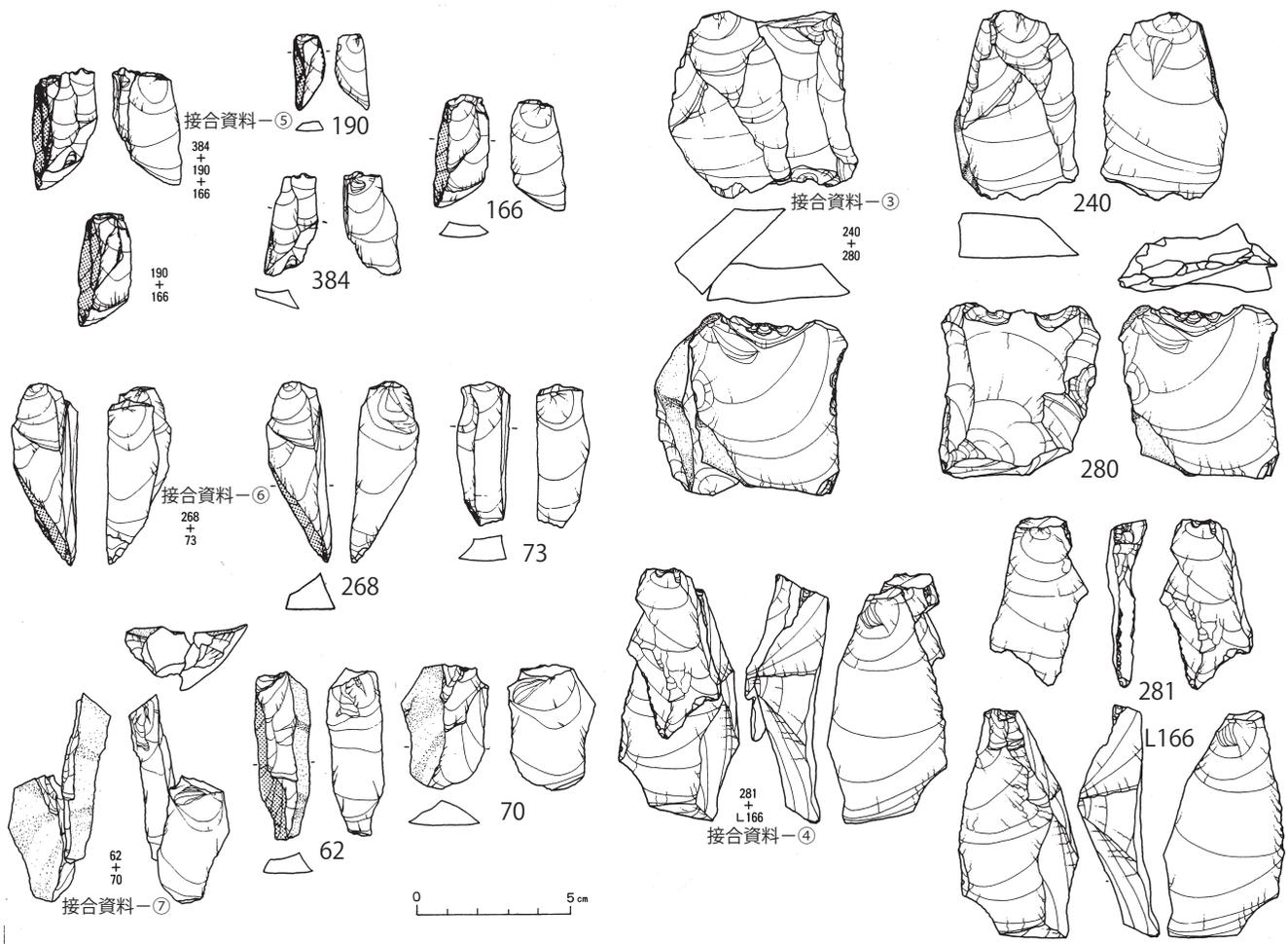
剥片類

接合資料一⑤ (第 33 図)

剥片 384 + 剥片 190 + 剥片 166 は、背面側の左側辺に素材剥片のポジティブな面 (スクリーンの部分) を残す。また、背面側には腹面側と同一方向を示す剥離痕がみられる。作出された剥片類は末端が先細りとなっている。

接合資料一⑥ (第 33 図)

剥片 268 + 剥片 73 は、背面側の左側辺に素材剥片のポジティブな面 (スクリーンの部分) を残す。また、右側辺には素材剥片の大きなネガティブな面を残す。さらに、背面側は腹面側と同一方向を示す剥離痕がみられる。接合資料から剥片の腹面と背面が作り出す稜を巧みに利用して縦長剥片を剥離した様子が窺える。



第33図 第4トレンチ第6層上部出土の石器 (清川村教委 1986より)

接合資料-⑦ (第33図)

剥片62+剥片70は、素材剥片のポジティブな面(スクリーンの部分)と自然面によって形成された稜を取り込むように縦長剥片を剥離した初期段階の接合資料である。打面は大きな平坦打面である。剥片62は背面側に素材剥片のポジティブな面(スクリーンの部分)と自然面を残す。剥片70は形状が寸詰まりの縦長剥片である。背面側に自然面を残す。

接合資料以外の剥片類- (第35図)

- ・背面側に素材剥片のポジティブな面(スクリーンの部分)と自然面を残す縦長剥片類。

剥片 137,68,88,138,347,391,14,147 + 437,205,100,46,171,235,237,372

- ・背面側に素材剥片のポジティブな面を有しない縦長剥片類。剥離の進行した剥片類と推定される。

剥片 51,337,349,75,8,317,121,169,326

須田氏は岩戸第6層上部出土の石器群の剥片類について、①~⑤類に分類し、その長幅比を調べた。

- ①類：背面の剥離方向が腹面と同一のもの。さらに、背

面の縦長剥片の末端形状を先細りでないもの(①-a類)と、先細りのものと(①-b類)に細分した。

- ②類：腹面と逆のものを含むもの。

- ③類：腹面と横位の方向を示すもの。

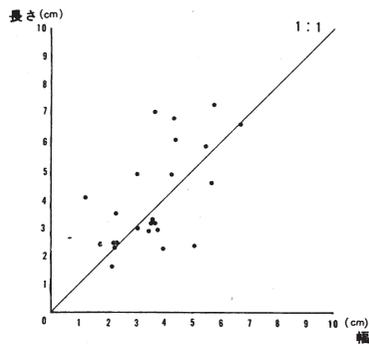
- ④類：背面にポジティブな面を有し、その面が横位の方向を示すもの。

- ⑤類：打面再生剥片

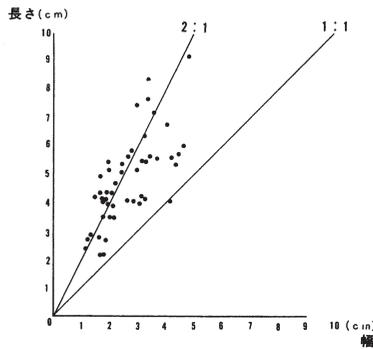
特に、①類剥片の末端形状についてその量的関係を調べたところ、①-a類は73点中24点で33%、①-b類が73点中49点で67%となった。剥片の末端形状が先細りとなるものが多い。また、①-b類は背面側に素材剥片のポジティブな面を有するものが51%を占めることも明らかとなった。

第34図には、剥片①~⑤類の長幅比を示した。先細りとなる①-b類の剥片の長さが6~8cm、5~6cm、4cm等である。さらに、同図に①-b類剥片の素材面(A)、ポジティブな面の剥離方向(B)、打面の状態(C)・(D)の観察した結果を表示しておく。

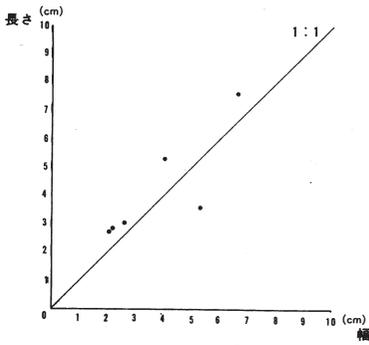
次に、打面再生剥片を取り上げる。第35図の剥片372,2,383,340は打面再生剥片である。背面側に細かな剥離痕は見られなく、比較的大きな剥離痕が残存する。一点の



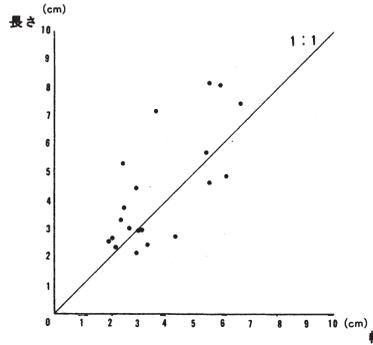
①-a類剥片



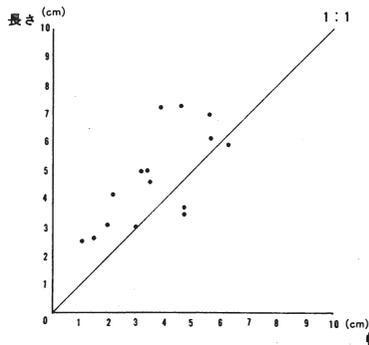
①-b類剥片



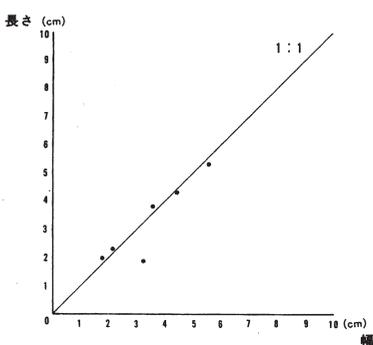
②類剥片



③類剥片

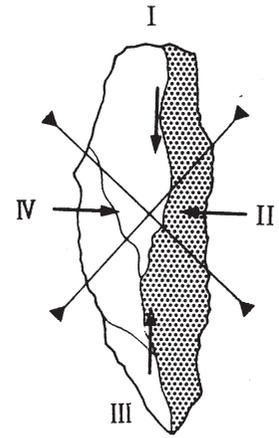


④類剥片



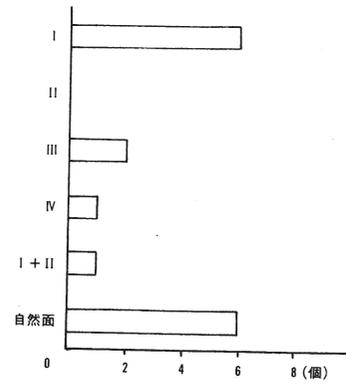
⑤類剥片

各類剥片長幅相関分布図

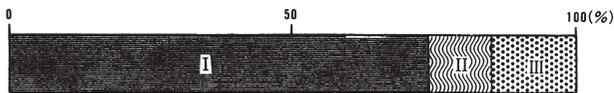


剥片の背面におけるポジティブ面の剥離方向模式図

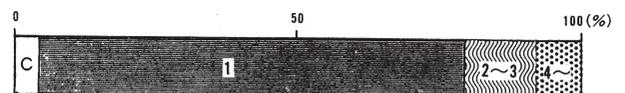
※スクリーンの部分はポジ面である。



第29図 ①-b類剥片の素材面

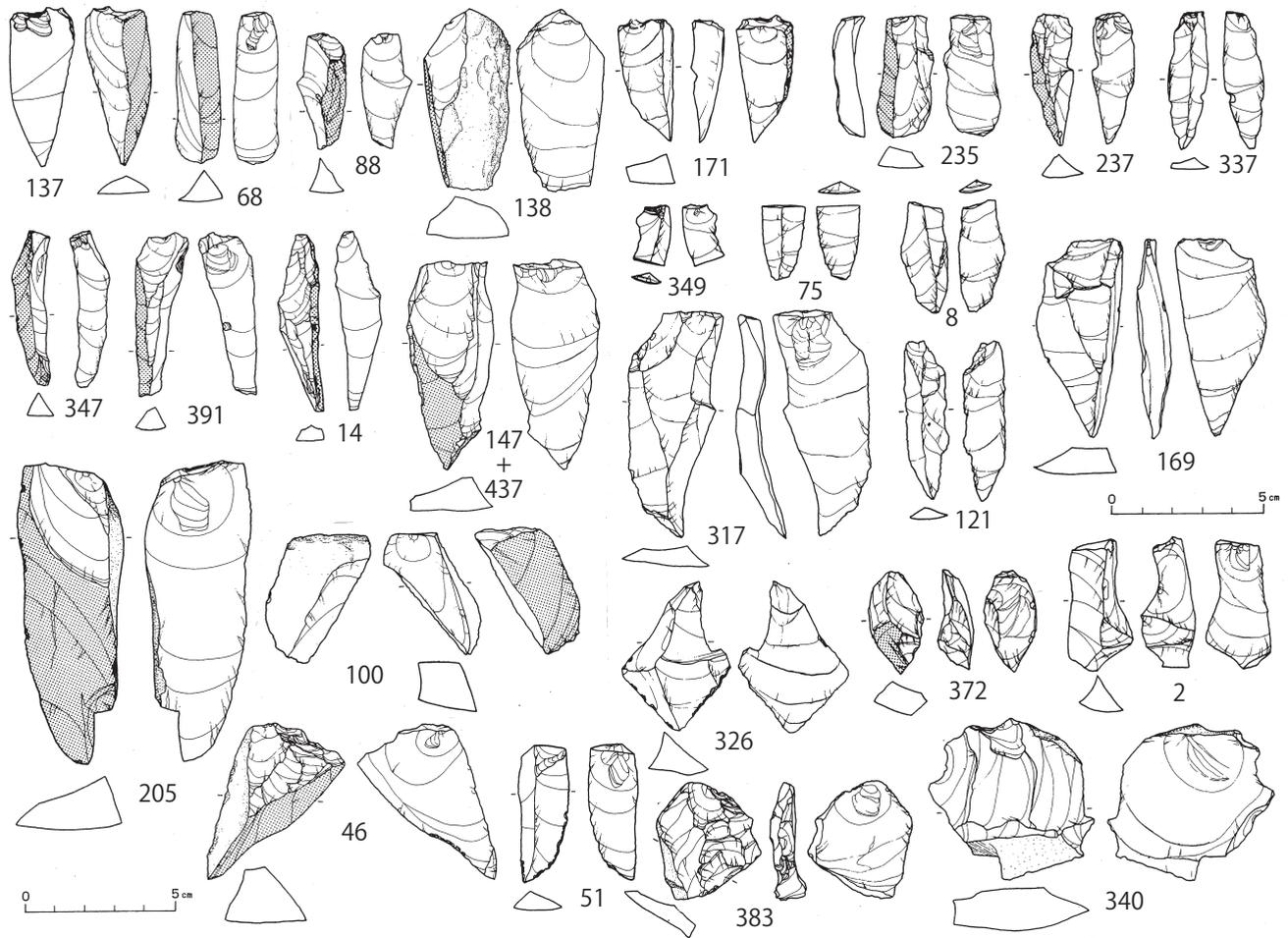


①-b類剥片のポジティブ面の剥離方向



①-b類剥片の打面の状態

第34図 剥片の長幅比と①-b類剥片の特徴 (清川村教委 1986より)



第35図 第4トレンチ第6層上部出土の石器（清川村教委 1986より）

剥離ごとに調整がおこなわれたものではなく、打角の補正のための打面再生剥片と考えられる。

石核類

接合資料⑨（第38図）

石核120（長さ4.7cm、幅3.0cm）+剥片79は、素材剥片のポジティブな面（スクリーンの部分）を有する石核とポジティブな面を有しない剥片との石核が接合するものである。接合する部分は自然面を有するところである。形状は先細りを呈する縦長剥片である。本来の目的とする形状は剥片79ののようなものではなかろうか。

接合資料⑩（第36図）

石核129（長さ6.1cm、幅3.9cm）+剥片L178は、素材剥片のポジティブな面（スクリーンの部分）を有する部分で、剥片と石核が接合するものである。剥片はやや幅広であるが、先細りの形状を呈する。石核はポジティブな面と自然面が両側に見られ、それを挟み込むように剥離が進行する。

接合資料⑫（第36図）

石核288（長さ4.3cm、幅4.0cm）+剥片5層は、打面再

生剥片と石核が接合するものである。剥片は自然面を有し、幅広である。石核は大きなポジティブ、ネガティブな面を残す。正面の最終剥離面は先細りの縦長剥片を作出している。

接合資料以外の石核類—（第37図）

素材剥片のポジティブな面（スクリーンの部分）を残すものである。

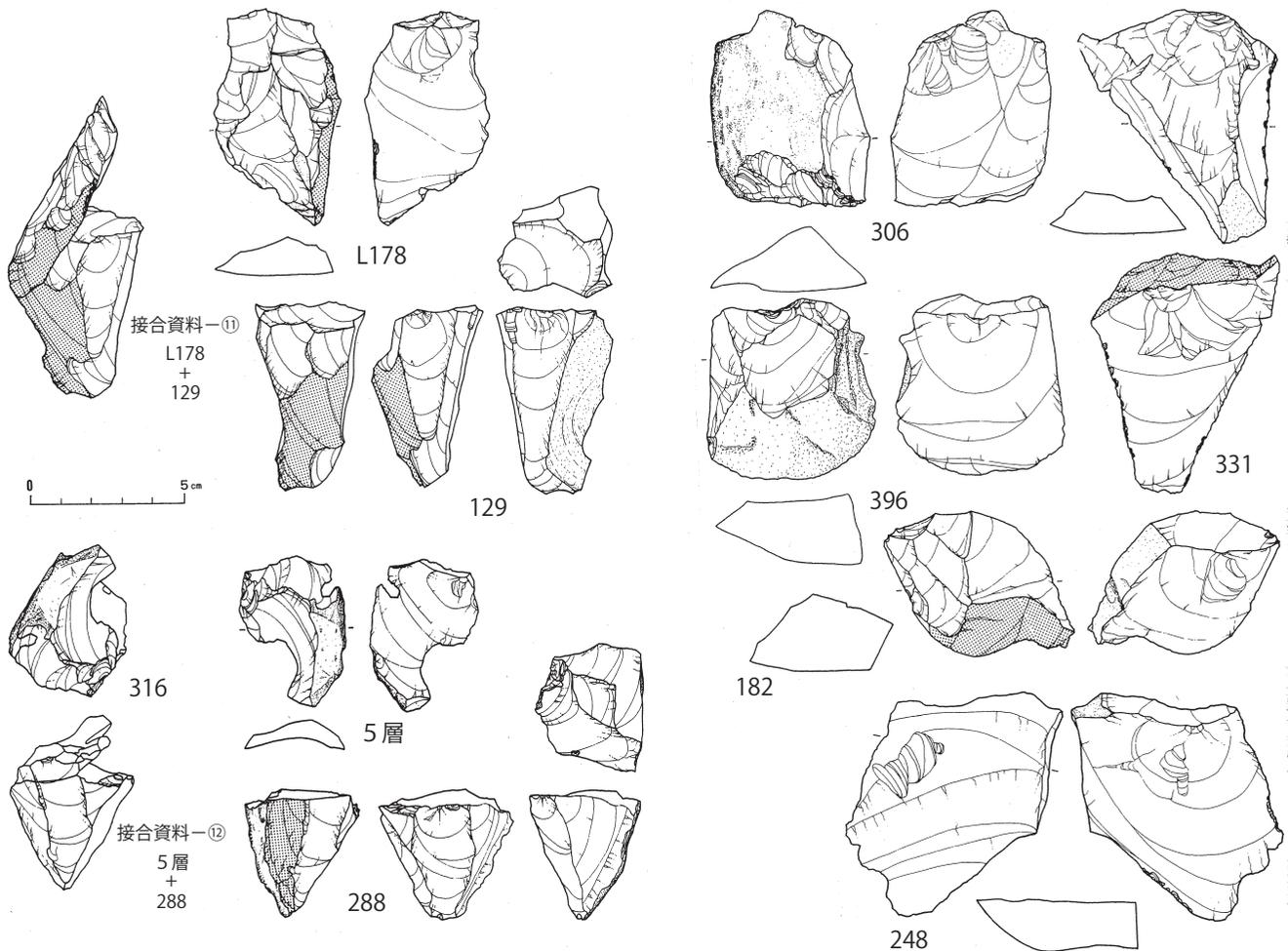
石核150,316,392,358,246,244

石核99,353,191,15,164,204,32

石核150（長さ5.5cm、幅4.5cm、厚さ4.6cm）は大きな剥離面の両面にポジティブ、ネガティブな面を残す。素材剥片の打面側に作業面を設定し、一枚の縦長剥片を剥離している。この段階で剥離が終了している。

石核392（長さ6.3cm、幅4.1cm、厚さ3.6cm）は初期段階の自然面を大きく残す縦長剥片に、ポジティブな面と自然面を挟み込むように作業面が設定され、剥離が進行する。打面は素材剥片と同じものである。細身の縦長剥片が作出されたのであろう。

石核316（長さ7.1cm、幅2.6cm、厚さ2.8cm）は両側面の一面にポジティブとネガティブな面をそれぞれ残す。素



第36図 第4トレンチ第6層上部出土の石器（清川村教委1986より）

材剥片のポジティブな面とネガティブな面を挟み込むように作業面が設定され、剥離が進行する。まだ、素材時における剥片の側面が残存する。打面は素材剥片と同じものである。

石核358（長さ5.3cm、幅3.0cm、厚さ4.5cm）は素材剥片の腹面を大きく残し、その末端部に横位から新たな打面を形成し、細身の縦長剥片を作出している。背面側にも自然面を残す。

石核246は素材剥片の腹面を大きく残し、打面は同じような位置に設定されている。作業面は素材剥片の側辺にあったものと推定される。

石核244（長さ5.2cm、幅4.5cm、厚さ1.9cm）は一面にポジティブな面を残す。作業面は比較的大きい縦長剥片を剥離した痕跡が二面見られる。

石核99（長さ3.7cm、幅2.6cm、厚さ2.7cm）は素材剥片の腹面を大きく残し、打面は同じような位置に新たに設定されている。作業面は素材剥片の側辺に設定され、小形で細身の縦長剥片を作出している。自然面を残す。

石核353（長さ4.7cm、幅2.0cm、厚さ3.85cm）は素材剥片の腹面を大きく残し、打面が同じような位置に設定され

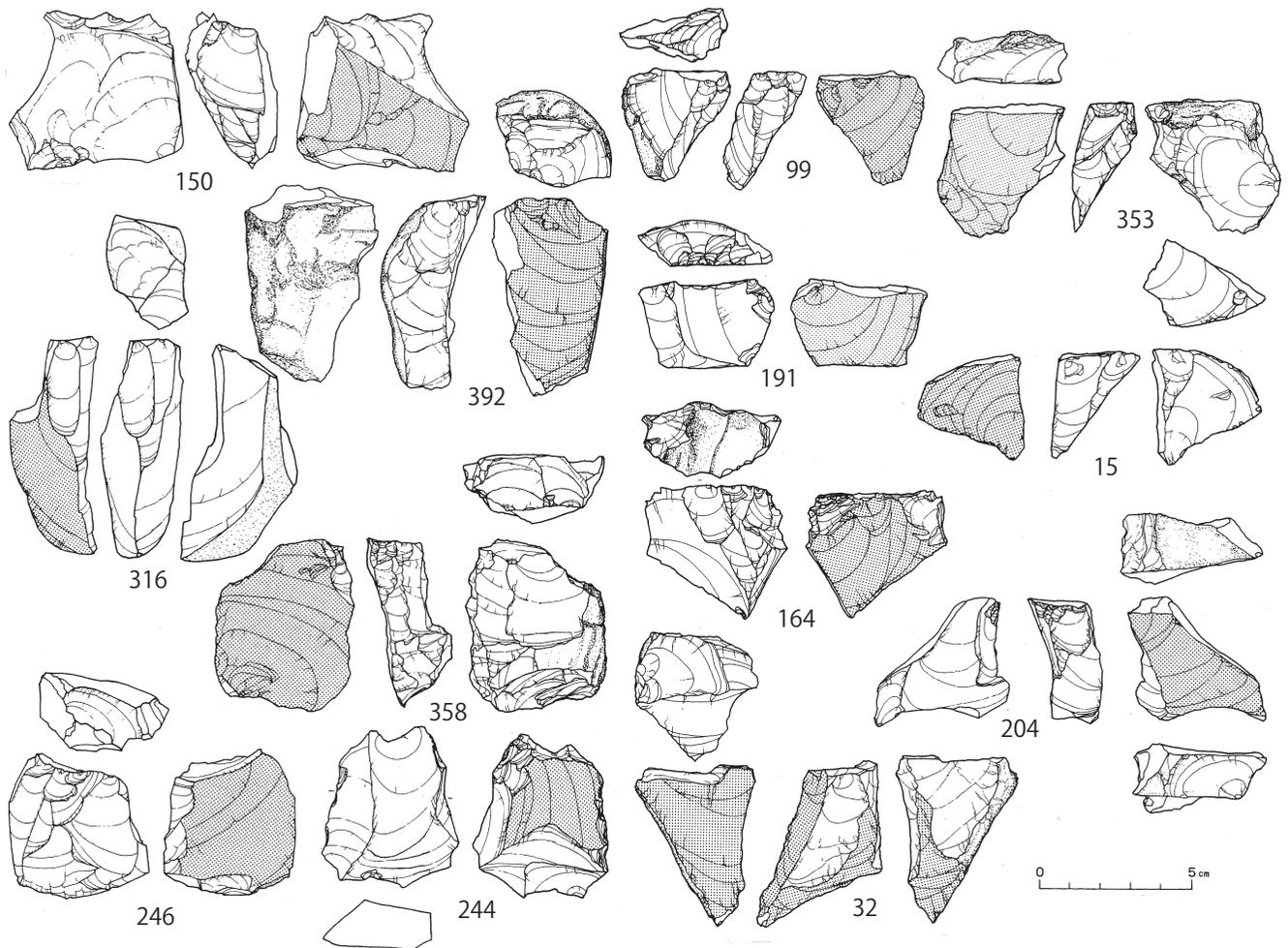
ている。ポジティブな面の末端にバルブが残っている。背面には自然面と大きなネガティブな面が見られ、その方向は横位からのものである。素材は打面が頻繁に入れ替わる石核から剥離された剥片であろう。

石核191（長さ3.7cm、幅3.8cm、厚さ2.2cm）は素材剥片の腹面を大きく残す。元の打面を横位から新たに細かく調整剥離している。背面の右位に残る横からの剥離面も素材時のものである。左側の小形の剥離痕は、この剥片を素材とした目的剥片で、細身の縦長剥片が作出されている。

石核164（長さ4.0cm、幅3.6cm、厚さ3.9cm）は素材剥片の腹面を大きく残す。打面は自然面で、素材剥片と同じである。この剥片の背面には数枚の縦長剥片を剥離した痕跡が見られる。

石核15（長さ3.7cm、幅2.8cm、厚さ3.1cm）は素材剥片の腹面を大きく残し、その末端部に新たな打面を設定する。腹面と背面に挟まれた側辺を作業面とし、細身の縦長剥片を作出している。

石核204（長さ3.8cm、幅2.6cm、厚さ4.4cm）は素材剥片の腹面と背面を大きく残し、腹面と背面に挟まれた側辺を作業面とし、縦長剥片を剥離している。最終剥離面の末



第37図 第4トレンチ第6層上部出土の石器（清川村教委 1986より）

端はヒンジである。打面は数回の剥離した痕跡が見られる。

石核32（長さ5.1cm、幅4.2cm、厚さcm）は素材剥片の両面にポジティブな面がみられる。その一面に先細りで、斜め長の剥離痕が観察される。また、素材剥片の打面にも剥離痕が見られ、末端はヒンジとなっている。この剥離面も目的的な縦長剥片を作出したものと推定される。

剥片生産技術b類：a類の剥片生産技術に供給する素材剥片を作出した技術である。先細りの縦長剥片を多量生産する石核の多くは、ポジティブな面を残させるのが一つの特徴としてあげられる。その素材となった大形剥片を獲得する方法はどのようなものであったかを次に検討してみたい。

接合資料⑧（第38図）

剥片123 + 剥片130 + 剥片131は、素材剥片の接合状況の一端を示す資料である。大形の剥片131は腹面に対して背面の剥離痕が横位の方法を示す。この剥離痕に剥片123と剥片130が接合する。また、二つの剥片の背面にはポジティブな面が残存し、その打撃方向が上位にある。したがっ

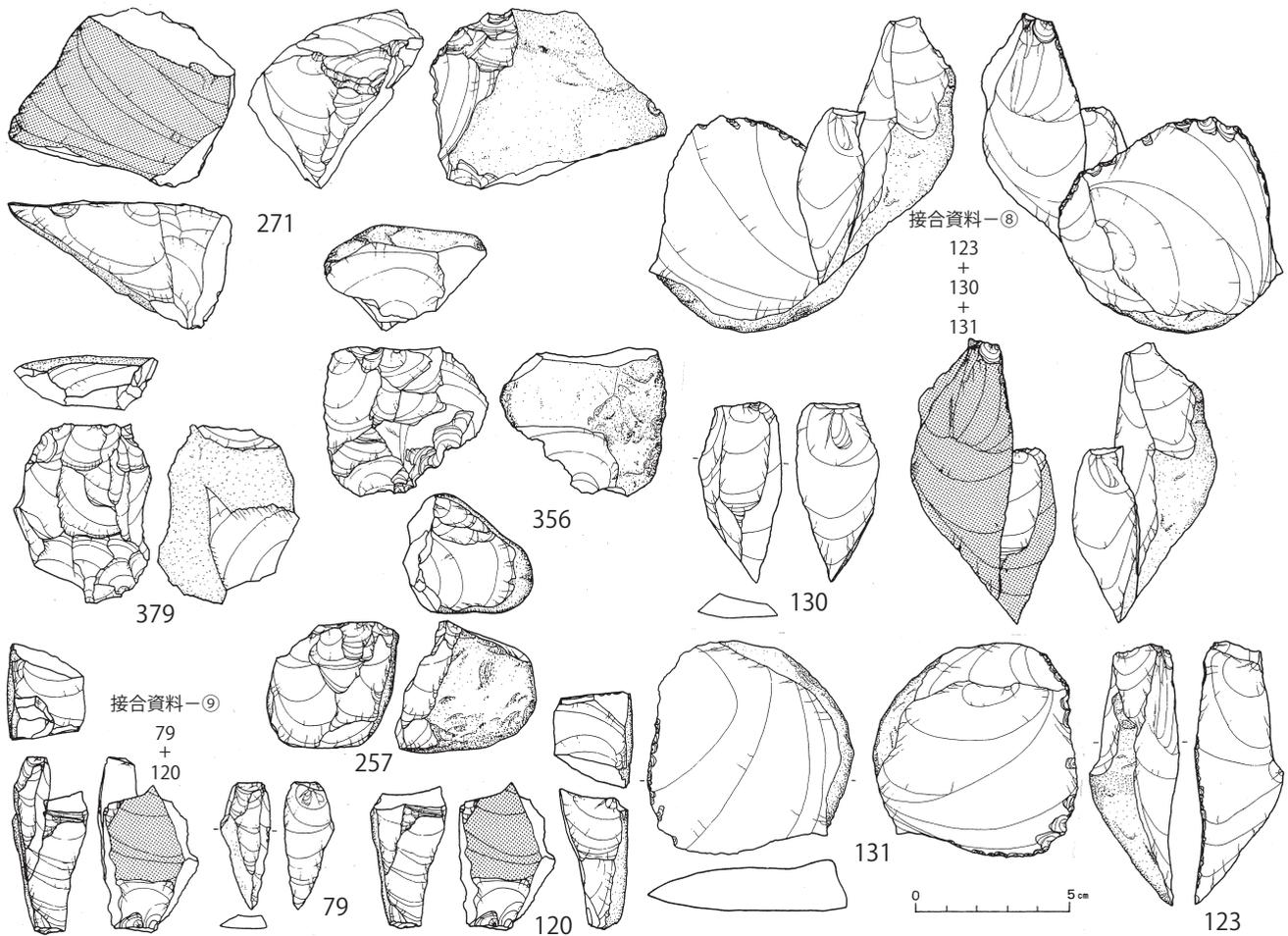
て、素材剥片の剥離された打撃方向は異なる三ヶ所にあったものと推測される。多打面の石核から剥離された可能性が考えられる。剥片123と剥片130との接合は両方の背面にポジティブな面が残存することから、これらは素材剥片より縦長剥片を剥離する際の初期段階の資料と考えられる。この接合資料からは素材剥片の大きさも予想される。剥片131は素材剥片の標準形態であろうか。

大形剥片類

第35図（306・396・248・331・182）は先細りの縦長剥片類を剥離するためのブランクとなった大形剥片類である。

剥片306（長さ5.9cm、幅6.3cm、最大厚さ2.2cm）は形状が四角形を呈した大形剥片である。背面の中央部に大きく自然面を残す。周辺には横位からの方向を示す剥離面が残存する。打面転移後の初期段階の剥片である。

剥片396（長さ5.9cm、幅5.4cm、最大厚さ2.5cm）は形状が四角形を呈した大形剥片である。背面の末端と側面に大きく自然面を残す。剥離痕の方向は腹面と同一である。平坦打面の分厚い剥片。



第38図 第4トレンチ第6層上層部出土の石器（清川村教委1986より）

剥片248（長さ7.7cm、幅6.6cm、最大厚さ1.8cm）は先細りの四角形を呈した大形剥片である。平坦打面の一部に自然面が残存する。背面は腹面と逆方向の一枚の大きな剥離痕がみられる。

剥片331（長さ7.4cm、幅6.7cm、最大厚さ2.1cm）は打面側に最大値がある先細りの逆三角形を呈した大形剥片である。平坦打面がポジティブな剥離面になっている。

剥片182（長さ4.9cm、幅6.2cm、最大厚さ2.4cm）は形状が四角形を呈した大形剥片である。側面に大きく自然面を残す。背面には腹面とは横方向を示す剥離痕があり、末端はポジティブな剥離面がみられる。打面と側面は一定の厚みがある。これらの素材剥片には以下のような特徴があげられる。

- i) 形状が四角形を呈したものと、縦長を呈する大形剥片が多い。
- ii) 断面形が厚みをもつ。特に、打面と側面に一定の厚みの関係がある。
- iii) 打面の転位が著しい剥離技術である。

《第4トレンチ出土の石器群のまとめ》

- i) この石器群の石器組成はナイフ形石器、スクレイパー、チョッパーである。
- ii) ナイフ形石器の形態は、小形で、縦長剥片の基部と先端部に調整加工するナイフ形石器が最も多い。この形態が第6層上部一つの特徴といえる。この他に、分厚い縦長剥片末端に部分加工した形態も存在する。
- iii) 剥片生産技術は、大形の剥片を素材とし、先細りの縦長剥片を多量生産している。石核は素材となった剥片の腹面と背面が作り出す稜を巧みに利用して縦長剥片を剥離した様子が窺える。
- iv) 先細りの縦長剥片を多量生産する技術を東九州型の石刃技法と呼称したい。この石刃技法は打面調整や作業面の稜形成のための調整がない。規格性と量産性からみれば岩戸第1文化層の第1類よりはこの石刃技法が計画性に優れていると思われる。

a - 2. 岩戸第6層上部 第1トレンチの石器群

第1トレンチは、第4トレンチよりも一段低い平坦面に、

東西9m、南北約2mの細長い範囲に設定した。この石器群は第6層上部から出土したものであり、第4トレンチの第6層上部のものと同レベル的に同一である。石器類の内訳は以下の通りである。

第1トレンチ第6層上部出土の石器群

ナイフ形石器	7点
スクレイパー	1点
ハンマー・ストーン	1点
石核	4点
剥片	40点
破片	4点
礫類	67点

合計 124点

第1トレンチからはナイフ形石器、スクレイパーが発見されている(第39図)。

ナイフ形石器：7点が発見されている。

A類：一側辺にのみ調整剥離がなされるものが2点発見されている(第39図-55,73)いずれも先端が尖るもの(A1類)である。

B類：二側縁に調整剥離がなされ、刃部が斜めになるものが3点(同図-63,54,81)。

E1類：先端のみに調整剥離がなされるものであるが、その形状が「断ち切る」調整剥離をおこなうものが1点(98)。他1点は不明。

同図-55,73,63,54,81,98はナイフ形石器である。

ナイフ形石器63(長さ3.9cm、幅2.4cm)は打面が残存する縦長剥片を素材とし、二側縁に調整加工が施されている。末端部に斜刃となる鋭い縁辺がみられ、刃こぼれのような微細な剥離痕が観察ある。切出し形を呈する形態である。

ナイフ形石器54(長さ5.5cm、幅2.6cm)は幅広の剥片を素材とし、打面と末端縁の二側縁に調整加工するナイフ形石器である。切出し形を呈する形態である。

ナイフ形石器55(長さ9.2cm、幅2.8cm)は分厚い剥片を素材とし、一側縁に調整加工が施されている。断面が三角形を呈する。剥片の末端部は一辺に急峻な加工がなされており、調整加工された面には両方向からの剥離痕が観察される。

ナイフ形石器98(長さ4.0cm、幅2.4cm)は縦長剥片を素材とし、打面側を切り取るように調整加工する。また、末端側にも調整加工がみられる。

ナイフ形石器73(長さ2.8cm、幅1.6cm)は分厚い縦長剥片を素材としたナイフ形石器であろう。打面部側が破損しているが、その形態から一側縁を調整加工したナイフ形石器であろう。

ナイフ形石器81(長さ3.6cm、幅1.8cm)は幅広の剥片を素材とした二側縁を調整加工したナイフ形石器であろう。基部側は破損しているが、刃部側に僅かに調整痕がみられることから二側縁を調整加工した切出し形を呈する形態と推測される。

スクレイパー：剥片の縁辺部に浅く、薄く調整加工した石器をスクレイパーとする。1点発見された。

スクレイパー29は幅広剥片の一側縁に背面から二次加

工した石器。刃部の形状はジグザクで、縁辺が鋸歯状を呈する。

〈剥片生産技術〉

剥片(65,7,97)と石核(72,16)を示す。

剥片65(長さ7.3cm、幅3.9cm)は末端部に自然面を残存する大形の縦長剥片である。縦長剥片は背面側に素材剥片のポジティブな面を有しないもので、剥離の進行した剥片類と推定される。その一縁辺の背面側に微細な剥離痕が観察される。これらは、二次加工によるものと推定される。

剥片7(長さ6.9cm、幅2.5cm)は縦長剥片の背面側に素材剥片のポジティブな面(スクリーンの部分)と自然面を残す。末端形状は先細りである。

剥片97(長さ3.3cm、幅5.2cm)は横長剥片の末端縁にポジティブな面(スクリーンの部分)を残す。

石核72(長さ4.4cm、幅5.2cm)は作業面がすべてネガティブな面である。裏面に自然面が残る。素材は剥片である。

石核16(長さ5.2cm、幅3.6cm)は素材剥片の腹面を大きく残り、左側面に小形縦長剥片を剥離したネガティブな面がみられる。それらの打面は同じような位置に設定されている。作業面は素材剥片の側縁にあったものと推定される。

以上、剥片と石核にはポジティブな剥離痕が残存していることから、第1トレンチから出土した石器群の剥片生産技術は、分厚い剥片を素材とし、先細りの縦長剥片を多量生産していることが推定される。

《第1トレンチ出土の石器群のまとめ》

i) ナイフ形石器の形態は二つある。一つは、分厚い縦長剥片の一側縁にのみ調整剥離がなされる形態。稜上からも加撃するような技術がある。いま一つは、二側縁に調整剥離がなされ、刃部が斜めになる形態。いわゆる切出し形のナイフ形石器である。これらは打面を残すものと、残さないものがある。このトレンチには小形で、縦長剥片の基部と先端部に調整加工するナイフ形石器はみられない。第4トレンチ第6層上部にみられたナイフ形石器の形態とは異なる。

ii) 剥片生産技術は、ポジティブ面を有する石核と先細りの縦長剥片が存在することから、大形の剥片を素材とした石刃技法が存在したものと考えられる。これらは第4トレンチ第6層上部にみられた剥片生産技術に類似する。

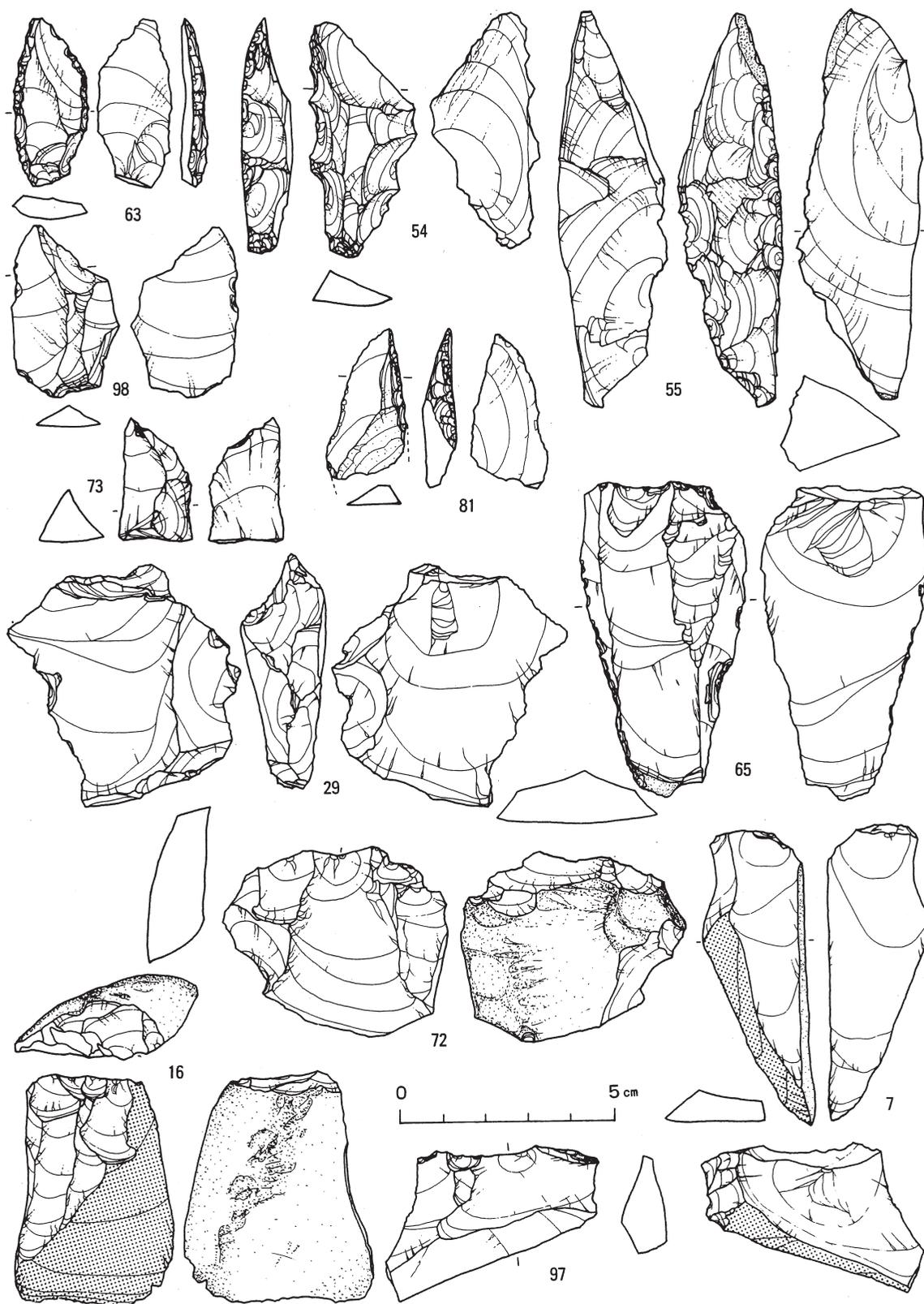
iii) 石材にはスレートが使用されている。

以上、ナイフ形石器の形態の様相が異なるものの、剥片生産技術が共通する。また、第6層の出土レベルから判断すると、第1トレンチ出土の石器群は第4トレンチの第6層上部の石器群と同一時期のものと考えられる。第1トレンチでは、第6層上部の別な様相が見取れる。

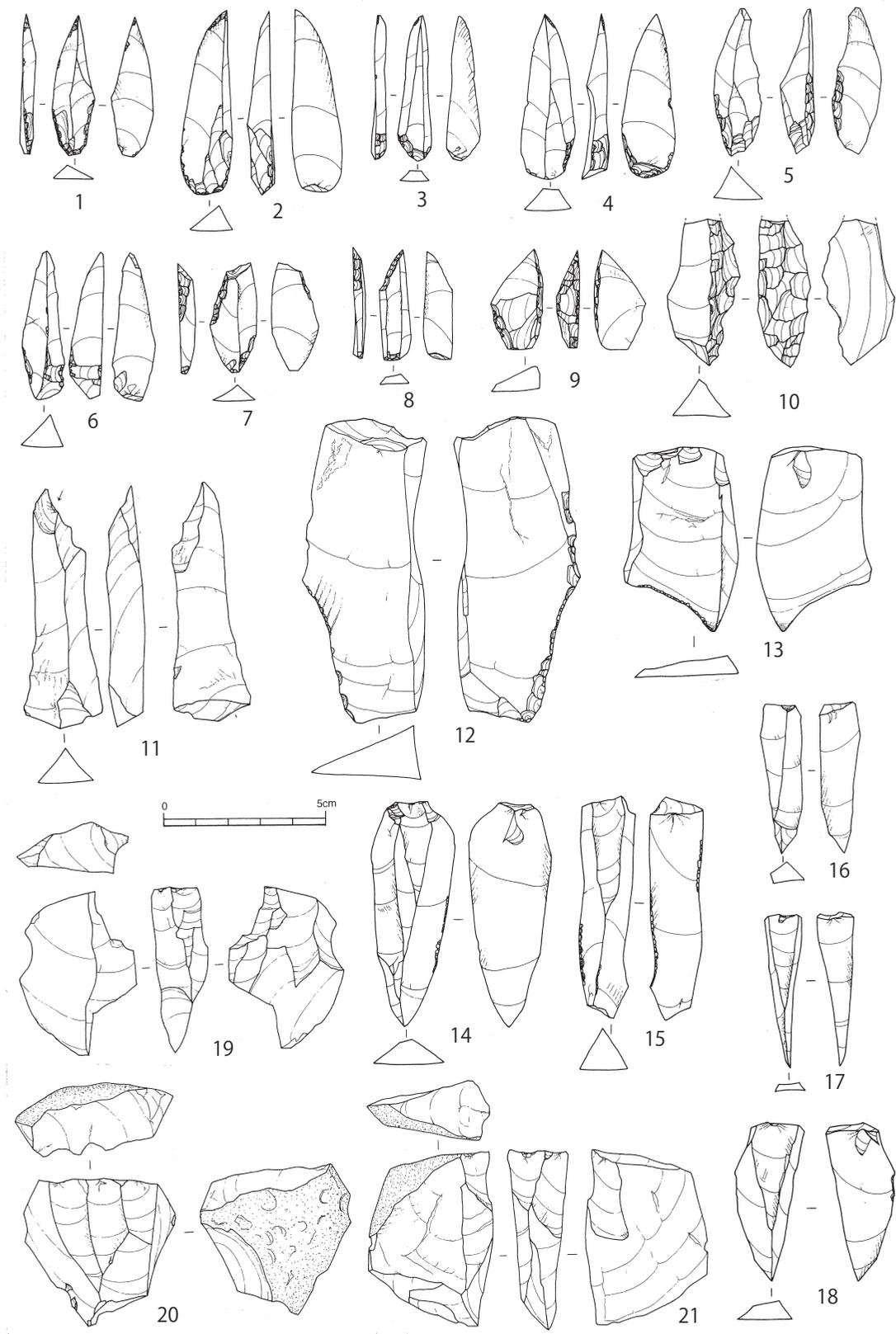
b. 岩戸B文化層の石器群

第2次調査の岩戸B石器群については坂田氏から報告されている(坂田1980)。この報告にしたがって石器群を整理してみたい。岩戸Bの石器群は、第2次調査の第1トレンチと他の試掘ピットから出土している。出土層位は第6層の上半分から発見されたと指摘されている。出土層位からみて、第3次調査の岩戸第6層上部石器群と同レベル的には同一時期のものと考えられる。報文によれば、以下のよう

に石器類は分類されるという。



第39図 第1トレンチ第6層上部出土の石器 (清川村教委 1986より)



第40図 岩戸B石器群 (第2次調査) (坂田1980より)

岩戸第2次調査の第1トレンチと他の試掘ピットから 出土した第6層上半分の石器群

ナイフ形石器	30点
彫刻刀形石器	11点
チョッパー	1点
スクレイパー	54点
使用痕ある剥片	67点
剥片	304点
石核	60点
敲石	5点

合計 532点

石材はホルンフェルス、珪質頁岩、頁岩、安山岩、砂岩、玄武岩である。ホルンフェルスについては私達が第1次調査で岩石学的にスレートとして報告した石材と同じものであろう。石器組成には、ナイフ形石器、彫刻刀形石器、スクレイパーで構成されているという。ただし、図示された彫刻刀形石器は現物を見ると、ほとんどの石器の彫刻刀面に打点とネガティブ剥離面が存在しない。1点が有するのみである。スクレイパーと使用痕ある剥片に関しては調整加工痕がどのような基準で分類されたのかの不明である。石器組成は岩戸第6層上部石器群と同様、岩戸B石器群がナイフ形石器とスクレイパーで構成されるものと考えられる。

ナイフ形石器：ナイフ形石器は、縦長剥片の基部と先端部に調整剥離し、形状を整えているのが特徴である。

第40図-1～10は第1トレンチで発見された石器である。

同図-1は小形縦長の剥片を素材としたもので、打面側の二側辺基部と末端に二次加工する形態。背面側(a)に二次加工がみられる。

同図-2は縦長剥片を素材としたもので、打面側の二側辺基部と末端に二次加工する形態。基部側に平坦打面が存在する。おそらく左側面(a)はポジティブな剥離面が残存すると思われる。

同図-3は細身の小形縦長剥片を素材とし、打面側の二側辺基部と末端に二次加工する形態である。基部側に平坦打面が存在する。

同図-4は縦長の剥片を素材とし、打面側の二側辺基部と末端に二次加工する形態。基部は円い打面が残存する。二次加工は背面側(a)からもおこなわれている。

同図-5は小形縦長剥片を素材とし、打面側の二側辺基部と末端に二次加工する形態。打面が除去されている。

同図-6は先細りの小形縦長剥片を素材とし、打面側に二次加工する形態。末端に二次加工がみられない。おそらく右側面(b)はポジティブな剥離面が残存すると思われる。

同図-7は小形縦長剥片を素材とし、打面側の二側辺基部と末端に二次加工する形態。打面側は除去され、先端部は二次加工する部分が長い。

同図-8は細身の小形縦長剥片を素材とし、末端を断ち切るように二次加工する形態。打面側は二次加工がみられない。

同図-9は横長の剥片を素材とし、打面側と末端側を二次加工した形態。末端側一側面に沿って長く、打面側は除去されている。いわゆる刃部が斜めになる切出し形のナイフ

形石器である。

同図-10は分厚い横長剥片を素材とし、打面側の一辺に急峻な調整剥離したナイフである。背部となる剥離面に対向的な剥離痕がみとめられる。先端が破損している。ナイフ形石器9・10は第3次調査の第1トレンチで発見された石器に類似する。

彫刻刀形石器：槌状の剥離面を有する石器。

報告された1点のみが打点とネガティブな剥離面をもつ彫刻刀形石器である。同図-11は打面を残存する縦長剥片の先端に一条の槌状剥離を施した彫刻形石器である。

スクレイパー：多量に発見されたという報告がある。実測図を見る限り、剥片の縁辺部に細かな剥離痕が観察されるのみである。使用痕のある剥片とどこが異なるのであろうか。スクレイパー類の特徴を指摘すれば、比較的大形の剥片類に二次加工が見られる。ナイフ形石器の素材となった先細りの縦長剥片とは形状の異なる剥片が用いられている(同図-12・13)。

剥片類：(同図-14～18)

作出された剥片の背面にはポジティブな剥離面が残されている例が多い。また、形状が打面側が大きく、先細りである。ナイフ形石器の素材に類似する。

石核類：(同図-19・20・21)

同図-19は大形の剥片を素材とし、新たに打面を作成した後c面に先細りの縦長剥片を連続剥離した痕跡が観察される。a面はポジティブな剥離面、b面に素材時の大きな剥離面が残存する。剥片の側辺の稜を取り込むように縦長剥片が生産されている。

同図-20は分厚い幅広剥片を素材とし、新たに打面を作成した後、腹面側に縦長剥片を連続剥離した剥離痕が観察される。裏面は自然面が残存する。b面はポジティブな剥離面。a面に素材時の大きな剥離面が残存する。

同図-21は分厚い幅広剥片を素材とし、その打面側を除去して打面を新たに作成した後、その側辺の稜を取り込むように4枚の縦長剥片が生産されている。背面は自然面が一部残存する。比較的初期段階のものである。

以上、剥片生産技術は大形の剥片を素材とし、先細りの縦長剥片を多量生産している。残された石核には素材になった剥片の腹面と背面が作り出す稜を巧みに利用して石刃を剥離した様子が窺える。作出された剥片の背面にはポジティブな剥離痕が残されている例が多くみられる。この石刃技法は岩戸第6層上部石器群と同じである。岩戸B文化層は岩戸D文化層の上位から層位的に発見されている。ナイフ形石器の形態的な特徴、剥片素材とする石核から先細りの石刃を剥離する剥片生産技術は岩戸第6層上部石器群の石器製作技術の特徴と一致する。

4. 結 語

1) 岩戸遺跡内の石器群の変遷

岩戸遺跡内の石器群の変遷をまとめると以下のようになる。

1. 本遺跡内で最古の石器群は岩戸第III文化層と岩戸Kの各石器群である。低位段丘の形成直後の時期に位置づけられる。資料は僅少なから、そこには、縦長剥片を連続剥

離する技術が看取される。剥離された縦長剥片は、形状が斜長や寸詰まりの形状を呈したものが多く、調整技術の痕跡を有さない。後出する石刃技法と区別して祖型石刃技法と呼称する。また、打面の一部を除去したナイフ形石器が発見されている。さらに、礫を分割し、それを素材とした石核から小形の幅広剥片を剥離する技術もみられる。剥片の一部にポジティブな剥離痕が残存する。これらを「岩戸A T下層最下部の石器群」と呼称する。

2. 次に後出する石器群は岩戸II、岩戸G～Jの各石器群である。段丘礫層の上位に赤褐色土層があり、この層とA T直下の「黒色帯」が抜けた黄・褐色を呈する層中から出土した石器群である。幅広や横長の剥片類が存在する。資料には僅少であるものの、縦長剥片類を連続剥離するような剥離技術がみられない。素材剥片を縦に置き、基部側に面的な調整加工を施すナイフ形石器が1点みられる。また、ノッチや縁辺部を僅かに加工したスクレイパーも発見されている。これらを「岩戸A T下層下部の石器群」と呼称する。

3. 次に後出する石器群は岩戸E・Fの各石器群である。「黒色帯」中の石器群である。第2次調査では文化層がE・Fの上・下二枚に分層される。上部のE文化層は僅少で不明である。下位のF文化層からは「縦長剥片」がまとめて発見されている。縦長剥片類の連続剥離技術から石刃技法の存在が窺える。背面の頭部に調整痕が残存するものの、打面や稜形成をおこなうような調整技術はみられない。剥離された石刃は、薄手で縦長を呈した整ったものも存在するが、全体的に見れば形状が斜長や寸詰まりを呈し、厚手で不揃いのものが多い。調整技術の未発達な石刃技法といえる。第3次調査では「黒色帯」中から台形石器が1点出土している。ここでは「黒色帯」中から発見された一群を「岩戸A T上層上部の石器群」と呼称する。

4. 次に後出する石器群は岩戸第1文化層、第2次調査—岩戸Dの石器群、第3次調査—第6層下部の石器群である。始良T n火山灰層(A T)の上位に存在する石器群である。本遺跡ではA Tの上位に褐色を呈するローム層が厚く堆積する。この三石器群は褐色を呈するローム層の下部から発見されたもので、同時期であり、A T降下に近い時期と考えられる。特に、岩戸第1文化層と岩戸Dの石器群はトレンチが隣接し、同一層中から出土し、これらが同じ集中区内から発見されたものと思われる。石器組成は、斜め整形の二側辺加工のナイフ形石器、一側辺加工のナイフ形石器、小形の切出し形のナイフ形石器、剥片尖頭器、三稜尖頭器、周縁調整尖頭器、スクレイパー、彫刻刀形石器、チョッパー、チョッピング・ツールなどで構成されている。特にナイフ形石器は様々な形態を呈する。瀬戸内技法で製作された「国府型」、縦長剥片を素材として「斜め整形の二側辺加工」、「一側辺加工」、「基部加工」、「部分加工」のものや、小形で「切出し形」等のナイフ形石器が存在する。また、本遺跡の調査以降後に、九州地方で定着しつつある「今峠型ナイフ形石器」存在もあきらかとなった(鎌田 1999)。剥片生産技術には瀬戸内技法や石刃技法の存在が指摘できる。石刃技法は打面や稜形成をおこなうような調整技術がみられない。調整技術の未発達な石刃技法といえよう。この他に、打面と作業面が頻繁に入れ替わり、幅広剥片類を剥離する技術も存在する。特筆されることは岩戸第1文化層からは「コケシ形石偶」が出土している。これらを「岩戸A T上層下部の石器群」と呼称する。

5. 次に後出する石器群は岩戸第6層上部、岩戸Bの石器群である。第2・3次調査では、「黒色帯」やA Tの上位に褐色を呈するローム層が堆積していた。そして、この下部からは岩戸D、岩戸第6層下部の各石器群が発見された。さらに、その上部から岩戸B・岩戸第6層上部の各石器群が層位的に出土した。岩戸B・岩戸第6層上部の各石器群は、石器組成に縦長剥片の打面側や先端に調整加工した基部加工ナイフ形石器、一側辺加工や二側辺加工の切出し形を呈するナイフ形石器、スクレイパー類で構成されている。剥片生産技術は分厚い剥片を素材とし、先細りの縦長剥片を作出する石刃技法がみられる。剥片の腹面と背面が作り出す稜を巧みに利用して石刃を剥離しており、そこには打面や作業面の稜を形成するような調整技術がみられない。石刃は打面側の二側辺基部と末端に二次加工するようなナイフ形石器とに供給されている。これらの石器群を「岩戸A T上層上部の石器群」と呼称する。

6. 次に後出する石器群は褐色を呈するローム層の上位に存在するソフト・ローム層中から出土した細石刃石器群である。第2次調査で細石刃が3点確認されただけで、細石刃石核は検出されていない。この石器群の様相は不明である。

7. 岩戸遺跡での層的事例に基づいて石刃技法の技術的な視点でその変遷を概観すれば、低位段丘形成直後の時期に祖型石刃技法が出現する。次の「黒色帯」下位の褐色ローム層中には石刃技法の存在を確認することはできない。再び、石刃技法が出現するのは「黒色帯」の中である。作出された石刃の特徴は幅広く、打面が大きく、分厚い。形状が不揃いである。打面部や作業面に調整技術を全くもたない石刃技法である。次に、A T上位の二つ石器群にも石刃技法が見られる。下部の石刃技法は、打面を1ヶ所、または対応する2ヶ所に設定し、打面部や作業面に調整を全くほどこさないで石刃を剥離する。この石刃は、長さ6～8cm前後の比較的形態が整っているものの、幅広で分厚く、打面が大きい。下部の石刃技法は「黒色帯」中から出土した例に技術や形態で類似する。岩戸遺跡ではA Tを挟んで共通した石刃技法が看取される。さらに、この上位に位置する褐色ローム層上部にも石刃技法の存在が確認できる。この石刃技法は分厚い剥片を素材とした石核から、剥片の腹面と背面が作り出す稜を巧みに利用して、長さ4～6cm前後の小形で先細りの石刃を生産するものである。下部のものとは、工程、形態、大きさ、生産量の点で異なっている。一方、岩戸遺跡では層位的な変化の基に石刃技法の相違が看取できるものの、打面部や作業面に調整作業を全くおこなわないといった共通した特徴が指摘できる。この相違は東北日本でみられるような打面や作業面を盛んに調整し、長大な石刃を剥離する石刃技法とは大いに異なっている。岩戸遺跡の石刃技法の変遷観は西南日本を代表する層的事例の一つとして理解しておきたい。

2) 近年の九州地方後期旧石器時代編年に対する整理

岩戸遺跡の三調査以降、九州地方では各地域で多くの旧石器が重層的に発見され、それらの資料に基づいた新たな枠組み作りや編年の構築がおこなわれている。近年、九州東南部地域では、宮崎平野や鹿児島県の資料を中心に分析した宮崎10段階編年(秋成ほか 2003)、宮田栄二氏の編年(宮田 2006)があげられる。また、西北九州地域資料から九州全域を俯瞰した萩原博文氏の編年(萩原 2006)

もあげられる。いずれも時間軸の設定作業には、九州地方のローム層中にみられる「AT」と一枚の「黒色帯」が層位的基準の対比に使用されている。ここでは大分県に隣接する宮崎平野で示された宮崎10段階編年、鹿児島県の資料を中心にAT降灰以降期の石器群をテフラとの関係(P17とP15)で明らかにした宮田編年、さらには西北九州において「台形石器」の存在が極めて重要な位置を占める萩原編年を取り上げ、岩戸遺跡の石器群との関係で再整理してみたい。

宮崎10段階編年は後期旧石器の時期を第1段階～第7段階、細石刃文化が出現する以降について第8段階～第10段階に大別している。宮田編年も宮崎10段階編年の大別案(宮田編年ではⅠ～Ⅹ期)を踏襲するものの、石器群の出土状況や地元のテフラとの関係からさらなる細分案が提出されている。一方、萩原編年は土器と細石刃文化が出現する以前を後期旧石器時代とし、1～5期に大別している。

次に三者の編年観を岩戸遺跡の石器群との関係で検討してみよう。九州編年の前半期と後半期を分ける大きな共通した基準は「AT」であろう。現在では、ATの年代観はAMSのC¹⁴年代で約2.6～2.9万年前頃の時期のものと推定されている(町田 新井 2003)。AT降灰以前の時期について、宮崎10段階編年は「黒色帯」中の石器群が上・中・下の三段階に分けられるという。古い順から第1段階は「黒色帯」の下部からそれが抜けた褐色ローム層上部中で発見される石器群である。台形石器、ナイフ形石器、石斧類、礫塊石器(礫器か)が組成する。素材を獲得するには縦長剥片類が僅かにみられるものの、明確な石刃技法によって作出されるものはないとされる石器群である。第2段階は「黒色帯」中部より出土するもので、同様に台形石器、ナイフ形石器、石斧類を組成する石器群である。第3段階は「黒色帯」上部から発見されるもので、小形二側辺加工ナイフ形石器やエンドスクレパーなどが組成する石器群である。素材を獲得する技術には、小形の薄い石刃を剥離する石刃技法がみられるという。当地域には「黒色帯」中部と上部の間に始良カルデラ起源の始良大塚(A-Ot: 32.5ka)と始良深港(A-Fm: 31ka)テフラの二枚が観察される。これらのテフラは、第2段階の石器群中に観察され、第1段階と第3段階の石器群を細別する一つの指標となっている。前半期については宮田編年Ⅰ～Ⅲ期も同様な見解である。西北九州の資料を中心に勘案した萩原編年は、「AT」直下の「黒色帯」下部からそれが抜けた褐色ローム層上部中で発見される石器群を1期とする。台形石器、ナイフ形石器、石斧類を保有する石器群である。この時期には明確な石刃技法がない。特に、石器の二次加工技術に注目し、調整技術に平坦、微調整、切断といった手法が多用されるという。2期は「黒色帯」の上部から発見される石器群である。石刃技法がこの時期に出現するという。ナイフ形石器は急傾斜細調整が当該期に強い結び付があるとされる。また、萩原氏は時期区分にテフラのみを基準に画期を引くことに問題があるとしながらも、2期から3期への移行するにあたっては、「AT」直下の石器群の伝統を受け継ぎながら、その降下直後に新たな石器群が出現するという3期との違いを示している。

この見解は、九州全域の石器群の層位的な出土状況の様相や他者の編年観からも首肯することができ、極めて重要な指摘である。

以上、三者の九州地方後期旧石器時代前半期石器群の変

遷案は、「AT」直下の「黒色帯」下部からそれが抜けた褐色ローム層中に、台形石器、ナイフ形石器、石斧類を保有する石器群がみられ、素材を獲得する技術には、石刃を剥離するような石刃技法がみられないという共通した理解がみられる。そして、石刃技法の出現はそれにやや遅れて「AT」直下の「黒色帯」上部にあるという。縦長剥片類は、打面や作業面に調整技術がみられないものの、薄く、形態が整っている。石刃技法によって石刃が連続的に剥離されたものといえよう。これらを素材として、斜めに整形する二側辺加工のナイフ形石器類が当該期に多量に発見されている。急傾斜細調整の二次加工技術が発達することも重要な指摘である。この様相が後期旧石器時代の前半期石器群の特徴といえよう。

岩戸遺跡ではAT下位の石器群を「岩戸AT下層最下部の石器群」、「岩戸AT下層下部の石器群」、「岩戸AT下層上部の石器群」と呼称し、3時期に大別した。「岩戸AT下層最下部の石器群」は剥片類を素材とした剥離技術であることや、粗雑な縦長剥片を連続剥離する「祖型石刃技法」の存在を指摘することができる。また、これらの中には基部の一部を粗く二次加工する微細調整のナイフ形石器類も組成するが、台形石器、石斧類の保有がみられない。石器組成上、「岩戸AT下層最下部の石器群」と古い様相とされる九州地方後期旧石器時代(1期、1段階、1期)の石器群とに違いがみとめられる。「祖型石刃技法」の存在、台形石器、石斧類の不在の石器群は、前期から後期へ移行する時期の様相の一端を示すものではなからうか。

次に後出する時期は、段丘礫層の上の赤褐色層から「黒色帯」の下位層の褐色ローム層中から出土した「岩戸AT下層下部の石器群」である。素材剥片を縦に置き、基部側に面的な調整加工が施される石器類がある。ノッチ、縁辺部を僅かに加工したスクレパーが組成されているが、台形石器、ナイフ形石器、石斧類が岩戸遺跡ではまだ確認されていない。「岩戸AT下層下部の石器群」は、萩原氏が指摘するように、調整技術に平坦、微調整、切断といった手法がみられることや、縦長剥片を連続剥離する技術がみられない点で、九州地方の「黒色帯」中の下位層からそれが抜けた褐色層から出土した石器群に類似する。すなわち、九州地方後期旧石器時代の古い時期(1期、1段階、1期)に類似する。「岩戸AT下層下部の石器群」もこの時期に位置づけられる。

さらに後出する「岩戸AT下層上部の石器群」は「黒色帯」中の石器群である。「縦長剥片」を連続剥離した様相が窺える。調整技術の未発達な石刃技法の存在が指摘できる。岩戸遺跡ではF文化層とされた縦長剥片類は「黒色帯」中の下部から出土しているが、ここでは「黒色帯」中の石器群として一括して扱った。九州地方全域では二側辺加工のナイフ形石器に伴う石刃は薄く、形状が整っているのに対し、岩戸遺跡のものは斜長や寸詰まりで、やや厚手で不揃いである。しかもこの石刃技法の出現はAT直下の「黒色帯」中の上部からである。石刃技法出現の様相が異なる。近年、阿部 敬氏は九州地方南部のAT下位の「暗色帯」中の「縦長剥片剥離技術」を検討され、その中にいくつの変異があることを指摘している(阿部 2002)。今後、石刃技法の枠組みについて、工程、形態、大きさの違いなどといった見方やその基準設定を、再度構築していく必要があろう。

後期旧石器時代の後半期は「AT」の上位で発見される石器群である。九州東南部地域の宮崎10段階編年は、「AT」

の上位から細石刃石器群以前を第4～7段階に大別して。

第4段階には二側辺や部分加工のナイフ形石器に搔器(エンドスクレイパー)が組成する。さらにこの石器群から瀬戸内技法が共存してくるといふ。第5段階は剥片尖頭器、角錐状石器(三稜尖頭器)の出現、狸谷型ナイフ形石器、粘板岩を使用した槍先形尖頭器、石清水型スクレイパーが組成する。この時期も瀬戸内技法に関連する国府型ナイフ形石器がみられるといふ。しかし、台形石器の組成は僅少である。第6段階は今峠型ナイフ形石器、圭頭形のナイフ形石器(北牛牧型)の出現、瀬戸内技法に関連する国府型ナイフ形石器や角錐状石器が小形化し、狸谷型ナイフ形石器が消滅するといふ。第7段階は石刃技法から作出される小形化した縦長剥片類を素材とした基部加工のナイフ形石器や二側辺加工ナイフ形石器、さらには西北九州地域で多く検出される「百花台型」の台形石器が共存してくるといふ。剥片尖頭器、角錐状石器(三稜尖頭器)、瀬戸内技法に関連する資料は組成上から姿を消す。この時期の石器類の小形化がすすむ。九州東南部地域では、宮田編年(Ⅳ期～Ⅶ期)が構築されており、宮崎10段階編年(第4～7段階)と整合性をもつ。しかし、宮田編年は鹿児島県の資料を中心に、恵まれたテフラを基準と遺跡の出土状況からの詳細な分析から、さらにⅣ期～Ⅶ期を細別している。宮田編年ではⅣ期とⅤ期の石器群は「AT」と桜島を起源とするP17のテフラ(Sz-17:約2.3万年前)に挟まれて検出されている。古い順から、Ⅳ期は「AT」の直上で発見される石器群である。二側辺加工のナイフ形石器や搔器(エンドスクレイパー)を保有する石器群とし、この一群には剥片尖頭器や三稜尖頭器が存在しない。先行するⅢ期の系統を引く様相をもつものとする。Ⅴ期も同様に、P17のテフラの下位から検出される石器群である。さらに、その出土状況のまとまりからa・b・cの三群に細分できるとし、a群が狸谷型ナイフ形石器を主体とする一群、b群が剥片尖頭器を主体とする一群、c群が今峠型ナイフ形石器、台形石器、基部加工のナイフ形石器を主体とする一群とした。また、台形石器を主体とするc群の一部は、P17のテフラを含む層、さらにはP15のテフラ(約2.1万年前)下位から出土するものとし、さらに細分できるとした。そして、a・b・cの三群の細分は、遺跡の性格や生業の差ではなく、時期差によるものとし、Ⅴa→Ⅴb→Ⅴc期の時間的な流れを設定した。ⅥとⅦ期は、P15のテフラ(約2.1万年前)上位から検出される石器群とする。Ⅵ期は、小形化した三稜尖頭器や国府型ナイフ形石器を主体とする一群で、剥片尖頭器や狸型ナイフ形石器が看取できない石器群である。Ⅶ期は小型ナイフ、台形石器、基部加工のナイフ形石器を主体とする一群とした。特に、基部加工のナイフ形石器は岩戸6上の石器群に類似するといふ。

一方、萩原氏は、西北九州で古くから発見されている台形石器類を着目しながら後半期を3～5期に大別し、編年研究をおこなっている。3期は「黒色帯」の上位から発見される石器群に剥片尖頭器、剥片尖頭器に類似する「中原型」ナイフ形石器、角錐状石器(三稜尖頭器)、瀬戸内技法の出現、「原ノ辻型」の台形石器が多く組成するといふ。4期は剥片尖頭器、角錐状石器(三稜尖頭器)が消滅後に、「百花台型」や「枝去木型」の各種台形石器が出現、さらに「今峠型ナイフ形石器」が共存する石器群である。5期はナイフ形石器終末期とし、西北九州地域では「百花台型」の台形石器の繁栄と、石刃技法から作出される小形の縦長剥片類を素

材とした基部加工のナイフ形石器を保有する石器群としていふ。5期は石器類に細石器化がみられるといふ。

以上、三者の九州地方後期旧石器時代後半期石器群の変遷案は、AT直上の褐色ローム層中出土の石器群を細石刃石器群の出現までを3時期に大別していることである。前葉期となるAT上位下部の石器群は、九州東南部地域の第5段階・Ⅴ期(萩原3期)においては、剥片尖頭器、剥片尖頭器に類似する「中原型」ナイフ形石器、角錐状石器(三稜尖頭器)、瀬戸内技法の出現、「原ノ辻型」の台形石器が多く組成するといふ。後葉期となるAT上位上部の石器群はナイフ形石器終末期とされる。

九州東南部地域の第7段階・Ⅶ期(萩原5期)においては、石刃技法から作出される小形の縦長剥片類を素材とした基部加工のナイフ形石器や、「百花台型」の台形石器、「小形二側辺加工ナイフ」や台形石器といった小形化した石器類である。しかし三者の編年案には、これら時期に先行して今峠型ナイフ形石器を主体とした石器群、いわゆる第6段階、第Ⅵ期(萩原第4期)の設定への指摘がある。この時期は剥片尖頭器、角錐状石器(三稜尖頭器)、狸谷型ナイフ形石器等の組成上の有無が大きな基準となっている。近年、AT降下以降の時期から小林軽石降下以前の時期については3時期に大別する研究者が多くなっている。

次に、岩戸遺跡ではATの上位に褐色を呈するローム層が厚く堆積し、そこから上下二枚の石器群が層位的に検出されている。下部の石器群は「岩戸AT上層下部の石器群」である。AT降下に近い時期と考えられる。石器組成は、斜め整形の二側辺加工、一側辺加工、部分加工のナイフ形石器や、小形切出し形のナイフ形石器、瀬戸内技法で製作された「国府型」のナイフ形石器、剥片尖頭器、三稜尖頭器、周縁調整尖頭器、スクレイパー、彫刻刀形石器、チョッパー、チョッピング・ツールが組成する。剥片生産技術には瀬戸内技法や石刃技法の存在が指摘できる。調整技術の未発達な石刃技法が存在する。九州東南部の地域では、宮崎10段階編年では第5段階に相当し、宮田編年案ではⅤ期に対比される。さらに、Ⅴ期に先行するⅣ期の石器群については、縦長剥片を素材とする二側辺加工や部分加工(截断型)のナイフ形石器、エンドスクレイパーが組成し、瀬戸内技法の関連資料もみられるといふ一群が設定されている。これらには剥片尖頭器、角錐状石器(三稜尖頭器)が存在しないといふ。宮崎10段階編年Ⅳ期の石器群は、岩戸遺跡が位置する大野川流域の百枝Ⅲ遺跡、駒方古屋遺跡Ⅳ層ではAT直下の「黒色帯上部」から検出されており、むしろ「黒色帯」上部から発見される石器群に類似する点では出土層位、段階区分に相違がみられることになる。また、「岩戸AT上層下部の石器群」は宮田編年で細分された狸谷型ナイフ形石器類(Ⅴa期)を確認することができないが、Ⅳ期の石器群、剥片尖頭器類(Ⅴb期)、今峠型ナイフ形石器類(Ⅴc期)が共存していることになる。九州東南部の地域では、これらの石器群がテフラを基準にして概観すれば、ATからP17のテフラ(約2.3万年前)の間から検出されており、より具体的な年代観を知ることができる。

一方、「岩戸AT上層上部の石器群」に類似するといふ基部加工のナイフ形石器を保持するⅦ期の石器群がP15のテフラ(約2.1万年前)の上位から出土している。特に、宮崎10段階編年では、第7段階の石器群が韓国岳を給源とする小林軽石(Kr-Kb: < 16.7Ka)の直下、またはそれを含む層準から検出されている。当該期において岩戸遺跡で発

見できなかった「百花台型」の台形石器が宮崎県南学原第1遺跡、野首第2遺跡で基部加工ナイフ形石器と共存することが確認されている。鎌田洋昭氏が指摘するように、九州地方ではナイフ形石器の終末期において、西北九州では「百花台型台形石器」、東九州では「基部加工ナイフ形石器」、南九州では「小形二側辺加工ナイフや台形石器といった小形化した石器類」の分布に濃淡があり、当該期に地域差がみられるという見解に賛成を表したい(鎌田 2004)。さらに、宮田編年案では九州東南部地域においてⅦ期に先行する石器群として、三稜尖頭器や今峠型ナイフ形石器、圭頭形のナイフ形石器を主体とするⅥ期の一群が存在するという。角錐状石器(三稜尖頭器)が小形化するのが特徴とされる。そして、これらはP 15とKr-Kb(小林軽石)のテフラに挟まれて、Ⅶ期石器群の下位から出土するという。岩戸遺跡では宮田編年Ⅵ期の石器群を確認することができなかった。AT降灰以降の時期からKr-Kb(小林軽石)降下以前の時期の約1万年間を、二時期あるいは三時期に、どう大別してとらえるかは、今後の九州地方編年の画期を論じる上で重大な課題である。

3) 九州地方の前・後期旧石器時代の編年

1983年に柳田は岩戸遺跡第Ⅰ文化層の石器群の分析を通して石器組成や剥片生産技術を具体的に明らかにし、九州地方の編年的位置付けをおこなった(柳田 1983)。さらに、1986年には九州地方の旧石器時代の研究史、編年、当該期の器種の整理をおこない、今後の課題について述べた(柳田 1986a,b,c)。特に編年研究では、後期旧石器時代を第1～4期に細分して、各石器群の諸相について論じた。この考えに現在でも大きな変更はない。ここでは九州地域で発見された最近の調査事例を踏まえ、前期旧石器時代から後期旧石器時代の終末期までの編年観を素描する。なお、ここでは4期とする細石刃石器群については割愛する。

a. 前期旧石器時代

最古の石器群は九州地方に所在する早水台下層の石器群である。その年代観は約7～8万年を遡る時期のものと考えられる。石英脈岩を石材としたこの石器群は、大形と小形の石器をあわせもつもので、一部に礫を素材としたチョッパー、チョッピング・トゥール、両面加工石器を保有するものの、基本的には剥片類を素材として周縁加工した石器が多い。小形石器としては、形状が「扇形」や「背」のあるスクレイパー類を組成するものが特徴である(柳田・小野 2007)。熊本県人吉市大野D・E遺跡(人吉市教育委員会 2002)や長崎県平戸市入口遺跡(萩原 2004)等の下層の小形石器群がこの時期に相当するものである。これらの石器群も当該期か、後出する時期のものであろう。前者は石材に凝灰岩、シルト岩が多用され、僅かにチャート、石英脈岩も使用されている。後者はメノウが使用されている。これらは両面加工石器(ハンドアックス)や大形の石器類を保持しない。年代観は約6～7万年前後の時期のものと考えられる。

次に後出する石器群は、約4～6万年前と考えられる長崎県福井洞穴15層の一群がこれに近い時期のものといえよう。石器組成に形状をバチ形に仕上げるために周縁を加工した石器、彫刻刀形石器、錐形石器、スクレイパーで構成される。特に、スクレイパー類は周縁部を二次加工するのが特徴的で、一側辺のみの形態や、二側辺を収斂させて尖頭部を作り出す形態がある。基盤となる剥片生産技術は、打

面と作業面が頻りに移動するような剥離技術、円盤形石核から三角形や台形を呈する幅広剥片を剥離するような技術等である。石材には安山岩が使用されている。熊本県沈目遺跡の石器群、同石の本遺跡-8区-VIb層の古い様相の石器群もこの時期に相当しよう。この時期の石器群は前期旧石器時代として位置づけたい。

b. 後期旧石器時代

<第1期>

後期旧石器時代の初頭の石器群である。東九州地域の東野川流域岩戸遺跡の基本層序から判断すると、低位段丘直上の層からの「黒色帯」下位までとする。いわゆる「黒色部」が抜けた黄褐色ローム層から出土したものである。九州地方でも「AT」の下位には「黒色帯」が発達し、それらはセットとして把握することが可能である。「黒色帯」をこの地域での共時的な層と見なし、その下位にある黄褐色ロームや赤褐色粘土質土層の層から出土した石器群について層位的に細分すると「岩戸AT下層最下部の石器群」と「岩戸AT下層下部の石器群」の二様に細分できる。前者の時期に相当する石器群は岩戸第Ⅲ文化層の石器群があげられる。スレートを石材とした石器が低位段丘の礫層直上の層から18点発掘されている。僅少な資料ではあるが、注目される剥片生産技術がみられる。それは、分割した礫を素材とし、打面を1ヶ所に設け、縦長剥片を連続的に剥離する技術である。いわゆる祖型石刃技法に類似する。また、石器群中に1点、縦長剥片の打面の一部を除去した基部加工の「ナイフ形石器」が存在する。しかし、台形石器、石斧類は存在しない。剥片生産技術が剥片類や礫を分割して小形剥片を作出している点では同遺跡第2次調査の岩戸K文化(3点)、長崎県福井洞穴第9層の石器群もこの時期に相当しよう。第1期の古い様相は前期から後期への移行期の石器群と考えたい。

後者は岩戸遺跡第1次調査の第Ⅱ文化層(2点)、同遺跡第2次調査のJ～G文化層(坂田 1980)、大分県牟礼越遺跡第1文化層(三重町教委 2000)、宮崎県後牟田遺跡第Ⅲ文化層(後牟田遺跡調査団・川南町教委 2002)、熊本県曲野遺跡第Ⅵ層(熊本県教委 1984)、同県耳切遺跡第Ⅰ文化層、同県熊本市石の本遺跡-8区-VIb層の新しい様相をもつ石器群、鹿児島県上場遺跡第6層下部から発掘された資料が当該期の石器群に相当しよう。九州山地西側の曲野遺跡では、石器群が「黒色帯」下位の第Ⅵ層の赤褐色ローム層の上部20cmに包含されており、黒曜石の台形様石器、堆積岩系の石材を用いた刃部磨製石斧を組成し、多面体石核から剥離された剥片類とその石核類が発見されている。牟礼越遺跡第1文化層でも、石器群が「黒色帯」の下位で確認されており、台形様石器、刃部磨製石斧が出土している。新しい様相は石器組成に石斧と台形様石器を保有することが一つの特徴である。宮崎10段階編年の第1期、宮田編年1期、萩原1期の各時期に相当しよう。この時期は各編年案に微妙な相違がみられるものの、枠組のとらえ方が共通している。

<第2期>

「黒色帯」中の石器群である。「黒色帯」の上位でATが確認されるが、一部「黒色帯」中にATが含まれる場合もある。大分県東野川上中流域では、黒色帯の直上にAT層が観察されるが、この黒色帯は淡い層(上部)と濃い層(下

部)に細分することができる。黒色帯の淡い層(上部)は豊後大野市百枝遺跡第Ⅲ文化層、駒方古屋遺跡第Ⅳ層の石器群が発見されている。一方、筑後川上流域に位置する下城遺跡第Ⅱ文化層の石器群は黒色帯の濃い層(下部)に相当する層準から検出される。第Ⅱ期の石器群は「黒色帯」中の出土位置に上・下のレベル差があることから「古い様相」と「新しい様相」との二群にわけることができる。「黒色帯」の下部から出土するのは、台形石器、ナイフ形石器、小形の切出し形ナイフ形石器、エンドスクレイパー、ノッチ、鋸歯状石器が組成する。ナイフ形石器の形状は一側辺加工、二側辺加工、部分加工のものがすでに看取される。剥片生産技術には小形で寸詰まりの縦長、幅広の剥片を作出する技術が主体である。一部に打面を固定し、縦長の剥片類を剥離するものがみられるが、それらの多くは不揃いの小形で寸詰まりである。残存する石核の形状も円盤状や多面体を呈する。打面と作業面が一定していない石核から作出されるためにこのような形状を呈する剥片類が多いのであろう。この一群には薄手の縦長剥片を連続剥離する技術がみられない。熊本県入吉市狸谷遺跡下層、同県小国町下城遺跡、同県水俣市上場遺跡があげられる。

「黒色帯」上部で発見される石器群は縦長剥片を斜めに整形する二側辺加工、一側辺加工のナイフ形石器、縦長剥片を截断するような部分加工のナイフ形石器、台形石器、切出し形のナイフ形石器、周縁調整の尖頭器が組成する。調査面積の広さによって組成上の片寄りがみられるが、共通して発見される石器は斜め整形の二側辺加工のナイフ形石器である。剥片生産技術は単・両設の打面の石核から薄手の縦長剥片を連続的に剥離する石刃技法が存在する。これ以外にも幅広な剥片を生産する剥離技術もみとめられる。

以上、第Ⅱ期とした「黒色帯」中の石器群は下部に小形で寸詰まりのナイフ形石器、台形石器、切出し形ナイフ形石器を主体とするもので、下層に類似した古い様相を呈する。この時期まで九州東南部地域では石斧類が出土する。上部は石刃を斜め整形した二側辺加工のナイフ形石器や素材を生産する石刃技法を保有するもので、後出する新しい様相をもつ一群とする。「黒色帯」中における下部の様相は、宮崎10段階編年の第Ⅱ期、宮田編年Ⅱ期、萩原2期の各時期に相当しよう。また、AT直下の「黒色帯」上部の石器群は宮崎10段階編年の第Ⅲ期、宮田編年Ⅲ期、萩原3期の各時期に相当しよう。この時期に薄手の石刃と二側辺加工のナイフ形石器が出現するという指摘は、各編年案に共通してみられる。ただし、第Ⅱ次調査岩戸F文化層の資料は、僅少ではあるが、「黒色帯」の下部より不揃いの縦長剥片類を作出する技術がみられ、これらを岩戸遺跡最下層石器群の「祖型石刃技法」の流れとして位置づけることも可能である。西南日本にみられる調整技術をもたない石刃技法はAT下位の「黒色帯」中にその姿の一部を見出すことができる。

〈第Ⅲ期〉

第Ⅲ期は始良Tn火山灰(AT)層の直上から出土する石器群から細石刃石器群が出現する以前の時期までとする。九州地方では近年の調査事例において、ほぼ全域で確認されており、その下限を鮮明に追認することができる。一方、その上限については東南部地域の宮崎県で小林軽石(Kr-Kb: < 16.7Ka)の下位でその様相を確認することができる。第Ⅲ期は大分県岩戸遺跡の3回の調査により、出土層位と

石器群の技術的な特徴から「岩戸AT上層下部の石器群」と「岩戸AT上層上部の石器群」に分けた。この二枚の石器群の様相が明らかに異なることから第Ⅲ期は古段階(第3a期)と新段階(第3b期)とに細分した。

第3a期

この時期の石器群はAT層の直上か、それに近い層準から発見される。いわゆる「黒色帯」やATの上位にある「黄色のローム」や「黄褐色のローム」中に包含されている石器群である。遺跡によっては石器群が数枚発見される場合があり、これらの層の下部やAT層に近い一群を第3a期とする。石器組成は、斜め整形の二側辺加工のナイフ形石器、瀬戸内技法による国府型ナイフ形石器、小形の切出し形のナイフ形石器、各種の台形石器(原ノ辻型、枝去木型)、剥片尖頭器、三稜尖頭器、周縁調整尖頭器、スクレイパー、彫刻刀形石器、チョッパー、チョッピング・トゥールなどで構成されている。瀬戸内海周辺地域で発見されるような瀬戸内技法で製作される翼状剥片類や国府型ナイフ形石器、韓半島での出自が予想される剥片尖頭器や三稜尖頭器などは九州全域で発見される。第Ⅱ期の新しい様相を保持する石器群の技術的な伝統の中に、新たな器種と剥離技術が追加され、瀬戸内の系統や韓半島で発見される石器類も出現するのが第3a期石器群の特徴である。また、ナイフ形石器と台形石器は様々な形態を呈する。ナイフ形石器は、剥片の第一次剥離によって得られた鋭い縁辺を刃部とし、残りの部分に急峻な加工を施した石器である。この時期は、石刃を素材とした斜め整形の二側辺加工や截断型、翼状剥片を素材とした一側辺や二側辺加工の国府型、今峠型、狸谷型、小形切出し形等の各種のナイフ形石器が組成する。また、ナイフ形石器の背部には鋸歯縁状を呈するブランディングする技術が多くみられる。これらの型式の出現に時間差や地域差もみられるが、この差は第3a期の時間幅の範囲で把握しておきたい。台形石器は剥片の鋭い縁辺を刃部とし、二側辺に刃部と直行するような二次加工をおこなう形態の石器である。九州地方には、研究の当初から原ノ辻型、枝去木型、日ノ岳型、百花台型等に型式設定された台形石器類が存在する。萩原はすでに日ノ岳型や百花台型に類似する小形で整ったものが西北九州地域で萩原編年第Ⅰ期に成立しているという(萩原 2006)。さらに、不定形な剥片を素材とし、二次加工された一側辺にノッチ状の調整剥離を施す「原ノ辻型」が萩原編年第Ⅲ期に主体的に見られるという。筆者は、両側辺に内湾する急角度の調整剥離を施し、「角」があるような小形の百花台型を除いて、第3a期には各型式の台形石器類が盛行するものと推定する。九州地方の台形石器の出現は台形様石器(佐藤 1988)まで含めると第Ⅰ期の石器群から出現する。第3a期には原ノ辻型、枝去木型と呼称される台形石器が西北九州を中心とした地域に盛行する。当該期の剥片生産技術は、調整技術の発達しない石刃技法(岩戸第Ⅰ文化層第Ⅰ類)、打面と作業面を交互に入れ替えながら剥離する技術(同Ⅱ類)、石核の周縁から求心状に剥離する技術(同Ⅲ類)などがある。縦長、幅広の剥片が石器の素材に供給される。瀬戸内技法の登場。この時期は宮崎10段階編年の第Ⅴ段階、宮田編年第Ⅴ期、萩原編年第Ⅲ期を中心とする石器群に相当する。筆者は、先行する同第Ⅳ段階、同Ⅳ期を当該期の古い様相として把握したい。後出する同第Ⅵ段階、同Ⅵ期については、剥片尖頭器や三稜尖頭器(角錐状石器)類の小形化、瀬戸

内技法の存続が見られることから勘案して、九州地方東南部地域の当該期の新しい様相として包括しておきたい。

今後、当該期は、石器組成、石器製作技術、剥片生産技術を含めた石器群の全体の整理が必要となつてこよう。恵まれた九州地方南部地域のテフラを使った石器群の細分、石器組成上にみられる「今峠型」ナイフ形石器（鎌田 1999 岸田 2006）、国府型ナイフ形石器、三稜尖頭器、剥片尖頭器の存否の問題、形態上の比較、さらには石刃技法や瀬戸内技法の工程上の違いを再検討し、新たな枠組みを構築する必要がでてこよう。

第3b期

この時期は第3a期の石器群の上位で発見される石器群である。東九州の岩戸遺跡では、「岩戸A T上層上部の石器群」である。これらの石器群は石器組成に縦長剥片の打面部を基部として、基部と先端部に二次加工を施した特徴的なナイフ形石器をもつ。その他に、切出し形ナイフ形石器とスクレイパーがみとめられる。剥片生産技術の主体となるものは、分厚い剥片を素材とし、その打面から腹面と背面のなす稜を利用して目的とする小形の縦長剥片類を作出する石刃技法である。規格性が強く、生産性の高い石刃技法といえる。縦長剥片やそれを素材としたナイフ形石器の背面側にはポジティブな剥離痕がよく観察される。筆者は以前に当該期の石器群に類似するものとして、大分県片道下遺跡、製紙工場前遺跡、熊本県上高橋遺跡の石器群、同伊野第IV層、長崎県福井洞穴第VII層の石器群をあげた（柳田 1989）。その後、西北九州でも長崎県平戸市堤西牟田第IV文化層が先行する堤西牟田第I～III文化層の上位から層位的に発見された（萩原 1985）。萩原編年では第IV文化層を第4期に位置づけている（萩原 2006）。一方、百花台型台形石器が百花台第III文化層（麻生・白石 1976）、同IV層の石器群が第3a期の石器群の上位から層位的に確認されている（森 松藤 1994）。百花台遺跡群では石器組成が、いわゆる百花台型の台形石器を主体とし、二側辺加工のナイフ形石器、スクレイパーがみとめられる。剥片生産技術には小形の縦長剥片が多量に存在するが、その作出技術がまだ不明である。第3b期は西北九州では「百花台型」台形石器を保有する石器群が主体になっている。

また、近年、九州地方東南部地域で発掘された宮崎県南学原第1地点遺跡（山田 日高 2002）、同県小田元遺跡第2遺跡第III文化層（伊藤 島田 2003）にも「岩戸A T上層上部の石器群」が確認されている。ここでは、縦長剥片の打面部を基部として、基部と先端部に二次加工を施した特徴的なナイフ形石器、分厚い剥片を素材とし、その打面から腹面と背面のなす稜を利用して目的とする縦長剥片を作出する剥片生産技術と、角を持つ「百花台型」の台形石器が相伴して検出された。しかも、この石器群は南九州地域の小林軽石（Kr - Kb : < 16.7Ka）の直下から発見されている。この時期は宮崎10段階編年の第7段階、宮田編年第VII期に相当する。さらに、南九州地域では当該期に小形の切出し形石器が主体とする石器群がみられるという。鎌田洋昭氏が指摘するようにこの時期は小形の石器群を中心とした地域差がみられることが予想される（鎌田 2004）。第3b期の石器群の特徴をまとめると、西北九州では百花台型の台形石器、東九州では小形の石刃を素材とし、基部と先端に二次加工したナイフ形石器、南九州では小形の切出し形石器がそれぞれにみられ、地域的な相違が生まれる。

また、九州全域の第3a期にみられた、斜め整形の二側辺加工のナイフ形石器、剥片尖頭器、三稜尖頭器、周縁調整尖頭器類、瀬戸内技法や国府型ナイフ形石器が第3b期に石器組成から姿を消す。

以上、九州地方南部では、テフラの発達する恵まれた地帯での層位的根拠に基づく細分が今後ますます盛んになり、より細かな時期区分が可能となろう。しかし、時期区分と画期の設定は別な問題であり、九州地方では新たな視点に立った枠組み作りが必要になってこよう。

筆者は、九州地方の旧石器時代について、前期、後期に分けた。さらに後者を第1・2・3a・3b期の画期としてとらえて四時期に細別した。この画期をどのように認識し、その意義を文化的にどう説明するかが今後に残された筆者の重要な課題である。今後、筆者のもう一つのフィールドである東北地方の後期旧石器旧石器時代の編年を整理・比較し、当該期の日本列島内の文化史を考えてみたい。

引用文献

- 麻生 優 白石浩之 1976 「百花台遺跡」『日本の旧石器文化』3 雄山閣
- 阿部 敬 2002 「後牟田遺跡暗色帯石器群の剥片剥離技術」『後牟田遺跡—宮崎県川南町後牟田遺跡における旧石器時代の研究—』橋 昌信・佐藤宏之・山田 哲編 後牟田遺跡調査団 川南町教育委員会 pp. 358～368
- 池水寛治 1967 「鹿児島県出水市上場遺跡」『考古学集刊』3-4 pp. 1～21
- 伊藤栄二 島田正浩 2003 『小田元第2遺跡』高岡町埋蔵文化財調査報告書 第29集
- 大分県教育委員会 1982 津留遺跡発掘調査概報—国道326号改良工事に伴う発掘調査—
- 鎌木義昌 1960 「打製石器にみる生活技術」『図説世界文化史大系』20 日本1 pp. 42～49
- 鎌田洋昭 1999 「今峠型ナイフ形石器について」『人類学研究』第11号 pp. 135～157
- 鎌田洋昭 2004 「九州における細石器文化開始期について—ナイフ形石器文化終末期の様相を踏まえて—」『九州旧石器』第8号 pp. 99～116
- 岸田裕一 2006 「宮崎県におけるナイフ形石器終末前夜の様相—北牛牧第5遺跡第II文化層の再検討—」『九州旧石器』第10号 pp. 15～20
- 清川村教育委員会 1980 『岩戸遺跡発掘調査概報—大分県清川村所在旧石器・縄文時代遺跡第3次調査—』
- 清川村教育委員会 1986 『大分県岩戸遺跡—大分県大野郡清川村所在の旧石器時代遺跡第3次調査報告書—』清川村教育委員会
- 坂田邦洋編 1980 『大分県岩戸遺跡』
- 佐藤宏之 1988 「台形様石器序論」『考古学雑誌』第73巻第4号 pp. 1～37
- 清水宗昭 1973 「剥片尖頭器について」『古代文化』第25巻11号 pp. 375～382
- 芹沢長介 1967 「日本の旧石器（特報）大分県岩戸旧石器時代の遺跡調査」『考古学ジャーナル』No. 14号 pp. 4～5
- 芹沢長介 1974a 「大分県岩戸出土のこけし形石製品」『日本考古学・古代史論集』伊東信雄教授還暦記念会編

- pp. 3～25
- 芹沢長介 1974b 「最古の狩人たち」『古代史発掘』旧石器時代
- 芹沢長介編 1978 『岩戸』東北大学文学部考古学研究室—考古学資料集—第2冊
- 橘 昌信・佐藤宏之・山田 哲編 2002 『後牟田遺跡—宮崎県川南町後牟田遺跡における旧石器時代の研究—』後牟田遺跡調査団 川南町教育委員会
- 平口哲夫 1976 「越中山Kと岩戸Iに見る国府系統の様相について」東北考古学の諸問題
- 西川宏・杉野文一 1957 「岡山県玉野市宮田山西地点の石器」『古代吉備』第3号 pp. 1～9
- 萩原博文編 1985 『堤西牟田遺跡』平戸市教育委員会
- 萩原博文 2006 「九州西北部の地域編年」『旧石器時代の地域編年の研究』安斎正人・佐藤宏之編 pp. 207～240
- 間壁菫子 1968 「香川県坂出市櫃石島採集の石器」『倉敷考古研究集報』第4号 pp. 35～44
- 町田洋 1980 「岩戸遺跡のテフラ（火山灰）」『大分県岩戸遺跡』坂田邦洋編 pp. 443～453
- 町田洋 新井房夫著 2003 『新編火山灰アトラス』[日本列島とその周辺] 東京大学出版会
- 松藤和人 1974 「瀬戸内技法の再検討」『ふたがみ pp. 138～163
- 松藤和人 1981 「西日本における船底形石器の編年の予察—近畿・瀬戸内地方の出土例を中心に—」『旧石器考古学』第22号 pp. 1～26
- 宮田栄二 2006 「九州東南部の地域編年」『旧石器時代の地域編年の研究』安斎正人・佐藤宏之編 pp. 241～273
- 宮崎旧石器談話会 2004 「宮崎県下の旧石器時代遺跡概観」『旧石器考古学』第66号 pp. 47～61
- 森浩一 松藤和人編 1994 『百花台東遺跡 雲仙・普賢岳北麓の後期旧石器時代遺跡の調査』同志社大学文学部考古学調査報告書 第8冊 同志社大学文学部文化学科
- 柳田俊雄・藤原妃敏 1981 「瀬戸内技法と石刃技法—調整技術のもつ意味—」『旧石器考古学』第23号 pp. 29～40
- 柳田俊雄 1982 「瀬戸内技法の打面調整の意味」『郡山女子大学紀要』第18集 pp. 197～208
- 柳田俊雄 1983 「大分県岩戸遺跡第I文化層出土の石器群の分析とその位置づけ」『考古学論叢』芹沢長介先生還暦記念論文集刊行会編
- pp. 25～62
- 柳田俊雄 1986a 入門講座「日本の旧石器—第12回—九州地方(1)—」『考古学ジャーナル』No. 266号 pp. 29～32
- 柳田俊雄 1986b 入門講座「日本の旧石器—第13回—九州地方(2)—」『考古学ジャーナル』No. 268号 pp. 18～22
- 柳田俊雄 1986c 入門講座「日本の旧石器—第14回—九州地方(3)—」『考古学ジャーナル』No. 269号 pp. 35～40
- 柳田俊雄 1988 「東九州の石刃技法の変遷」『古代文化』第40巻
- 第7号 pp. 1～18
- 柳田俊雄 1989 「九州地方後期旧石器時代の終末期におけるナイフ形石器の形態的特徴—西北・東九州を中心に—」『旧石器考古学』第38号 pp. 143～152
- 柳田俊雄 小野章太郎 2007 「大分県早水台遺跡第6・7次発掘調査の研究報告—日本前期旧石器時代の編年と地域性の研究—」『Bulletin of the Tohoku University Museum』No.7 pp. 1～114
- 山田洋一郎 日高広人 2002 『南学原第1遺跡 南学原第2遺跡』一般県道副王寺佐土原線道路改築事業(船野工区)に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第50集

謝辞

東北大学大学院文学研究科 阿子島香教授, 同 鹿又喜隆准教授, 別府大学 清水宗昭氏, 宮城県文化財保護課 須田良平氏, 鹿児島県立埋蔵文化財センター 宮田栄二氏, 鹿児島県指宿市 鎌田洋昭氏に感謝申し上げます。

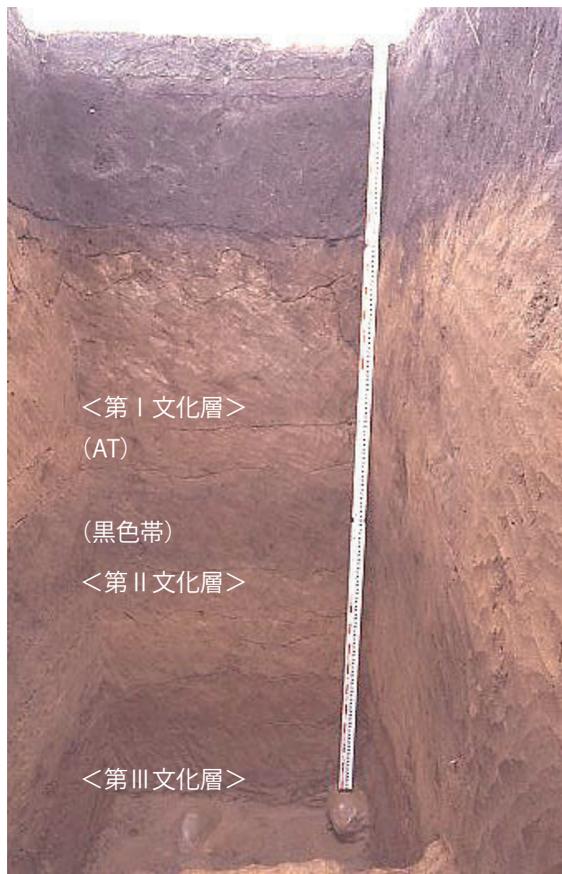
(青葉山にて)



図版1-1 岩戸遺跡第I文化層出土の石器類 (撮影 菊地美紀)



同-2 第I文化層出土の「コケシ形石偶」
撮影 菊地美紀



同-3 岩戸遺跡の層序